女學雜誌

明治三十一年十月五日發兌

第百六十六號

女鑑第百六十六號

目録

橋本むめ子



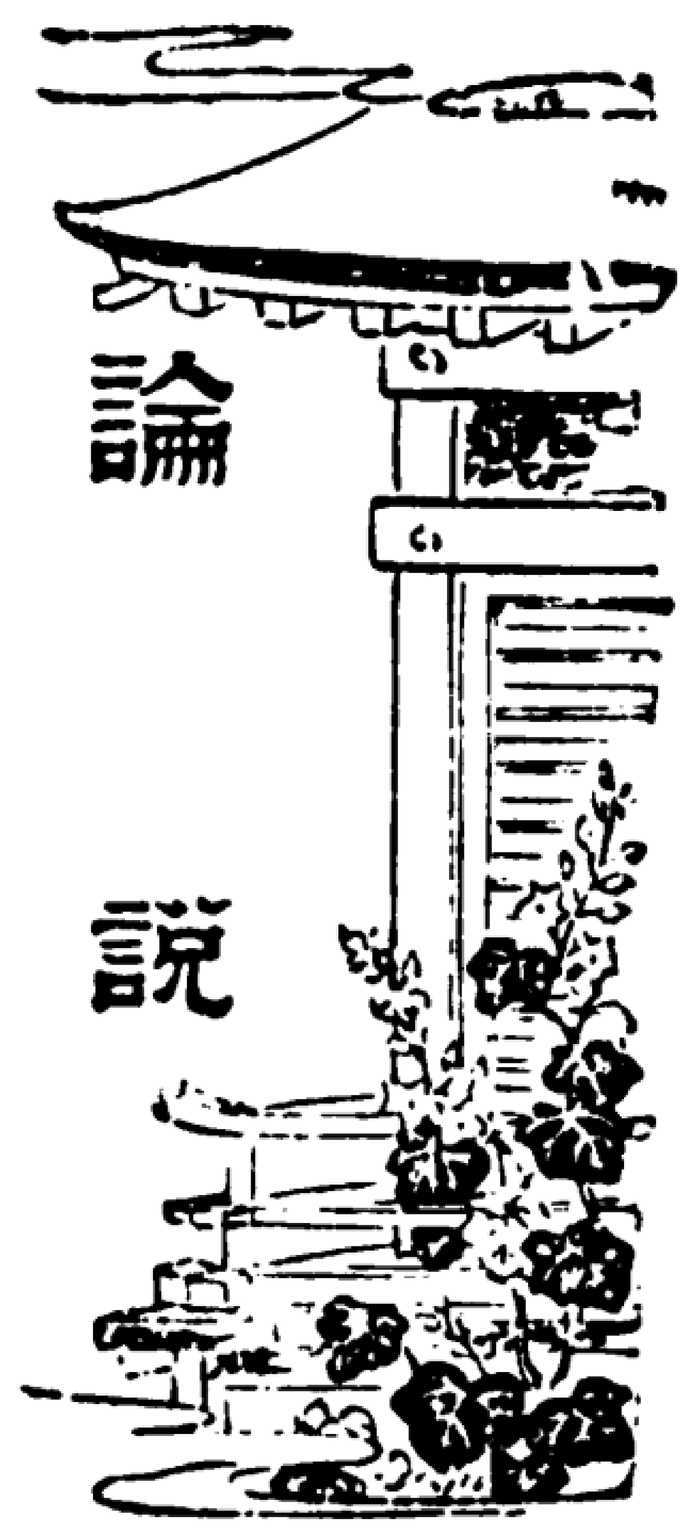
たまくらのすきまの風もさむかりき
身は習はしのものにぞありける

げに、人の身は、習はしのものにぞある。あたゝかなる團爐のほとりに、錦のしとね、綾のふすまをかさねてあるも、なれすきまもる風のうら寒く、袖もこほるばかりに覺ゆる人もある冬のま中に、吹きはらふ野風たまるべくもあらぬ荒家に、あつくもあらぬ荒栲の衣の、しかも、やれはてたるをまとひて、手もすねもあらはに、氷るばかりなる水にひたりて、紙すく少女もあるにあらずや。されど、彼れは凍えもせず、氷りもせず。自らも、さばかりさむくもおぼえず、いと心地よげなり。吹きはらふ霜風は、寒むからざるにあらず。されど、習はしとなりて、寒くもおぼえざるなり。氷るばかりの水はつめたからざるにあらず。されど、習はしにて、つめたくも覺えざるなり。また、常になれたればこそ、氷れる風に水に、かれが身の、よ

く氷りもせず、凍えもせざるなれ。または、山高く水清きわたりに、玉の床すゞしくすみても、なほ暑さは、身をやき、骨をこがすばかり、たへがたくも覺ゆる人ある夏のまゝ中に、もゆるばかりの日の光を、僅に小やかなる菅笠にさゝへつゝ、にえたちたる田のどろ水の中におりたちて、草ひきつちかふ少女もあるにあらずや。されど、彼れはやけもせず、溶けもせず。自らも、さばかり暑しとも苦しともおぼえず、なか〳〵に、樂しげなり。もとより、やくばかりの日かげは、暑からざるにあらず。されど、習はしとなりて、暑しともおぼえざるなり。つねになれたれば、さばかりの熱に、やけも仆れもせざるなり。習はしは、たゞに暑さをさむさのみにあらず。人の心がけ、ふるまひも、また、多くは、ならはしより來る。世の所謂朝寢坊、夜いつはりなどとなふるも、みな、習はしに外ならねば、勉強、怠惰、奢侈などいふも、皆、ならはしより來るなり。苦しと云ひ、つらしと云ふも、亦然り。人の善惡邪正も、大方は、この習はしによらざるはなかるべし。人の心は水の如くにして、方圓いづれにも、從はしむるを得るものなれば、深くこゝに心得なくはあるべからず。

暑き事も、馴るれば暑からず。寒き事も、なるれば寒からず。苦しき事も、つらき事も、よく、くるしからず、つらからざるは、みな習ひによるものぞかし。古の賢き人も、なほ心を苦しめて、よき習はしを作らんと心がけしを思へば、如何に、その尊ぶべく、亦恐るべきかを、知るにたらむ。されば、世の親たちは、人の善悪みなこゝに出づるを忘れず、最、庭の教に注意して、よき心がけをつくる様、心がけなば、うるはしき撫子の花の、盛りにあふ事、またかたきにあらざるべし。もし、これに反して、庭の教を怠りなば、手枕の、すきまもる風も、なほうらさむきに至らむ謹むべきことにこそ。

しら雲の絶えずたなびく峯にだに
住めはすみぬる世にこそありけれ
(これたかのみに)



罪惡に男女の差別なし

鹿山

男子惡事を作す、男子の罪なり。女子惡事を行ふ、女子の罪なり。罪惡には男女の區別ある事なし。男女を分つは形。是非を決するは理。理の當否を斷ずるに男女の形を以てするは愚者の見のみ。女子自ら好で妾に墮つ、罪女子に在り。男子敢て自ら妾を蓄ふ、惡男子に存す。其間幾多事情の纒綿するあり、屢々其理否を混ずる慊なきに非ずと雖も、苟も、一罪を犯し一惡を醸すや、必ず主從の區別なきを得ず。乃ち罪惡は其主謀者を以て最も重しとせん。眞理は必ずしも權力に伴はず、年齡に副はず。常に尊卑、利害、强弱、內外、貧富、男女等の差別外に超立す。故に以て人世の惡弊を矯むるや、唯其理否如何と顧るのみ、敢て其間に男女老少の區別あるべからざるなり。眞理の前に於ては何人と雖も同等の位置を占む。同等の位置を占むるが故に亦同等の義務を擔ふ。

人世に於ける惡弊の由來する所を見るに、頗る多岐に涉るものにして、或は上層より下

層に及び、或は下層より上層に移り、法律の疎漏に基くあり、道義の弛廢に發するあり、生活の困難、敎育の缺陷、外人の交際等皆之が原因たらざるはあらず。然れども以上の詳論は姑く措き、本篇に於ては唯罪惡に男女の差別なき理由を畧述せんと欲す。何となれば方今我邦の一大惡弊たる蓄妾の如き、其罪惡を以て女子の弱點に歸し、男子より進で之を矯正するの決心を說くもの無ければなり。賞罰なるもの素と男女の區別と相關せず、女子法に觸るれば女子を刑し、男子禁を犯せば男子を責む、彼に寬にして此に嚴に、同一の罪惡を犯して不當の制裁を受くる如きは、是れ決して圓滿完備の正法と言ふ可らざるなり。故に苟も蓄妾の弊風惡俗を除かんと欲せば、男女共に同一の制裁に服せしむるを要す。

且つ蓄妾の如きは禍源多く男子に發す。故を以て男子にして毅然自覺せば、之を制する、反掌よりも易きものならんとす。今や世の所謂貴顯紳士なる者、妾を蓄へ別莊を築くを以て資格の如く見る、何たる怪事ぞ。人爵是れ求むるに汲々たる俗界の常態たりとするも、世を擧げて人材の模型なく、國に國士の偉風を聞く能はざるは、豈惜むべきに非ずや。古來賢豪の士、數々酒色を以て事を誤る、英傑の酒色に荒むや、多く其末路と相伴ふ、而して創業自疆の士は則ち之か反對に出づ。今や滔々たる天下一箇模範的人物を求

めて得べかるず、混沌として相率ゐて末流に浮沈するを見る。家庭の秩序之か爲めに紊れ、子弟の風儀之の爲めに弛み、社會の制裁亦殆ど地を掃ふ。陋巷の賤妓華族の家庭を壞るは何が故ぞ。小學生徒喫煙飲酒以て常とするは何が故ぞ。人倫の大義と相容れざる殺人罪の頻々發生するは何が故ぞ。稗史小說の愛讀者學生中に多きは何が故ぞ。半宵孤枕、靜に社會の現情を冥想し來れは、眞に百鬼の橫行するを認む。

當代の日本人は過渡の時世に遭へり。殊に來る三十二年七月以後は內地雜居の日本とならんとす。此時に當り邦人にして事物の觀察選擇を誤り、彼我の風俗慣習に深く留意せずんば、社會上の事或は頗る憂ふべきものなしとせず。吾人は新條約實施後殊に外國人の俄然增加すべき理由を認めずと雖も、將來內外人の交際事業漸く繁劇を加ふるは爭ふ可からざる事實とす。眞に日本人の特性を發揮し、日本國の威信を伸長するに方り、何程なりとも、外國人と相異する所の文明的事物を保存する事極めて緊要とす。而して之を保存すると同時に、現存する所の惡慣陋俗は又斷然之を、悛めずんばあらず。從て我が家庭に及ぼす影響も亦甚だ狹小ならざるべし。改悛すべきもの豈獨り蓄妾の如きのみならんや、痛省せよ、我が兄弟姉妹諸氏。日本國民の同化力、進取力、自覺力を實驗するは今後に在り。日本國民が宇內の各國民と對立競爭し、これより享くべき結果果して如

何。
願ふに家庭に於ける矯弊の主任者は婦人なり。秩序紊れ風儀傾くの家庭は、其婦人必ず無教育。否らずんば必ず無責任なり。無責任とは知るも行はざる者を云ひ、無教育とは未だ學ばざる者を云ふ。賤妓一躍して令夫人と化する如き乃ち之が實例たり。家庭より進で學校に入り、學校より移て社會に出づ、之を人生の前半と爲す、學校の教育は教育者之に任ずべし。若し夫れ社會の制裁に至りては、時の貴族たり、名士たり、先輩たり、高官たる者先づ自ら之を保持するを要す。然るに方今の社會は果然正反對の現象を呈せり。悲まざるべけんや。是れ吾人が茲に男女の同罪均制を説く所以、畢竟時弊を矯正すべき各人の自動力を振作せんとするの意に外ならず。換言すれば國民の品位を今少し昂進せんと欲するのみ。然らば國民の品位とは何ぞ。曰く、富に非ず。力に非ず。唯智德の駢進是れ主とするのみ。智德幷行せざる國民は斷じて優勝の地位を世界に占むべからず、白人の所謂自讃文明國人の如き、此點より之を視る、疑問頗る多々、殊に輓近數年來、東洋諸國に對する言行に於て明かに其眞相を暴露し來る。

割烹と禮節と（五）

石井泰次郎

第二節　現今の禮節家を論ず

現今禮節家として世人の歡迎せる者は何人ぞや。或人はいへり、小笠原清務氏、有住齊氏なりと。然り、論者も亦斯の如く云はんと欲す。起居進退の總ての禮節の近世樣を止めたるに付て、世人の歡迎せる所の者は實に此の二氏に留まれるが如し。然れども、世人の觀は多く皮相にのみはしりて、深く此道に分入りて其由來を研究して後始めて之を覺りたるに非ず、なほ近世の弊習の脱せざるより、遂に此二氏が其所論意行の趣く所をも伺はずして、一考をも存せず、一は僞稱小笠原流の誤解説を迷信せるにより、一は故實家中に知られたるによりて、唯雷同的に二氏を歡迎したるのみ、されど、今二氏につきて其意見の一端を探り、又二氏が敎授の傳統を記さんに、

小笠原清務氏

小笠原清務氏は、舊幕府に仕へたりし、小笠原丹齋が孫末なり。

正三記二

小笠原丹齋源直經は先祖赤澤山城守清經より出て小笠原の一族なりし由武藝小傳に見えたり、然れば本氏は赤澤なりしを後に小笠原氏に改めしと見えたり丹齋、初は浪人にて在しを、大猷院（家光）

殿の御代召出されて御旗本の士と成たり、延寶六年戊午十二月廿日卒と小傳に見ゑたり

同記二

談海卷之廿六曰寛文十一辛亥十一月の頃小笠原丹齋へ式正の御弓矢品々被仰付出來によつて今日差上る於御座之間備上覽

一青漆御弓　二張對　一黃漆御弓　同　一赤漆御弓　同
一白漆御弓　同　一黑漆御弓　同　一三所藤御弓　同
一村重藤御弓　同　一兩食御弓　同　一卦朱御弓　同
一紫漆御弓　同

以上　右何も袋に入

御鏑矢十二筋

一愛敬之御鏑矢　一手　一三角之御鏑矢　同　一染羽之御鏑矢　同
一楊柳之御鏑矢　同　一荒目之御鏑矢　二手

以上

貞丈曰右の御弓の中、三所藤、村重藤、黑漆は古書にも其名見ゑたり、青漆以下黃赤白紫兩食卦朱等の弓は古書に曾て見ゑず、又品々の鏑矢も古書に曾て見ゑず、小笠原家の古傳書共に其名見ゑざれば其製作の式は猶無之、是皆丹齋が妄作也、荒目にて釉頭作る事は、高明聞書に見ゑたり、あらめにて鏑矢作る事、古傳には見ゑず、又弓を一對と云て、二張つゝ同樣にそろへて作る事、古代には曾て無之、進

物にも二張は贈らぬ事也、二張の弓を引きて忌む事也、若し人に二張贈る事あれば、一張をは張替さ名付るなり

右丹齋調進の御弓矢の制は小笠原の古傳書に曾て無之事なれば、其故實に非る趣を記したる也然れども丹齋小笠原を名乗る家なれば定て、古傳書の外に別に深き秘傳ありて調進したる者なるべし、右の如くに記せば他の家を誹謗に似たり、他人に對して語るべきに非ず、唯我子孫心得の爲に、私に是を記し置く也、今も丹齋が子孫御旗本に在り名を平兵衛と云也、小笠原は源氏なるに代々平兵衛と云ふも何故ありて平の字を付るか(正三記は安永二年正月之記)

同記の末に

小笠原丹齋が家は、世々禮を傳へ、又騎射の御遊の爲に、是が師たり、いよいよ小笠原流の全く傳る様にて世には尊位する望おほし、然れども安齋翁が○○如く丹齋誠に小笠原血道にもあらず謂る所、傳ふる所も正しからず、しかし代々平兵衛を名とするにもかぎらす、孫七とも云事あり、又平八と云ふ名を嫡子の名に用ゆる事聞し

文政元年冬十二月　源時彰しるす

かく見ねたるが如く、舊幕府の常日の禮をかねて、騎射の方にて仕へたりし赤澤氏が、小笠原の流をくみたるなり。されど弓馬の故實家にはあらずして、近世の弓馬家の内に數へつべきなり。さて常日の禮とは、是足利時代に、伊勢家にて傳へたりし禮節の、片端

を、弓馬の禮に附會して執行せしならん。さならずど、弓馬の家なる小笠原の姓を附て世に現出せる者が、其家柄にあらざる起居進退の禮節を、殊更に設け出づべき理由あらざれどなり。

然り而して、弓馬の禮節ならぬ、起居進退の方なる禮節を水島が小笠原流と稱して傳へしより、之を幸ひに、牽強附會して明治維新以後、猶、正統には非ざるも、小笠原流なる近世弓馬の家門の下に、其名を止めたりしは、時勢變遷のしからしむる所とは雖、實に是、亦二百年間の謬傳誤解説の餘波の此門に及びたるならずして何ぞや。又傳聞する所によれど、某氏ありて、禮節教授法を定め、弓馬の外に是を教授せしめたるにて、先生は是によりて、教授しつゝ有るのみど。夫或は然らん。清務氏は自ら、水島設立の禮節を取捨して、教授の門を開かるゝ事非ざるべし。

近世より、轟かしたる、馬蹄の音の間斷なく、弓弦の響のたかくきこえたる小笠原清務氏が、專門教授する所は、なほ其弓馬の道なり。なほ其弓馬の道に附きたる禮節なり。其外に水島が設立せる近世樣の禮節によりて、現今に應用せらるべき教授する科目を置て、門下に教授すとも、そは同氏か專門に非ざれど、禮節教授者を以て、氏を目する事あたはず。

世人は、水島か流名、即ち僞稱小笠原流の禮節を迷信して、小笠原清務氏をも同姓なるに依て、是を禮節家として歡迎すれども、我は僞稱小笠原流の禮節、即ち水島が流名を信せず。されど、唯弓馬の禮節家として、唯近世弓馬の禮節家として氏を歡迎せんと欲するのみ。

故に小笠原清務氏は禮節家にあらず、起居進退、殿中日常、諸祝儀式、婚禮式日等の事を敎授すべき禮節家にあらざるなり。小笠原氏を名乘りたるは即ち弓馬の家にして、禮節家ならざるの明證なり。

現今氏が門下に敎授せる弓馬の事は、論外に渡り、且我が知らざる所なれど云はず。禮節の事は、其敎授方法に付て陳述せんと欲すれども、こは氏が專門に非ざれどあながちに、論難すべき所に非ざるべし。爰に於て論者は鶴首して待つべき事あり。そは氏が門下に習學して、氏が所論を確め、氏が傳授を修業して、小笠原の三文字を以て、諸禮節の頭上に若冠せしめんとする諸子は、余が此の論に反抗して一大打擊を與へられんこと是なり。

女德のしをり（十四）

三輪田眞佐子

第二猜忌　婦人はたゞに其の良人に對して嫉妬の惡性あるのみならず、往々一般の人に向ひても猜忌の毒を流す傾きあるめり。すなはち、他人の美事を惡み、善業を歡ばざるあり。己に勝る高德秀才の人を忌むあり。あるは我が子に優る隣家の兒を羨み、將た知人の令聞を聞きてこれを傷けんとする如き女子多しとかや。果して然らば、速に猜忌の心を矯めて、女子の本性なる博愛の德に歸り、憂も衆と共になし、樂も衆と共にするやうつとめざるべからず。

猜忌の惡性は女子のみに限らず、男子にも多少あるならんといへども、比較上、女子に多くして男子に少なきは如何なる理なるか、そは、天職か、そもそも習慣か、思ふに猜忌の源を考ふるに、凡そ知識少きものは、つねに人に先んせらるゝを以て、これを恐るゝより、遂には猜忌するに至ることもあらん。天命にも戻りて、事の成功を望むより、他人が享くべき因ありて享くる榮譽を怨み、おのづから猜忌することもあらん。或はその胸襟小量なるため、我が位置を他人に奪はれんことを恐れ、且つ他人と競爭せんとて猜忌の心を生ずるものもあらん。兎に角、猜忌の心は天性にあらずして境遇より來るものならんかし。

されど、女子も完全なる敎育を受けて、充分なる德と智とを得るに至らむ、おのづから公共心を生じて、他人と共に進む覺悟となり、若し競爭せることあらんも、君子の態度を守り、あるは人に劣ることあらむ、我を猛省して憤發すべし。などか天を怨まんや。更に智に富まむ、疑惧の念慮を去るを以て、おのづから猜忌の端緒なる邪推などをせざるに至り、遂には光風明月のごとき淸き女子となるを得べし。たとひ、いかばかり巧言令色を以て外容をつくらんも、苟くも猜忌の心に汚されんか、あはれ、これに接するものはさながら蛇蝎の如く遠くるならん。況して猜忌の心を根絶せざるときは、つねに他人の榮枯盛衰を見て、我を憂苦せしむる種と化するに等し、誠にあはれむべきなり。

第三陰密　女子は、寡言の德、靜淑の德あるこそ望ましけれ。されど、これに似て非なるものあり。そは陰密の惡德にぞある。元來、淡泊なる性質を懷きながら、多辯の弊に陷らず、天眞爛熳の氣風にして、然かも粗野に流れざる女子こそは、眞に寡言靜淑の德あるものと言ふべけれ。若し、肝膽相照して、睦がたりすべき關係ある人に對して、なほ萬事を包み、あるは果すべき業をも荏苒して行はず、反りて不平の色ある如きは、なべて陰密の惡德ある女子に多けれど、女子は幼より、理を撰はずして事を秘密にし、亦公にすべき、言をも陰語するなどの惡慣を作るべからず。そは、溫和沈默の德を養はん

とて、反りて陰密の素を作るに至らん。

徒然草に、女の性は皆ひがめり、人我の相ふかく、貪欲はなはだしく、物の理を知らず、唯迷のかたに心も早くうつり、詞も巧みに、苦しからぬ事をも問ふときはいはず、用意あるかと見れど、又あさましきことまで問はずがたりに言ひ出づ、深くたばかりかざることは、男の智慧にもまさりたるかと思へど、その事あとより顯はるゝを知らず、すなはならずして拙きものは女なり。云々とあり。そは兼好法師は、特に女を以て、人生になくも可なりと言ふ持論より出でし説なれど、極端に流るゝものならんも、今日實際、世の婦女に交り、試むるに、殆どかゝる氣味あるは事實なり。されど、女子たるもの、能く省みてかゝる僻性を去らざるべからず。他山の石もてわか玉をみがくべしと、兼好の語も、採りて女子の戒となさむ、おのづから女子の品位を高むるに足るべし。

おのれは、陰密を以て女子の天性とは認めず。おもふに、これまで女子に教育を加へざるより、唯深密に鬱せし氣風が、たま〳〵世人と交るとき、陰密の惡德となりて散ずることもあらん、寧ろ今日は、陰密の氣風が、遺傳性となりて女子に存するものならん。如何となれど、現に教育を受けし女子だに、往々陰密の風習ありて、所謂女子と小人とは養ひ難しの古語を、無用に變せしめざるは、遺憾のことにこそ。現今教育の力を以て、こ

の悪習を洗除して、遺傳の源を塞かずは、いよく女界の恨事をして、幾世の後までも絶ゑざらしむるならん、實に赤心を人の服中に置くぞかり公明無私の徳なくぞ、なかく女子の天職を盡すこと能はざるべし。



橋本辰次郎、むめ

鹽井ふく子

孝なる人の子の中にも取分けてあはれなる孝子、兄を辰次郎と呼び、妹をむめとて、栃木縣、下野國、安蘇郡富岡村の農民、姓を橋本と呼べり。村の名は富岡とは云へど、むめ女が家はいと貧しく、殊に父も、祖父も共に養子に來りたるものにて、祖父は祖母せんなるもの丶中年の折り、母のます女と祖母とを捨て丶去り、何處を家と定めてか、橋本の家には又住まずなりたり。祖母は、また、他夫を迎へず、まづしき、家たゞます女を黄金にもまさるがねにもます寶として、ひとり田をつくり、機を織り、さびしき孤燈のもとに糸を繰りなどして、細き煙りを立て、やうく母が人となるを待ちて、養子を迎へけるが、之もまた之を養ふ事能はず、親も子もある妻をぞすて丶、他處に住家を求めぬ、辰次郎、むめは實に其父の子、未だ東西も分らぬ二葉の程のことにて、父世にありながら面影は知らぬ、不幸の孤兒なり。

吾が背子が衣春雨ふるころは、あら小田すきかへすもなほたのもしう、裾吹きかへす秋の初風もうら珍らしきはどに見てしを、夫にすてられします女は、うき世

を秋風の悲しく、うらめしく、ひたすらにすみわづらへど、流石に世をも子をも捨てがたく、祖母と共に田の事をとりて、かつ〳〵二八の幼兒をはぐゝみぬるはゝその露もまたあはれなり

さるほどに、慶應二年七月のことなり、母變りたる樣子もなく起つて厠にゆき出で來りしが、俄かにうち仆れて、息も絕えけるに、人々あわてさわぎ、水よ藥よと介抱し、床に舁き入れ、醫師を招きて診察を乞ひしに、こは慢性子宮炎症にて、この病は如何に治療を爲すとも、叶ふまじと云ふに、なほ他の醫師を招ぎけれど、同じ診斷、同じく治療叶はぬよし云ふに、家內いたくなげけど詮方もなし、母はそれよりげに頭上がらず、頭痛はげしきさまにて、つねに眼を閉ぢ物をもえいはず、たゞ人なき折りふし、祖母と少しく話すも、いとまれにて、いかにもあやしき病、もしは狐狸などの憑りけるものにはあらずやと、祈禱にまで心をつくし治療叶はじと云へど、萬一もやと思ふ心をたのみに、貧困の中、醫藥手を盡くしたれど、効は絕えてなかりけり、時に辰次郎甫めて八歲、むめ七歲、いづれもいたづらの盛り、蟬を追ひ、かげろふを捕ふべき年波なれど、二人は天性至孝、母がいたづきを身にしめて、そゞろに悲しがり、はやく祖母を助けて、兄は小さき手に、鍬鎌を持ちて、朝より共に田に下り、草を刈り、水をかひ、夕べまで勞働すれど、妹は終日母の傍らに坐して藥をあたゝめ腰をさすり、さま〴〵に心をつくして介抱なす傍らくりやの事までもとるけなげさ、かくて、兄妹やう〳〵年を積むとは云へど、まだ兄は十二歲、妹は十一歲、すみれつむなにあこがれぬべき人生の春時、兄妹は知らず、たゞ世を春雨のふるまゝに祖母はいたく、ふりゆきて、年來つかひならしたる鍬の手も鈍く、はては全くきかずなりたり。二人ははやく反哺の孝つくさんものとて、辰次郎は夙に起きあら小田をかへすかへす藥草を得て、祖母と母とに供するをたゞ三春の行樂とすれど、妹もまた、みどりの髮の

額にこぼるゝをたぐらんすべは知らねどはやく青柳の糸くりためては、機織ることを習ひればね、露と共に起き伏しゝて、食をとゝのへ、機を織り、たゞ一心、一年三百六十五日、祖母と母との用事ある折りならでは、元旦と云へども、はた織る聲の絶ねし事なく、二人心を盡くして生計を營み、己れ等は冬の寒き日も、肘もあらはなるを着れど、祖母と母とはあたゝかく着せ、己れは三度の食も飽くを覺ゆるときなきも、二人には好飼をもとめてすゝめ、手作りと丹精とに穫たる新穀果物、とりて二人に供し、老祖母が喜悦の貌、病母が愁ひの眉を開くを、こよなきたのしみとし、露霜いとはるゝ撫子が花の盛りを、あらき風に吹かれ、雨にうたれて、兄は終日田の業をとりて、つゆなやむさまを見せねど、妹は晝夜、母が看病、祖母がみとり、熟炊の事汚穢の片付け等、機織る片手に引きうけ、なは玉の緒のいとくるしともせず、兄妹心をつくして祖母、母を養ひけるに、近里の人々いたく感じ稱し、事遂に縣に聞え、明治九年四月縣廳、兄妹を呼び出して金圓を賜ひ、ふかく其善行を賞され、やがては都に傳はり、東京繪草紙にあらはされて、汎く人の子の龜鑑とたゝへられたり。

兄妹はその恩賜を感じ、いよ〳〵孝養怠らず、兄は出でゝは農事をはげみ入つては祖母病母に孝養を盡くしぬ、妹は殊にひねもす機れる業をいそしみ、また片時も母が病床をはなれず、たゞ庭外の地を踏みしは、賞金下賜に付き縣廳に召出されし折りと、暴風の爲め居宅を、吹き潰され、假りに居を移せし折りとのみなり、人その謹孝勤勉なるを愛し、婚儀をすゝむるしど〳〵なれど、むめ女はその身のなるはてを省みず、たゞ老人、病母をおきて、他に行くに忍びずとて固く辭みて肯はず、兄もまた妻を娶らで、孝養を欠ぐ事あるも知らずとて、親戚近隣のすゝめを容れず、兄妹誓て孝養をつくしぬれど、母は天命なりけん、二十四年の久しき孝子が介抱をうけたれど、遂に病の床をはなる

ゝこと能はず、明治二十三年一月十九日冬がれの草となりゆきたり。あはれ兄妹は悲しみに前後もわかず、なき沈みけるに、吊ふ人、袂をしぼらぬはなかりけりとなり。事遂に公に達し、いたく其孝養を賞され、明治二十三年三月褒章を賜はりて、其善行を表彰せられ、汎く世の龜鑑とせられけるもうべや、げに今の世にはめづらしき孝子孝女なりけり。

福女

山本正周

肥前の國、長崎の人某の女福といへるは、二兄吉兵衛久兵衛と共に母に事へて孝心深かりしが、其の家もとより貧しかりければ、兄弟三人力を協して、蓆を編むを業とし、之を賣りて錢に代へ、糊口の資となせり。其の家の前に一寺あり、母之に詣でんとて家を出づれど、三人必ず其の前後を擁して之を抱扶し、雨雪の日には母を負ひて之に詣づるを常とせり。かくして三人とも、娶らず嫁がずして母を養ひ、その悦の顏を見てこよなき樂としけるが、母死するに及びて、三人とも喪中の謹みは常人の及ばぬ所なりしと。其の後幾程もなく二兄は世を早くせしが、福女は六十に至るまで壽を保ち、官より篤き賞詞を受けたりしといふ。



包の記

有住齊　教授

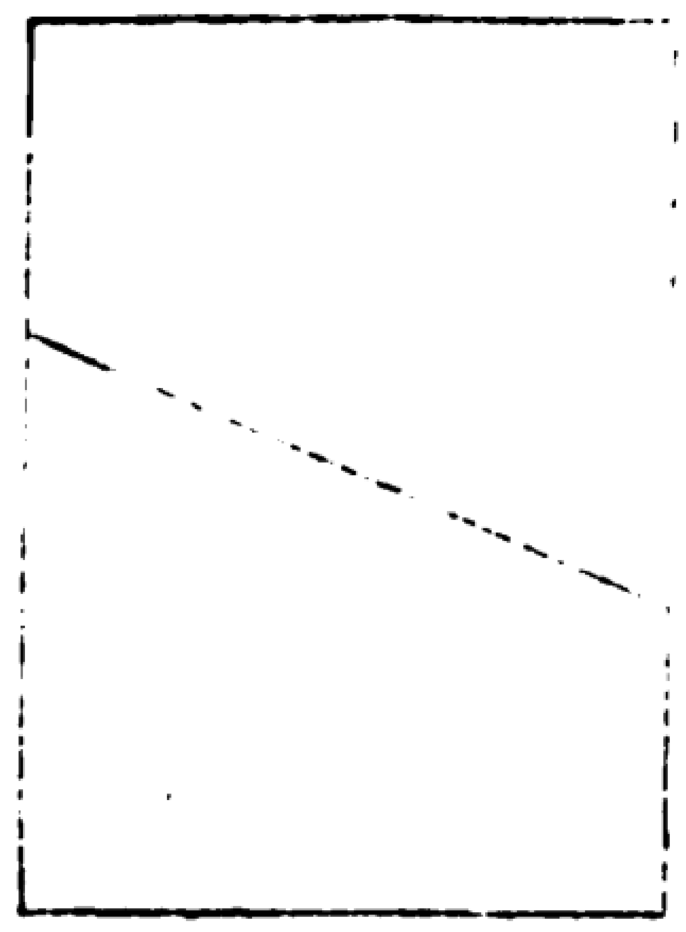
門人平なみ子
小林眞子筆記

行の兜形

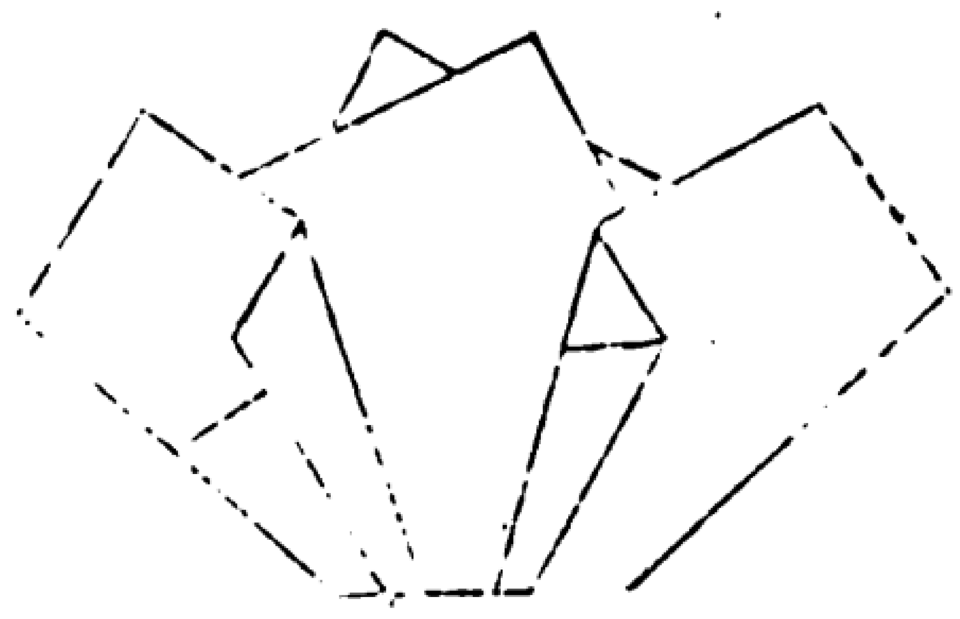
是は眞の形と同じ所に用うるなり。上中、下の位によりてかくは、別ちて用

う、行は中の位につかうべし。

第一



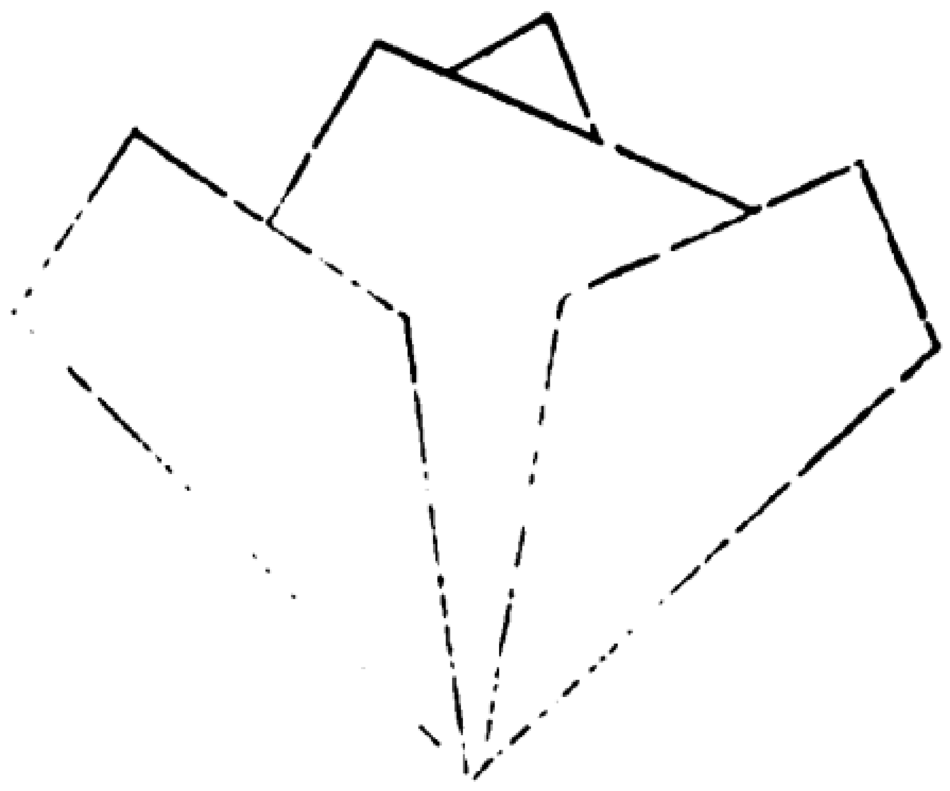
折り上り



第二圖



第三圖



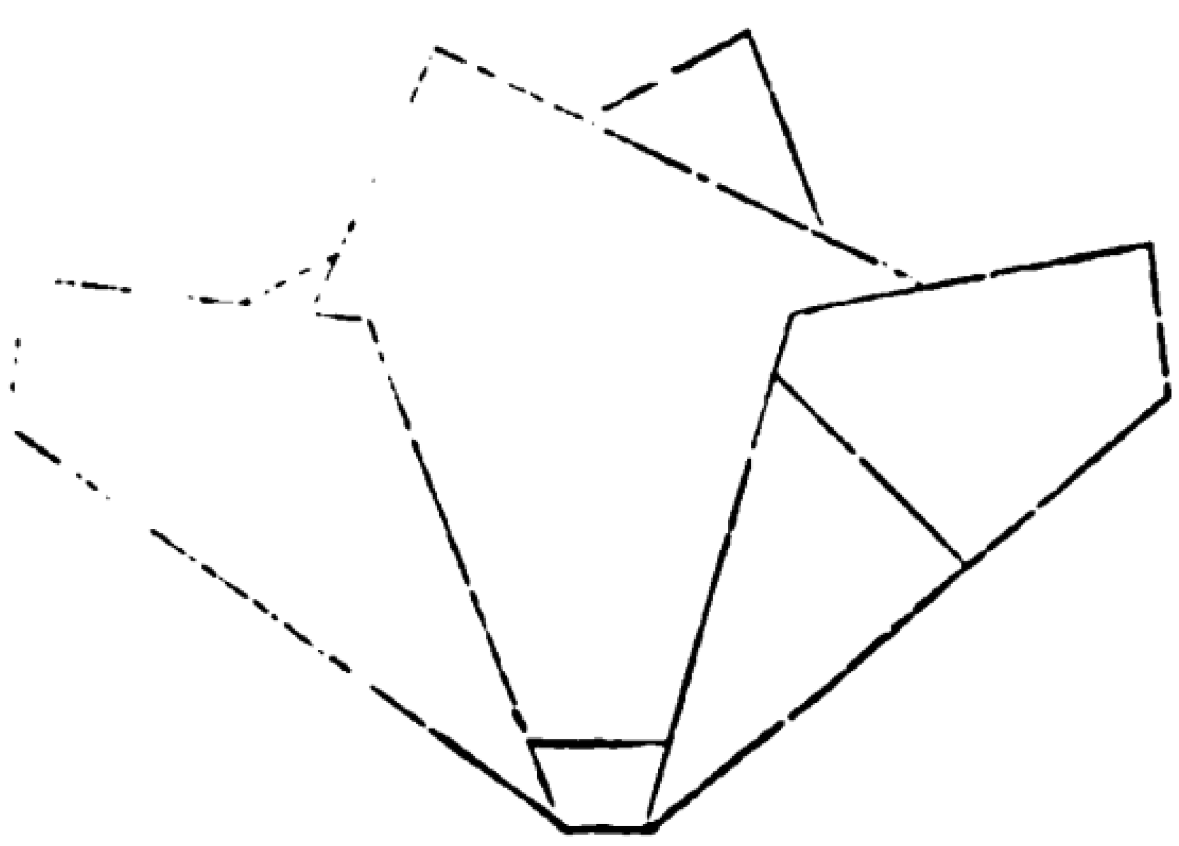
第四圖



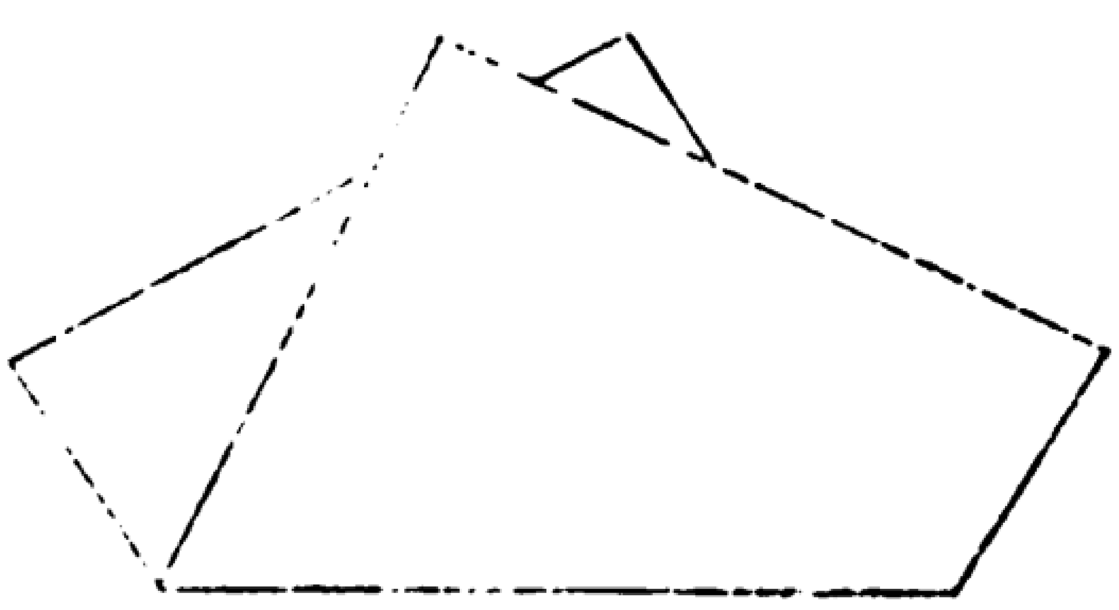
第一圖の如く、裏曲の方に紙取をして、(ウラカ子前前條に出せり)ふたつに上の方へ折り、第二圖の如くなれるを、眞中の下の方へ標を付れきて左右より折りて、第三圖如くなして、第四圖の如く其兩端を左右へ折返し、下の點線の處を裏の方へ折りこむべし。紙は二重にても三重にてもよし。眞も行も草も同じ色なる、菖蒲重を用うべし。表青色、裏紅梅の色なり。

草の兜形　用ゐ方は右に記せり、紙も同じ事なり。

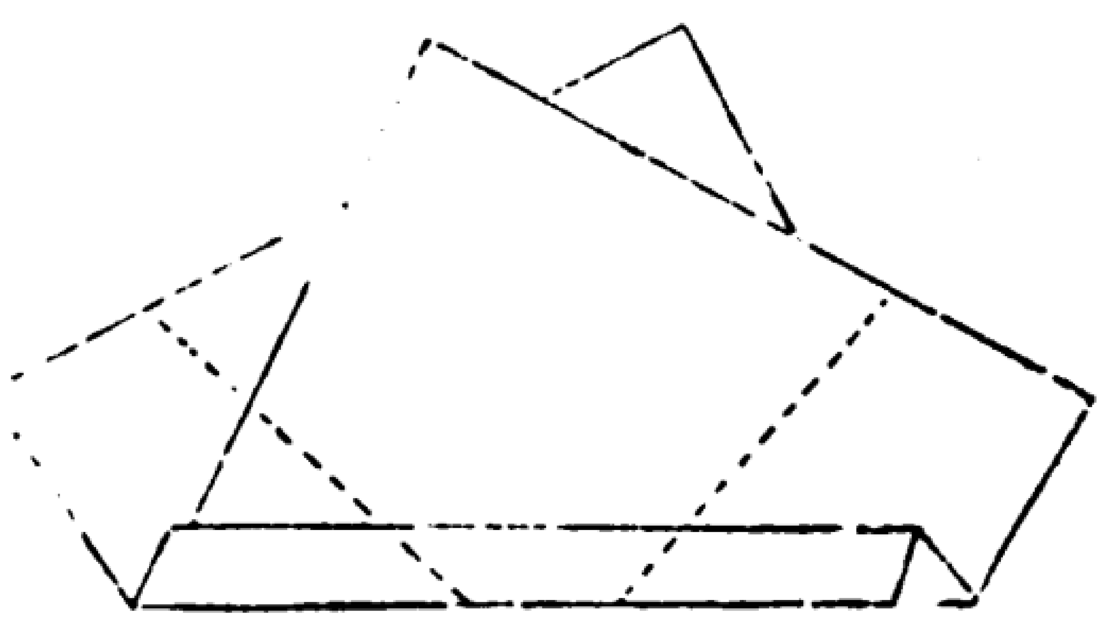
折り上り



第一圖



第二圖



第一圖　是も裏曲の方の紙取にして、二つ折に折るべし。

次に第二圖の如く、下の方を一つ折て、又左右より點線の處を表に折り合すべし。

茶の湯

茶禮初學（續）

關　葦雄

次に手拭を出し兩手を拭ひ、徐々歩行して路次の樹木飛石の配置に心を用ひ、古歌に、路次は只浮世の外の道なるに、と云ふを思ひ出て、神魂を靜淑にすべし。蹲石の前に蹲踞先手拭を出し置、水を汲て手を洗口を嗽ぐべし、（但し此水の遣ひ方は茶道客方心得草の所に巨細に云たれぞこゝには見合すべし）次に手拭にて兩手を拭ひながら其處を離れ、手拭を收め、謹で潛り口の上りの一番石に蹲踞て、戸明掛ある所に手を掛て靜に押明べし、而して敷居に兩手を突、席中の都合、床の掛物、風爐釜の有場を認定すべし。此時次客は手水石の前に進往事上客の如くし手水を遣ひ申可き事、次に上客潛り上り、振向て草履を靴脱石か、經布板へ裏を合せて立掛べし。又振向て床の方に向ひ、立て床前に進み、前の疊に坐し、扇子を扱、右の膝の側に置、掛物に對し一禮して兩手を突き拜見すべし。此時次客は潛り口に臨み、三客は手水鉢石の前に徃と心得べし。（但し末座は、待合の煙草盆等を始發置付有りし通りに直し置べし。路次進行の方法は、不レ付不レ離雁行と云利休居士の教也。依て飛石二個は必ず置て歩行すべし、譬大路次にても、跡に客の見ゑざるは寂寞也。又去迚餘り近寄候ては追駈子の如くなりてうるさし）掛物見法は茶道客方心得草の所に言ひたれども、尚言はんに、第一に何人の書たるかと云ことを見て、偈歟、禪語歟、詩、歌、連、

俳、何れも其意を了解して意味を得篤すべし。次に表装は一文字、風帶、中廻し、上下軸と云順序に、金襴、純子、或は絹、何布と云事を鑑定すべし。次に掛物の係り方、卷緒の引方迄心を用ひて見るべし、見終りたらば一禮をなし、扇子を持ちて風爐釜の前に往、釜、及風爐灰の作方、棚の飾りをも一覽すべし。此時次客は床の前へ往、上客は見合、假の座に着坐す、次に次客風爐の前に往、三客床前に往、四客潛り口に臨み、段々如斯して末座入仕舞たらば、潛り口の戸を微音有樣に建切べし。（但し是は二三寸程明置て、音出る迄力を出して急に建切べし。尙口傳、末座拜見終りたらば一同に立て各本座に、着座すべし、此の時亭主は此建切の音を聽て手水鉢の水を差足べし。次に亭主は勝手口の外に控へ、客の座定りたる哉否哉を窺ふべし。客方は座定りたらば好良掛物に有之抔と一二の客賞美の言を申すべし。又亭主は態と咳拂をなし太皷張を明けて挨拶をせんとの形姿を爾すべし。上客は一膝進み出先々篤と御入可レ被レ下と云、亭主は然らば御免を蒙ると云て席中にすべり入べし、先第一に總方時候の禮辭を述べ、扨今日は御多用の中能こそ御出被レ降、千萬忝存候、寛々御咄し可レ被レ下杯と云べし。客も同樣、本日の御茶事能こそ御催、相樂推參仕候、御前禮にも參上不レ致、端書抔にて失敬の事共に有之など世辭をも交へ云ものなり次客以下各自に挨拶應答あるべし。

（以下次號）

女禮（續）

禮節教授　有住常子

本一二三の膳進め樣

本膳は左の手を膳の下に入れてうけて、右の手にて縁をうけて持て、まづ爪立て、右の膝頭を少しうかめて

右に腰を捻りて、眞直に立ちて左足より進みゆくべし、膳の上に息のかゝらざる様心して高く持て臂はらぬやうに持て出るなり。二三の膳は兩方の緣をもちて出るなり。本膳の時中座あるべし。

本膳持て御前ちかく至りて、程を見斗らひ、左足を半足引て、左膝より跪き、右膝をもつきながら膳を置くやうにかまへて、右膝を少し引て、踵を平らになほし、左膝をもかくなして居りて、膳を据て、左右の足を大指を中の方、四の指を外の方へして、押進て置くなり。さて左右の手を膝の前に引て付て、右膝頭に右の手の平をそへて跡へ引て爪立て、次に左膝頭に左の手の平をそへて引て爪立て、又右膝頭を少し押て引て、右膝頭をうかめて、眞直にたちて、右足を一足引、左足を一足引、右足を、左足の後の方へ横に引、左足を、右足の前の方へ竪につけてめぐりて立かへるべし。二三の膳の出しやうも同じ事なり。

○中座とは既にも出せる如く、次の間、梱外にて膝そろへたるまゝ跪きて、御前の方を伺ひて、直ちに立ゆく事なり。

○二の膳は中座なくして、持出て、御前より右の方へ据べし。我方より左の方也

○三の膳は中座なくして、持出で御前より左の方へ据べし。我方より右の方也　三の膳出して立歸る時には左にめぐりて立かへるべし。めぐりやう、右の方の反しにて左足より引はじめて右を引、左を右のあとに付て、右を左のさきに付てめぐるなり。

右は正面に出す時の樣なり、正面に一人にて出す時の樣なり。

同　横座

本膳を持出で中座をなし、右の方に御座ある時は、持出で立止り左足を、右足の先の方につけて右の方にめぐりて、進みて左半足ひきて左膝を跪き、右膝をも跪き、右左と膝を引て座りて、膳を据て、足を押進めて置て、兩手を膝頭に引て、右膝頭に右手をそへて爪

立、左膝もかくして爪立て、又右をすこし引て、手を膝の上へおきて右膝頭をうかめて、右の方下座の方へひらきて、下座をむきたる時たちてかへるべし。

二の膳の時は、本膳の前程に居る樣にして、すこし筋違に押し進めて本膳の先の方に置くべし。立かへる時には、本膳の手前まで、左右の手をつきて、右の手を引て、左の膝を引、左の手を引て、右の膝を引く、かく三度四度して本膳の手前はづれたる所まで引て、さて右膝をうかめて右下座の方へとめぐりて立てかへるべし。

三の膳は、すこしすちかひに押て進めて本膳の手前の方に置て、立かへる樣は別の事もなきなり。

○幾人にて出すも此心にてよろし。

此本二三の膳出しやうは稽古の樣なり。

本膳には

膾　汁

香物　箸

坪　飯

二の膳には

平　汁

箸

猪口

三の膳には

差味　汁

箸

猪口

此置方も稽古の時の置方なり、式正にはあらず。

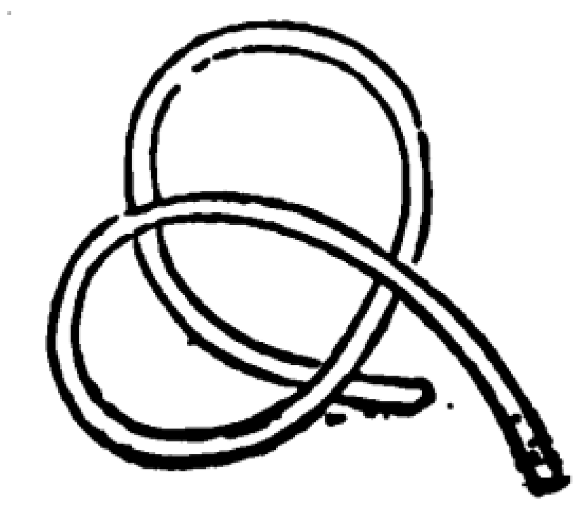
新撰結物百種　　百草菴一無

淡路結　當節は何に用ゆるも苦しからず、

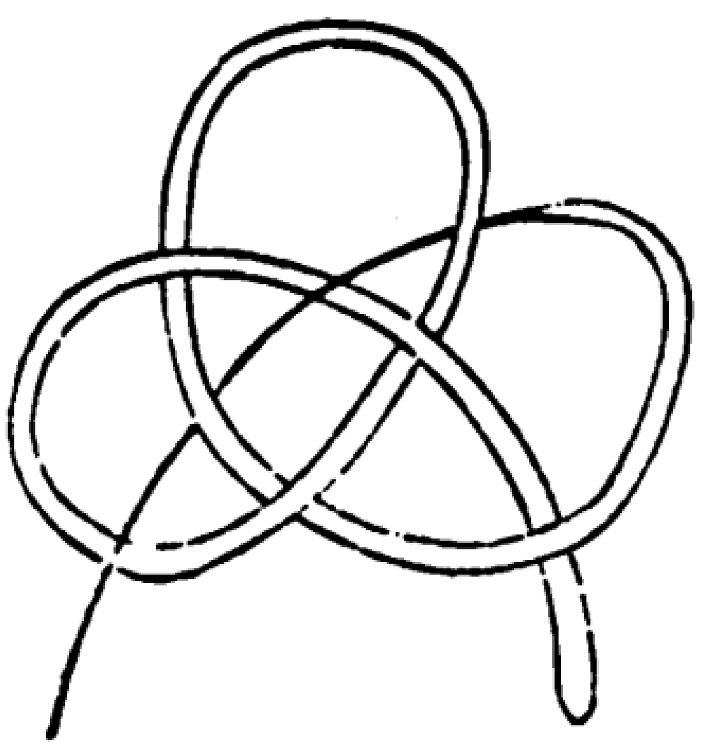
（石井泰次郎云　淡路結とは云ふべからず、あはび結とて蜷結に對して其形によりて名付けたるなれば蚫結と云ふなり。又二葉の葵に似たり、あふひ

結といふは此故なるべし。又是をあはぢ結、あふひ結など云ふは非なり。古書には皆あはび結とありと伊勢の翁が結の記に見えたり。又同翁隨筆位袍百二段に此結の事あり。又萬葉集四、玉緒乎沫緒附搓而云々、伊勢物語、拾遺集の歌、枕草紙などに見えたり。用ゐる樣は、厨子、泔杯の臺の打敷樣の物に用ゐべし。又水引にて結びて銚子瓶子の蝶、又伸蚫包の飾に用ゐるされたり。)

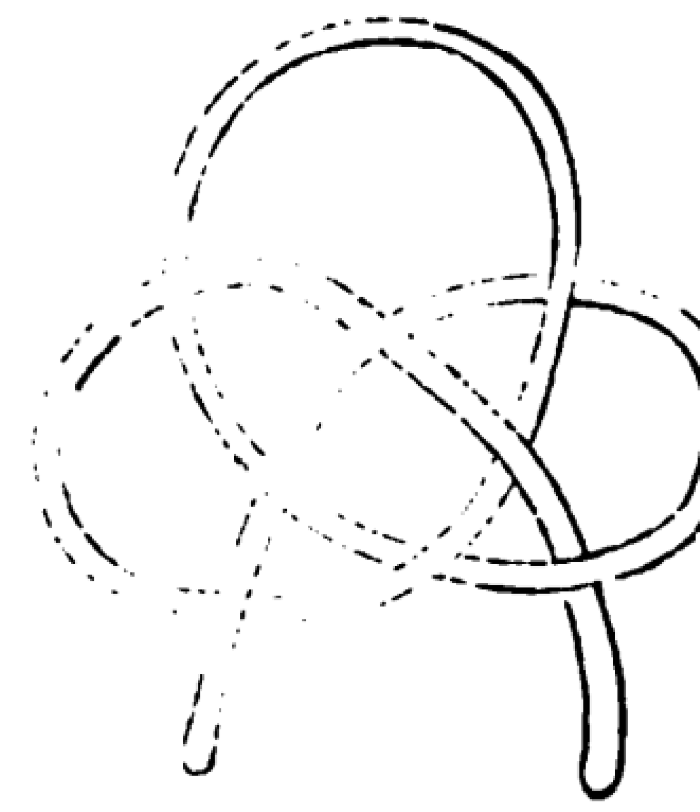
第一圖



第二圖



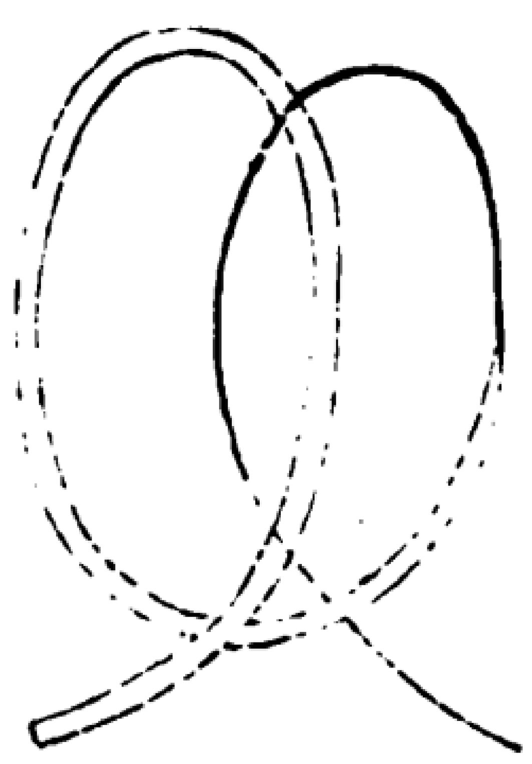
第三圖



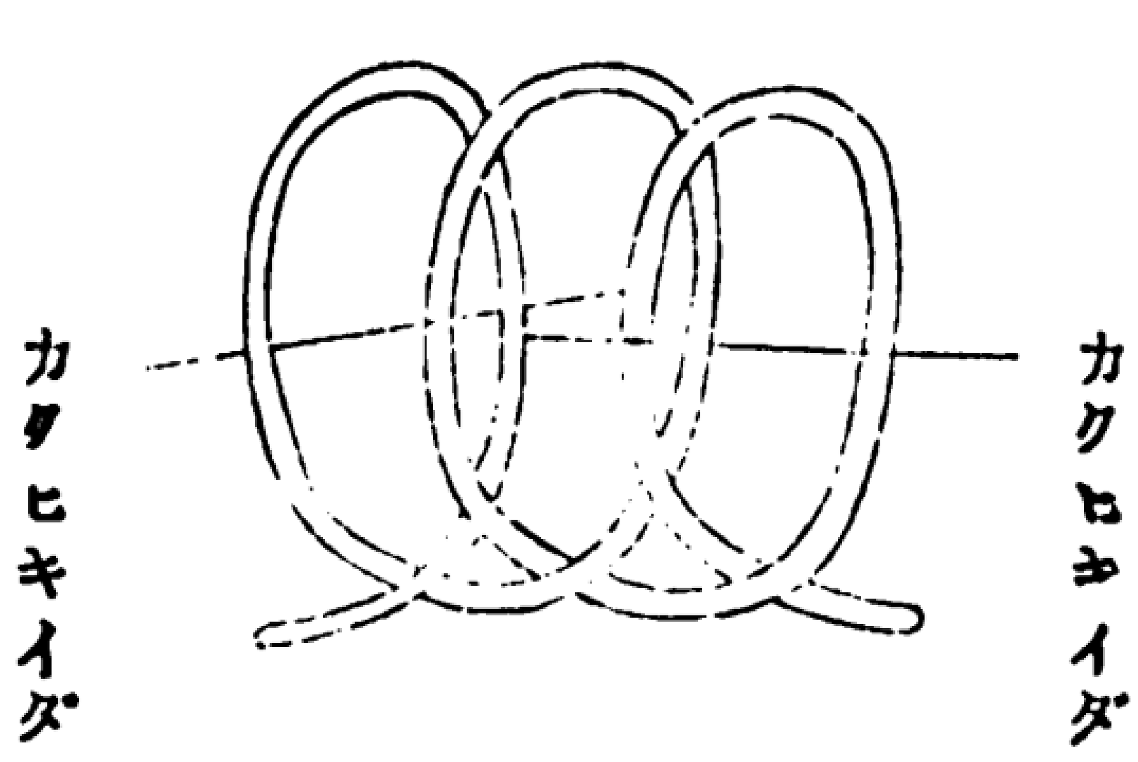
結び上り

華鬘結　是は多く佛具に用ゐ、寺院の御簾、又佛具一切に用ゐるなり。

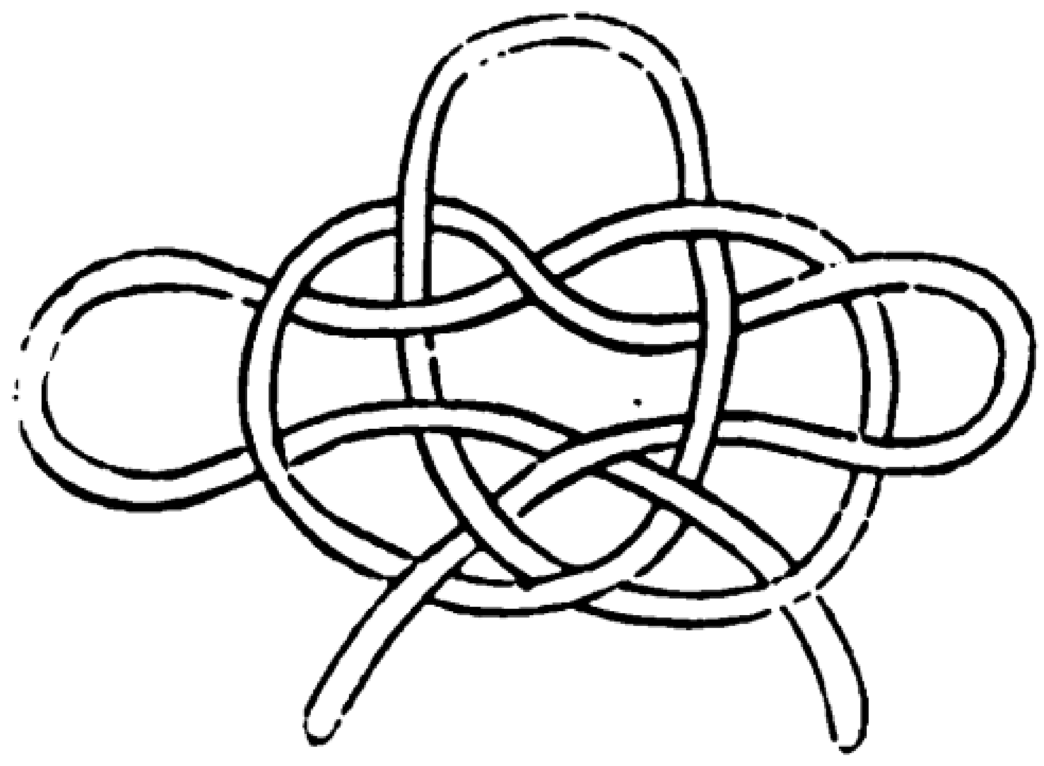
第一圖



第二圖



第三圖



び上り

たちぬひ

西山たい子

(九十六) 頭巾

(一) 大黒頭巾

まづ丸き涎懸を裁ちし如く、裏表とも四角の布を四つに折り、そのはしをかきとりて丸き形となし、又縁布を長さは、其人の頭をはかりて裁ち、布は一寸五分より二寸位に、思ひ〳〵に裁ちおくべし。さて、それをぬはんには、裏表とも、布の表側を外面に出してよくそろへ、縁布に合せ、丸形の周圍を五つ、或は七つ等にひだをとり、しつけ糸にて留め、それより縁布を表にぬひつけ、裏にて絎るべし。之を大黒頭巾と云ふ。これは子供、尼、又は女隱居の頭を剃りし者等の被るものにて、切は、大人ものは黒縮緬、黒木綿等を用ひ小兒ものは緋鹿の子、緋縮緬等をよく用ゐ、ふち布は、天鵞絨、襦子やうのものを用ゆ、裏は木綿、金巾等なり。又子供ものには黒き絹糸を房にして、兩方につけ、やつこのやうに下ぐるがいと可愛きものなり。

(二) 惠比壽頭巾

惠比壽頭巾は、其人の頭をはかり、□圖の如く縦に長く、裏表とも二つづゝを裁ち、さて、後前ともに表がはを内にして、表と裏との布を合せ、縁になる所をぬひ、横を少しばかりあけおきて、兩方とも四ぬひになし、引きかへしてあけおきし所を小針にくけ、上

の方を、兩方より三角に前の方に折り、それを、又、前の縁まで折りかへし、裏側にてとぢつくるべし。之は一名を忍び頭巾と云ひて、男隱居等の被るもいと床しく見ゆるなり。布は、大人は黑、御納戸等の縮緬を用ゐ、小兒は紫、藤色等を多く用ゆ。

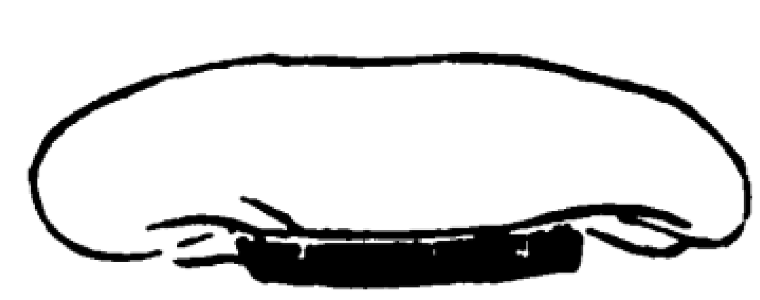
（三）　かむろ頭巾

かむろ頭巾は吉原かむろの被ぶれるをとりてつくり、小兒等に被らするものなり。布は、紫縮緬を用ひ、縁布は天鵞絨を用ゆ。之も惠比壽頭巾の如く、横八寸、縦一尺二寸ばかりに、縦を長く裁ち、兩はしを四つぬひにし、縁布をつけ、うしろへ五寸ばかり折りかへし、大白の糸にて結びおくべし。

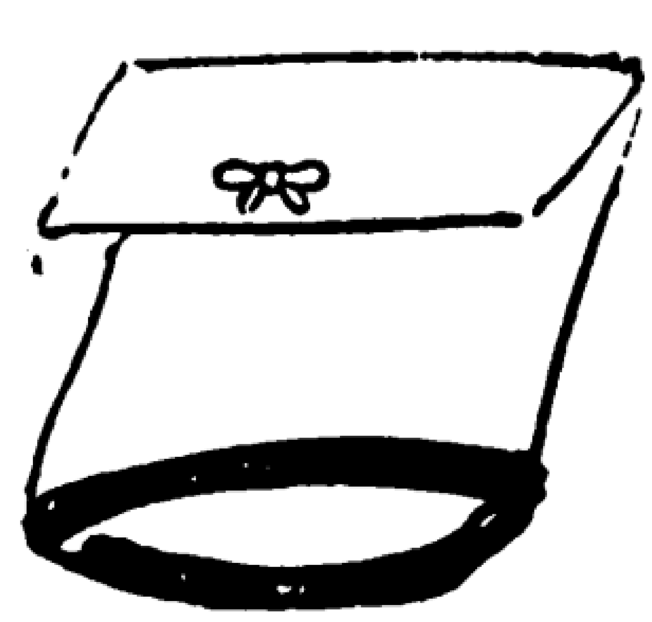
（四）　烏帽子頭巾

烏帽子頭巾は裏表とも圖の如く烏帽子やうに二つづゝを裁ち、兩方を合せて圖の如く後の下の方を一寸五分ばかりあけおきてぬひ、ひきかへしてあけおきし所を、兩方に折りて絎け、縁布をつけ、又二尺ばかりの紐をぬひて、縁布の眞中に五六寸ばかり絹糸もてかゞり付けるべし。但し、表布は黑縮緬、縁布及び紐布は白縮緬を用ゆ。大方、頭巾に、黑、紫等の布を用ゆるは、顔の色を白く見するためなり。

大黑頭巾

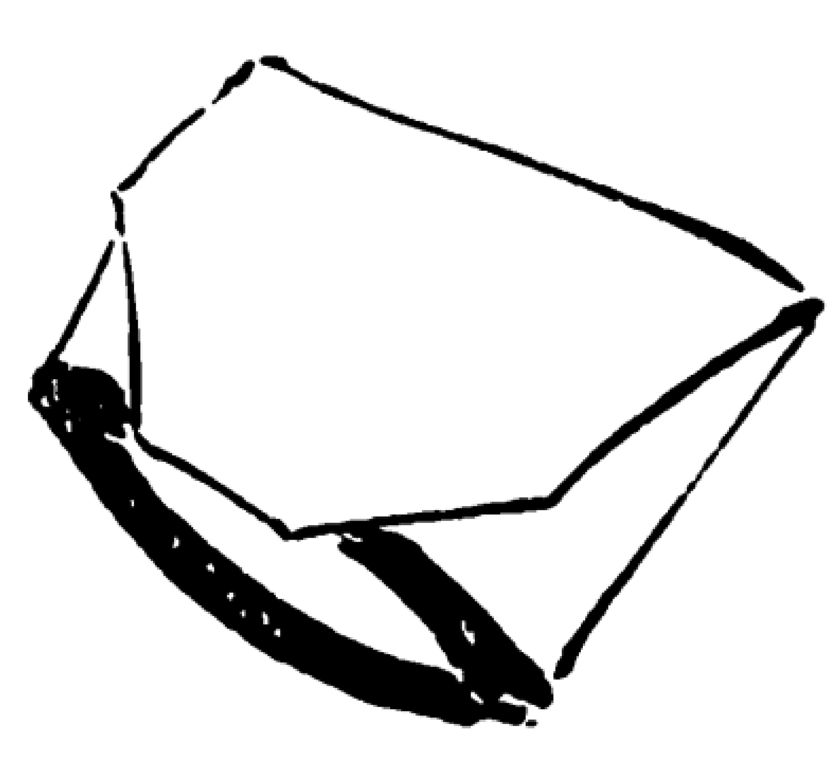


かむろ頭巾

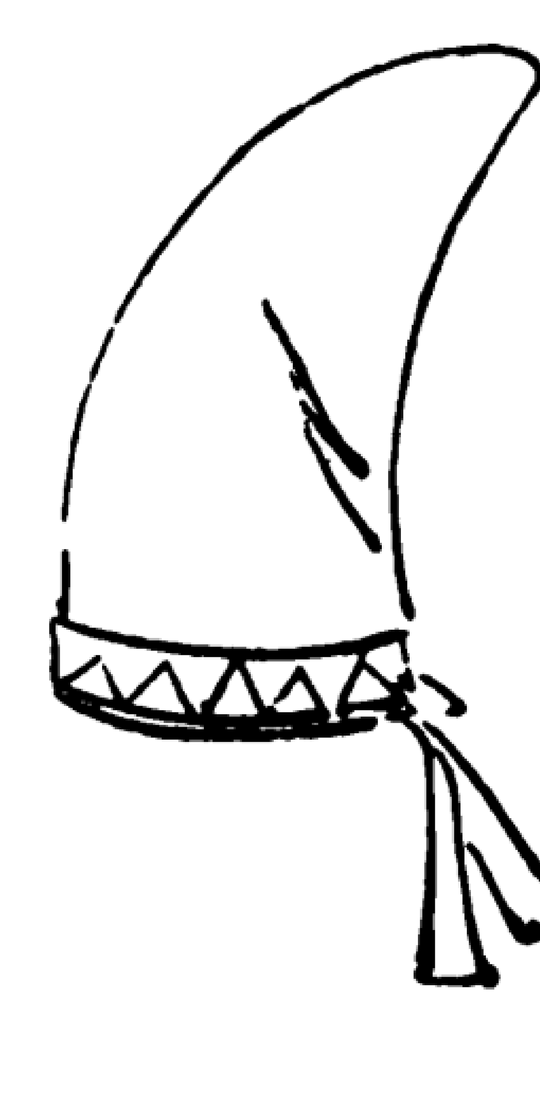


但しうしろの方

惠比壽頭巾



烏帽子頭巾



だいどころ

一小鰭（このしろの子）

こはだは九月より翌年の三月迄を期節とす、魚でん、酢の物、すし種、てんぷら等に用ふ。

一鰶

調理方前に同じ。

一生海鼠

生海鼠は十二月より翌年の四月頃を節とす、酢の物に用ふ。

一ゑこ（ひしこいわし）

九月より十二月迄を節とす、煮びたし、酢入等に用ふ。酢入とは、ゑこの頭とはしとを去り、よく洗ひ、沸騰たる湯の中に投れ、酢と醤油にて、能程に味をつけたるものを云ふ。

一虎魚

一月より四月迄を節とす、調理方味噌汁、すつぽん煮、茶碗だね等なり。

一たちの魚

一月より三月頃までを節とす、てり焼、煮肴、味噌漬等なり。

一魴鮄

十二月より翌年の三月迄を節とす、調理方、鹽燒、てり焼、味噌汁、味噌漬等なり。

一蠣

十二月より翌年の四月迄を節とす、酢のもの、椀たね、フライ等に用ふ。

一榮螺

期節は二月より四月迄なり、つぼやき、むし煮、さんむい等に用ふ。

一蛤

十二月より四月迄を節とす、用ひ方、酒蒸、吸物、すしだね、ゑぐれ等なり。

一あさづけの漬方

先づ大根を洗ひ、水氣を去り、大根百本に、麹、一升五合、鹽一升五合の割合にてよくもみまぜ、樽の底に交せ合せたるものをふり、其上に大根をのせ、段々につけてみ、壓ぶたをなし、強き壓をなし置、一ヶ月を經たる後用ふべし。樽は酒樽の明きたてのものをよしとす。



學園

秀歌集（卅二）

鹽井正男

○

君が爲めきその山道雲わけて
　またいぬらむかきその山道

○これは、小澤芦庵が歌なり。蒲生君平が山陵志の著述を思ひ立ち、古陵をたづねて、京に至れる時、芦庵をたよりて、久しく住みけるが、さて、そが故郷なる下野國に歸へらむとせる別れに、芦庵がよみてくれるなり。○君がため。大君の爲めなり、天皇の御爲めなり。○きその山道。信濃なる木曾の山道なり。こゝを經て下野國の方へは歸へる故に、かくいへるなり。○雲わけて、雲ふかき山路をわけ越ゆるさまなり。○またいぬらんか。いぬは行くといふ意なり。また行くであらうか君はマアーといふことなり。

○一首の意は、かく大君のみ爲めに、貴方はまた、雲ふかき木曾の嶮しき山道を分けて、行き給ふか、マアー、雲ふかき木曾の山道を分けて行たまふかマアーといふことにて、尊王愛國の心より、かく遠き路をゆきかへりする君平が忠誠を、憐れに思ひやりたるなり。君平が忠誠をゑたひ君平が行路難を思ひや

るを共に、芦庵が忠君愛國の至情もこもりて、いふむかりなき歌のさまなり。末に、木曾の山道をうちかへしたる手ぶり、殊に、古の歌の面白きふしをまねびて、調もいとおもしろく餘韻かぎりなくれば ゆ。なほ、此の人のめでたき歌を、今日はかいつらねむ。

○

おろかにも千代萬代といのるかな
　こゝは常世のやまと島根を

○この歌は、さきにあげて、ときたることあれど、いはず。才氣の非凡なるを見るべきにこそ。

○

川ぞひの堤をこめて立つきりに
　かぎりも見えぬ秋の夕なみ

○此の歌は、詞には、殊更に取り出でゝ釋き立つべきむづかしきはあらねど、いはず。たゞ歌のおもむきをいへば、秋の夕ぐれ、渺々たる川べに、霧のとはく立ちこめたるけしきなり。歌の大やかにさかんなるを見るべし。

○

大井川月と花とのおぼろ夜に
　ひとりかすまぬ波の音かな

○これも、別にむづかしき詞はあらず。歌のおもむきをいへば、京の嵐山のふもと大井川べの春夜のけしきなり。月ににほひ、花のいろ、おぼろにかすみわたりて、水の流れの靜かにきこゆる、うらゝかなる春夜のけしきなり。優に花やかなる春夜のさま見えて、ゆかしともゆかし。花月おぼろなる中に、流水の音のみ清くきこゆるを、ひとりかすまぬ波の音かなといひたるあたり、才氣掬すべし。

○

櫻ちる春の港のおひ風に
　花つみそへて出づる百舟

○追ひ風。後より追ひざまに吹き來る風のことにて

港川夜舟こぎ出づる追ひ風に鹿の聲さへさえわたるなり。」などの追ひ風にて知るべし。舟の艫の方より吹く風、さては、順風のことを追風艫風といふも、つまりは、全じ意よりなり。○花つみそへて。つねの荷物の上に花までをつみ加へてといふことにて、舟に落花のつもるけしきなり。○出づる百舟。港を出づる數多の舟なり。○櫻ちる春の港。櫻花紛々として吹き散る暮春の港のけしきなり。○一首の意は、別にいはずも、明かならむ。紛々として吹き散る落花の中に、港をこぎ出づる舟のけしきをよめるなり花つみそへて出づる百舟、おもしろき暮春港邊のけしき、誠におもしろくよまれたりといふべし。

○

紅葉ちる頃なりけりな山里の
　ことぞともなく袖のぬるゝは

○これは、清原元輔のよめるなり。山里なる所に、秋の頃住みける時に、よみて人につかはしたるなり。元輔は、清少納言の父なり。○頃なりけりな。頃であるワイナといふ事にて、けりなは感動したる詞なり。○山里の。或本には、山里にとあり。いづれにても、さして歌の意にはかはりなし。○ことぞともなく。此の事ともなく或は何事ともなくといふ意にて、是れといふ事は無きにといふやうなるとなり。

○袖のぬるゝは。涙のこぼるゝを、かくいへるなり。これ、詞の上一の面白き技術なり。

○一首の意は、山里にて、是れといふ事はなきに、何となう身に悲しくればえて、涙の自からこぼるゝは、紅葉の散る頃であるワイナーといふとなり。歌も、また、これといふ事はなけれど、何となう身にしみて、涙こぼるゝ心地してなむ。

○

石川やせみの小川の淸けれど
　月の流れをたづねてぞすむ

○これは、新今古集にあり、鴨長明のよめるなり。

○石川やせみの小川。せみの小川は、山城國なる愛宕郡にありて、今の加茂川の上流の古名なり。石川は、もと、底に石の多くある川といふ意にて、瀬見の小川わたりは、石の多き川なりし故に、また、石川ともいひたり。おなじ川の名なり。石川の瀬見の小川といふやうなる意にて、やは感動をこめたる詞なり。○淸けれど。淸き故にといふ如き意なり。○一首の意は、石川の瀬見の淸き故に、其の淸き流水をたづね來て、月もすむといふことにて、明かなり。下の句おもしろくおぼゆ。

源氏物語講義（第十二）

下田義天類

かぎりあれど、さのみも得とゞめさせ給はず。御覽じだにおくらぬおぼつかなさを、言ふかたなくおぼさる。いとにほひやかに、うつくしげなる人の、いたうおもやせて、いとあはれと物を思ひしみながら、ことにいでゝも聞えやらず、あるかなきかに消え入りつゝものし給ふを御らむずるに、きしかたゆくすゑおぼしめされず、萬のことを啼く〳〵契りのたまはすれど、御いらへも得聞え給はず、まみなどもいとたゆげに、いとゞなよ〳〵と、われかのけしきにてふしたれど、いかさまにかとおぼしめしまどはる。

此の段は、御息所の禁中より退出せむとし給ふを、陛下の氣遣はせ給ふ所なり。前回に、母君啼く〳〵そうしてまかんでさせ奉り給ふといひ、またみこをもとゞめ奉りて、しのびてぞいでたまふといひて、既に禁中を退出したるやうに記したれども、前回にありし所は先その大躰をかき記したるものなり。その實はいまだ退出しはてたるにはあらず。これより立ちもどりて、其の退出せむとし給ふをりの有りさまを委しく書き記すなり。先其の大體をいひきり、さて立ちもどりて、其の事情の巨細を解き

明すことは、和漢に通じたる古今文の常格なり。心得おくべし。さて、これより物語は稍佳境に入り、文章はた絶妙の堺に進まむとす。心を潜めて聽講すべし。

○かぎりあれどさのみもえとゞめさせ給はず　とは、御息所の御退出を陛下のとゞめ給はぬ由なり。かぎりあれどとは、止めさせ給ふ御詞にも限りのあれどなり。さのみとは然のみにて、前回のありし猶去どし試みよとのみ宣はせられて、御賜暇の御聽許あらざりし事をさせるなり。止めさせ給ふ口實にも限のある事なれど、陛下にも、この御退出をさうどかりは止め給はざりし由なり。深く御なごりを惜ませ給ふやうすを察知し奉るべし。

○御覧じだに送らぬおぼつかなさを、言ふかたなくればさる　とは、陛下の御心の中を書き現したるものなり。御覧じだにれくらぬは、御見送りをもし給はぬよしなり。陛下の御心中には御息所の御里方までも附添ひ參らせて、御病狀の成り行くやうを見届け參らせ度き程に思召し給へど、御儀式御格式等の制裁に遮られて、御叡慮の儘にも振舞がたければ、せめての事には、禁中御退出のやうをなりとも見送らむと思食し給へど、御息所の方にては、夜中しのびて出で給はむとて、それをも御辭退申上げて、早く常のおとゞへの還御あらせられむことを促し奉りたれど、見送る事さへも出來ざるかと思食したる由なり。御覧しだに送らぬとある、だにと云ふ助辭こゝには甚力ある文字なり。おぼつかなさは心許なさなり。御不安心の度合をいへるなり。いふ方なくればさるは、云ふかたなく哀しく思食し給ふ由なり。云ふかたなくとある下に、哀しくと云ふ語を省略したるものなり。云ひやうもなきまで哀しく思食し給ふ趣なり。

○いとにはひやかに、うつくしげなる人の　とは、御息所の御容躰を書きあらはしたるものなり。いと

は最なり。にほひやかは艶々しく麗はしきなり。うつくしげなるは聞ゆたるが如し。但げは他より思ひやりたる詞なり。無事にて煩ふ所もなく装ひたてゝ居らせ、いかにも美しさうなる人のといふ義なり。人のは人がにて御息所を指せるなり。此の物語には、かゝる所のの文字に多くはながらといふ意を含ませて使用せり、こゝも美さそうの人ながらといふ程の意味あり。

○いとうれもやせて　とは、痛く面瘦せてなり。病氣危篤に瀕して甚しく衰弱の躰をあらはしたるなり。

○いとあはれと物を思ひしみながら　とは御息所の心中になり。御息所は今度の御病苦常とかはりて、俄に身體も衰弱し氣力も消耗したれど、所詮今度は恢復せむこともむつかしからむと、心中竊に御覺悟を究めさせられたるさまにて、何かの事を甚あはれと思ひ染みたる由なり。あはれとは深く心中に感じたることありて思はずしらず口に出でくる嘆息の聲をいへるものなり。こゝにては、御身の亡からむ後を思ひつゞけさせ賜ひて、第一には皇子光君の御行末を案じ煩ひ、第二には母君北の方にも、如何にたよりなく思食し賜はむかと、此の世に殘る母人の上を氣遣ひ、また陛下にも如何に思食させ賜はむかと、御厚恩を蒙りたる陛下の御心の中をも思ひ廻し、夫より推しうつしては、世間の人のれのれに強面こと、油斷の出來ぬ世の中なることなどをも思ひつゞけて、あはれと思ひ染みたるなり染むとは深く思ひ入りたるなり。ながらはなれどもの心なり、かく何かのことをあはれと深く思ひ染みたる躰なれどもなり。

○ことにいでゝも聞ゆやらず　とは、御息所其の心中に深くあはれと思ひ入りたることは多くあれども、言に出しても陛下へ申上げざりきとなり。萬感胸に塞る、所を謹みて、言葉にあらはさざるよしにて能

く聞ねたり。舊註に「ことにいでゝいはゝゆゝしき山川の瀧つ心をせきぞかねつる」といふ古歌を引きて書けるよしに云へるは强言なり。

○あるかなきかにきこゑいりつゝものしたまふを　とは、御息所の病苦の躰に、恩愛の情をも添へたる容躰をいへるなり、神心恍惚として、我が身のあるかなきかをも辨へ兼ぬる程に悲み歎きつゝ臥して居たまふをなり。ものし給ふとは、こゝにては臥して居たまふことなり。

○御らむずるに　とは、此の御容體を陛下の御覽じ給ふになり。

○きしかた行末れぼしめされず　とは、陛下も御心まどひの爲に前後不覺の御ありさまになりてなり。きしかたは既往のこと、ゆくすゑは將來のことにて、既往のことも將來のことも思食し分き給ひ難き意なり。

○よろづのことを啼く〳〵契り宣はすれど　とは、陛下此の御病人に對して諸事萬端の事共をあるひは御契約あそばされ、あるひは御誓言遊ばさるれどもの義なり。よろづのこととは醫藥療養のこと、加持祈禱のこと、病狀御報告のこと、全快參内の事等より、皇子光君の御身の上の事等まで宣はせしなるべし。啼く啼くとは、此のあるかなきかの御容躰にて臥し沈み給へるさまを見そなはして、御覽ずる御心にも、頻りに悲しく思食し給ひしより、啼きては語り、啼きてはかたりし給ふなり。

○まみなどもいとたゆげに　とは、御息所には、目つきなども痒癢さうにてなり。閉ぢたる眼ぶたを重さうに見張りて、陛下の御さまを見上げ奉るさまにて、最御大患の樣子を書きあらはしたる所なり。

○いとゞなよ〳〵と　いとゞは一層なり。なよなよは弱々にて力なき體なり。平生もしとやかにて力なき躰の御息所が、今は病苦と哀別とのせめぎに掛けられて、一層弱々とちからなき躰にならせ給へるなり、

○われかのけしきにてふしたれど　とは　彼我の差別も定め難き躰にて臥したれどなり。われかのけしきといふ語は、我が人かの辨別も附き兼ねるまで、夢幻のごとくに衰弱したる氣色をいへる語なり。

○いかさまにかとればしめしまどはる　とは、陛下此の御危篤なる御容體御覽ぜらるゝに就けて、いかさまにかせむ。何としたら良からうぞと起つ居つして叡慮を定め兼ねさせ給へるよしなり。いかさまにかといふ下にせむといふ語を省きてあり。補ひてよみ試むべし。

以上を取都べて申せば、陛下には御息所と御別を惜ませ給ふこと限りもあらざれども、これを留めさせ給ふ御詞には限りあることなれど、さうどかりも得とゞめさせ給はず、叡慮の儘になる事なれど、御自親附添ひ給ひて、御息所の里方へまでも御はしまさまほしく思食し給へど、夫も協ひ難き事なれど、せめては、禁中御退出の御見送をだにし給はむと思食したるを、御息所の御都合によりて、それさへ協はせられぬ時宜なれど、行先の心許なさを云ふかたなき程哀しく思食させ給ひぬ。さて、陛下には御息所の御退出前に、御局に臨御遊ばされて、御息所の御容躰を親しく御覽ずるに、御息所は、元來いとにはひやかにうつくしげなる御方なるが、此の間の御病苦に痛く面瘦せ給ひて、ありし御姿の樣にもれはしまさず、その上に今度は御恢復も覺束なしと思食し賜へる故にや。何かと色々の事どもをいとあはれと思ひ染み給へる御容子にて、一際たのみ少く思食す御容子なれども、さりとて平生謹み深き御息所なれど、そのあはれに思ひ入りたる事がらを、あらはに詞に出しても奏上し奉らず。無量の思を帶びたるまゝながら、神心も恍惚たる御ありさまにて、御身もあるかなきかのやうに消ね入りつゝ、御床に就かせ給へる御容子なり、今親しく此の容躰を御覽ぜられたる陛下は、餘りに御不憫に思食めさせて、

きしかた行末の事をも食されず。諸事萬端の事どもを啼く〳〵契り宣はすれど、御息所は御病苦のある上に、かく優渥なる勅掟を承るにつけ、これ今生にての御いとまごひと思ふにつけ、有難さと哀しさとが胸一杯にせまりきて、御勅答も申上げ兼ね兩眼に涙を浮べて、陛下の御顔を見つめて御座る眼つき、強ひて見張りては御座るものゝ、目蓋重けに御骨の折るゝ容子にて、さらぬだにかよわき御身の、いとゞなよ〳〵と、彼我の堺をも見分き兼ね給へるやうにうとうととして御座る故に、陛下には何とせひかとかき亂るゝ御心まどひに、起つ居つ叡慮を定め兼ねてれはしましきとなり。此の御二方の御擧動と、御心の裏とを細に書き分けたる筆つきに能々心を注ぐべし

漢文學講義（十三）

大林弘一郎

十一、百合傳（上）

賴襄

襄、字は子成、通稱を久太郎といふ、山陽、三十六峯外史などの號あり。安藝の人賴春水の子なり。初、尾藤孝肇に學び後に有名なる大儒となれり。天保三年、年五十三にして京都の寓居に歿しぬ。山陽の文名の高きことは近ごろ皆人の知れる所なれども其の著書の中に、いとも、名高きものは、日本外史、日本政記、通議等なり。その文詩を集めたるものには、山陽詩鈔、山陽遺稿、山陽文抄、山陽題跋などあり、皆印行せられて世に廣まれり。山陽は、近世の文章家中いとも勝れたる大家なり。その文の自在にして、氣慨あり、雄大にして光彩あること、よく、其の文を讀みて後に知るべきなり。こゝに、掲げんとするは、遺稿の中に載する所なり。文、頗、洒落にして、事實も、亦、觀る

俳、何れも其意を了解して意味を得篤すべし。次に表裝は一文字、風帶、中廻し、上下軸と云順序に、金襴、純子、或は絹、何布と云事を鑑定すべし。次に掛物の係り方、卷緒の引方迄心を用ひて見るべし、見終りたらば一禮をなし、扇子を持ちて風爐釜の前に往、釜、及風爐灰の作方、棚の飾りをも一覽すべし。此時次客は床の前へ往、上客は見合、假の座に着坐す、次に次客風爐の前に往、三客床前に往、四客潛り口に臨み、段々如斯して末座入仕舞たらば、潛り口の戸を微音有樣に建切べし。（但し是は二三寸程明置て、音出る迄力を出して急に建切べし。倘口傳、末座拜見終りたらば一同に立て各本座に、着座すべし、此の時亭主は此建切の音を聽て手水鉢の水を差足べし。次に亭主は勝手口の外に控へ、客の座定りたる哉否哉を窺ふべし。客方は座定りたらば好良掛物に有之抔と一二の客賞美の言を申すべし。又亭主は態と咳拂をなし太鼓張を明けて挨拶をせんとの形姿を示すべし。上客は一膝進み出先々篤と御入可レ被レ下と云、亭主は然らば御免を蒙ると云て席中にすべり入べし、先第一に總方時候の禮辭を述べ、扨今日は御多用の中能こそ御出被レ降、千萬忝存候、寬々御咄し可レ被レ下杯と云べし。客も同樣、本日の御茶事能こそ御催、相樂推參仕候、御前禮にも參上不レ致、端書抔にて失敬の事共に有之など世辭をも交へ云ものなり次客以下各自に挨拶應答あるべし。

（以下次號）

女禮（續）

禮節教授　有住常子

本一二三の膳進め樣

本膳は左の手を膳の下に入れてうけて、右の手にて緣をうけて持て、まづ爪立て、右の膝頭を少しうかめて

右に腰を捻りて、眞直に立ちて左足より進みゆくべし、膳の上に息のかゝらざる様心して高く持て臂はらぬやうに持て出るなり。二三の膳は兩方の縁をもちて出るなり。本膳の時中座あるべし。

本膳持て御前ちかく至りて、程を見斗らひ、左足を半足引て、左膝より跪き、右膝をもつきながら膳を置くやうにかまへて、右膝を少し引て、踵を平らになほし、左膝をもかくなして居りて、膳を据て、左右の足を大指を中の方、四の指を外の方へして、押進て置くなり。さて左右の手を膝の前に引て付て、右膝頭に右の手の平をそへて膝へ引て爪立て、次に左膝頭に左の手の平をそへて引て爪立て、又右膝頭を少し押て引て、右膝頭をうかめて、眞直にたちて、右足を一足引、左足を一足引、右足を、左足の後の方へ横に引、左足を、右足の前の方へ竪につけてめぐりて立かへるべし。二三の膳の出しやうも同じ事なり。

○中座とは既にも出せる如く、次の間、梱外にて膝をろへたるまゝ跪きて、御前の方を伺ひて、直ちに立ゆく事なり。

○二の膳は中座なくして、持出て、御前より右の方へ据べし。我方より左の方也

○三の膳は中座なくして、持出で御前より左の方へ据べし。我方より右の方也　三の膳出して立歸る時には左にめぐりて立かへるべし。めぐりやう、右の方の反しにて左足より引はじめて右を引、左を右のあとに付て、右を左のさきに付てめぐるなり。

右は正面に出す時の様なり、正面に一人にて出す時の様なり。

同　横座

本膳を持出で中座をなし、右の方に御座ある時は、持出で立止り左足を、右足の先の方につけて右の方にめぐりて、進みて左半足ひきて左膝を跪き、右膝をも跪き、右左と膝を引て座りて、膳を据て、足を押進めて置て、兩手を膝頭に引て、右膝頭に右手をそへて爪

立、左膝もかくして爪立て、又右をすこし引て、手を膝の上へおきて右膝頭をうかめて、右の方下座の方へひらきて、下座をむきたる時たちてかへるべし。

二の膳の時は、本膳の前程に居る樣にして、すこし筋違に押し進めて本膳の先の方に置くべし。立かへる時には、本膳の手前まで、左右の手をつきて、右の手を引て、左の膝を引、左の手を引て、右の膝を引く、かく三度四度して本膳の手前はづれたる所まで引て、さて右膝をうかめて右下座の方へとめぐりて立てかへるべし。

三の膳は、すこしすぢかひに押て進めて本膳の手前の方に置て、立かへる樣は別の事もなきなり。

○幾人にて出すも此心にてよろし。

此本二三の膳出しやうは稽古の樣なり。

本膳には
膾　汁
香物　箸
坪　飯

二の膳には
平　汁　箸
猪口

三の膳には
差味　汁　箸
猪口

此置方も稽古の時の置方なり、式正にはあらず。

新撰結物百種

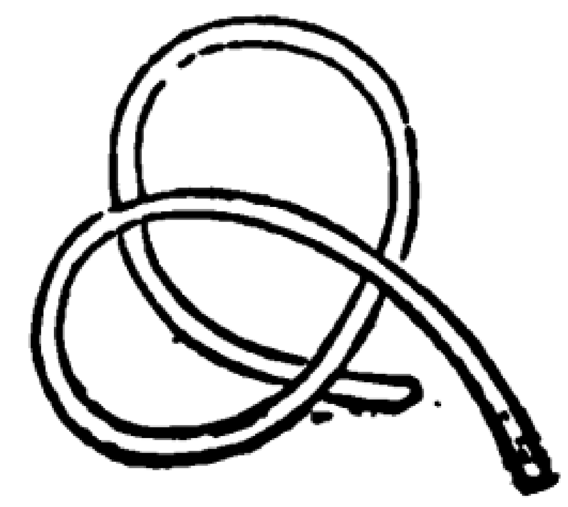
百草莚一無

淡路結　當節は何に用ゆるも苦しからず、

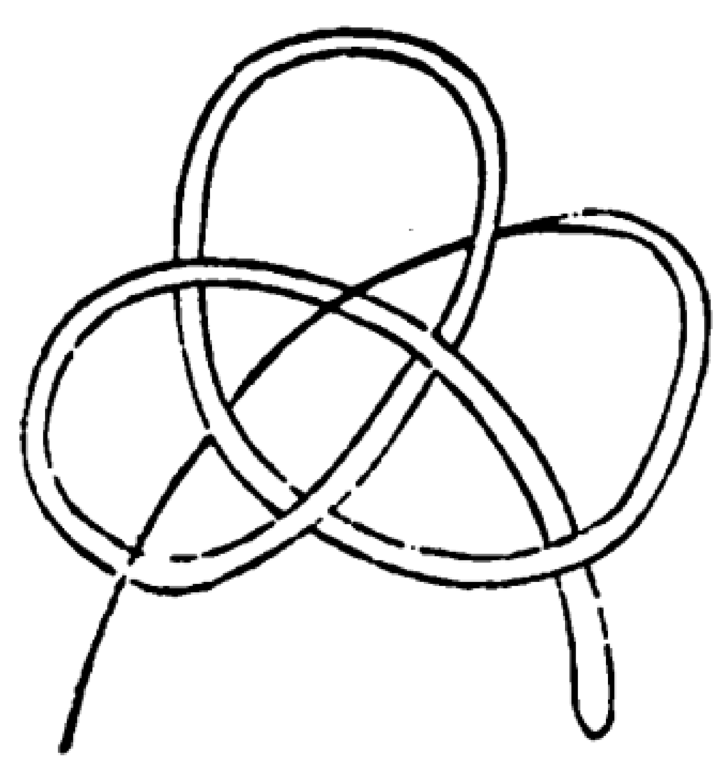
（石井泰次郎云　淡路結とは云ふべからず、あはび結とて蜷結に對して其形によりて名付けたるなれば蚫結と云ふなり。又二葉の葵に似たり、あふひ

結といふは此故なるべし。又是をあはぢ結、あふひ結など云ふは非なり。古書には皆あはび結とありと伊勢の翁が結の記に見えたり。又同翁隨筆位袍百二段に此結の事あり。又萬葉集四、玉緒乎沫緒附搓而云々、伊勢物語、拾遺集の歌、枕草紙などに見えたり。用うる樣は、厨子、泔杯の臺の打敷樣の物に用うべし。又水引にて結びて銚子瓶子の蝶、又伸蚫包の飾に用ゐきたれり。)

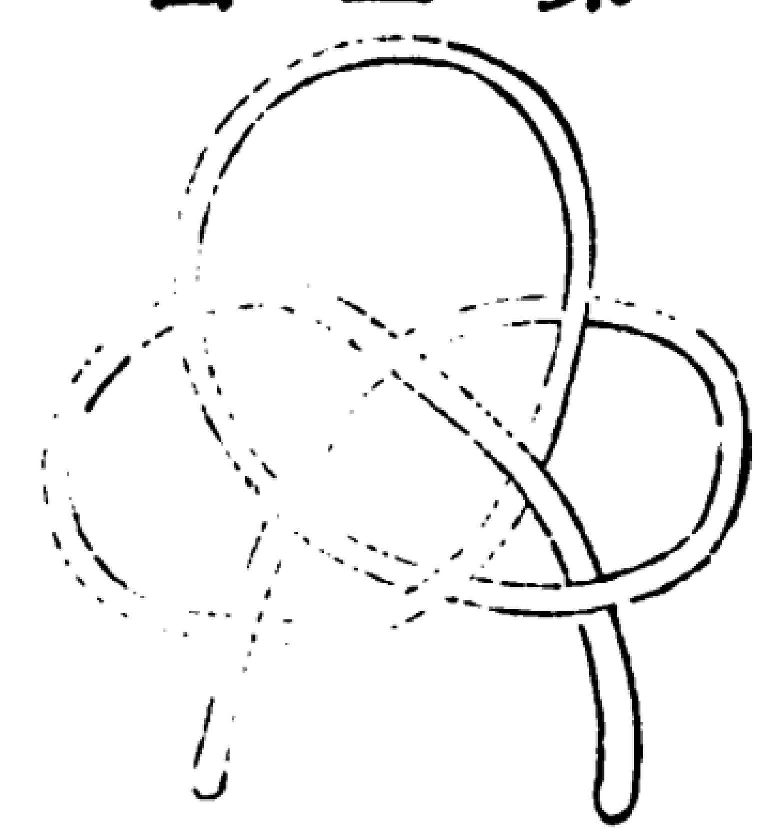
第一圖



第二圖



第三圖

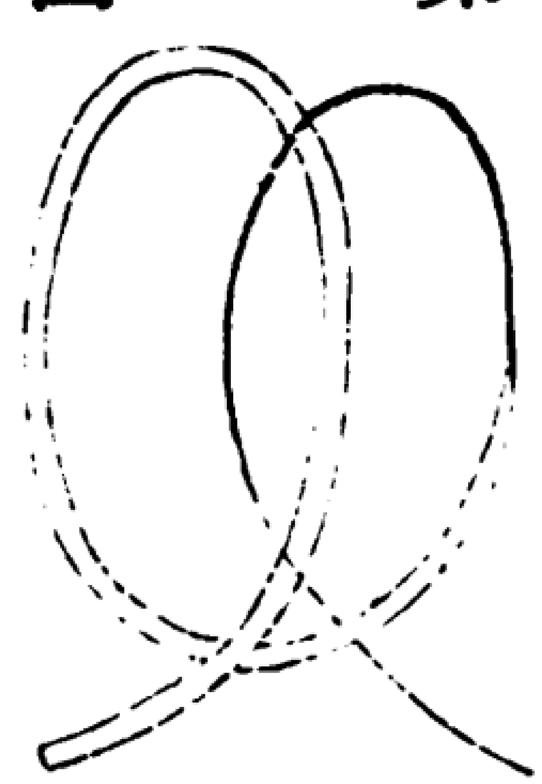


結び上り

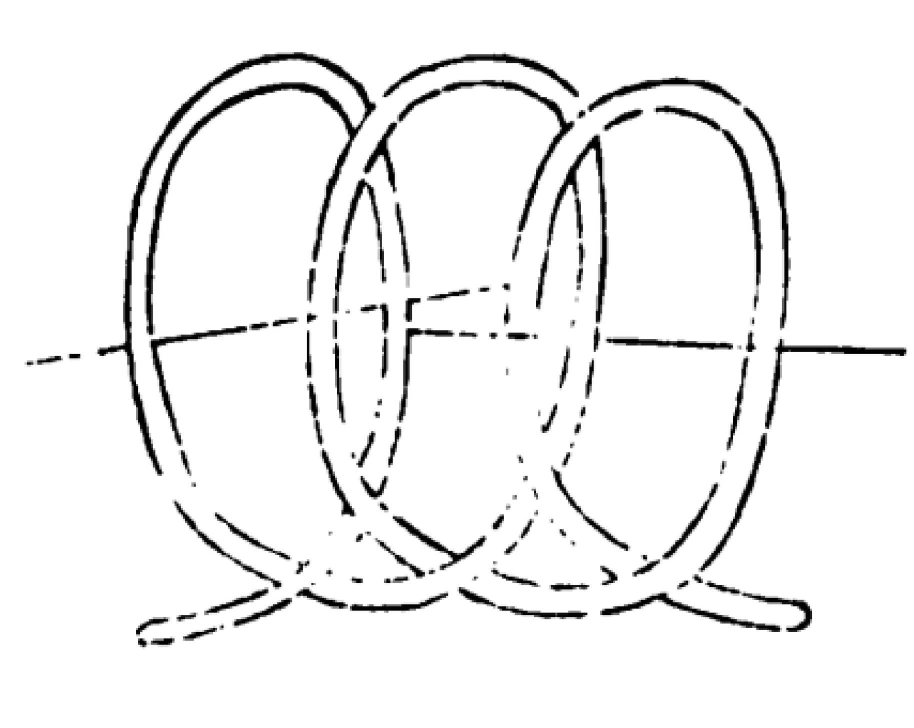
華鬘結

是は多く佛具に用う、寺院の御簾、又佛具一切に用うるなり。

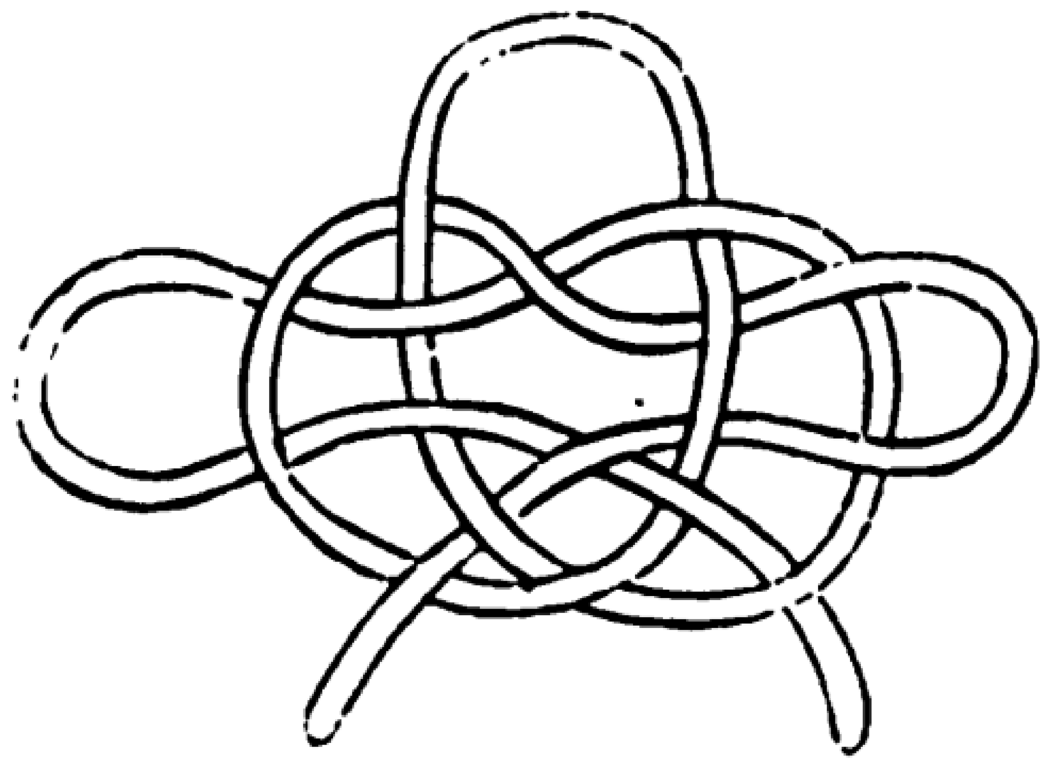
第一圖



第二圖



第三圖



び上り

たちぬひ

西山たい子

(九十六) 頭巾

(一) 大黒頭巾

まづ丸き涎懸を裁ちし如く、裏表とも四角の布を四つに折り、そのはしをかきとりて丸き形となし、又縁布を長さは、其人の頭をはかりて裁ち、布は一寸五分より二寸位に、思ひ〱に裁ちおくべし。さて、それをぬはんには、裏表とも、布の表側を外面に出してよくそろへ、縁布に合せ、丸形の周圍を五つ、或は七つ等にひだをとり、しつけ糸にて留め、それより縁布を表にぬひつけ、裏にて絎るべし。之を大黒頭巾と云ふ。これは子供、尼、又は女隱居の頭を剃りし者等の被るものにて、切は、大人ものは黒縮緬、黒木綿等を用ひ小兒ものは緋鹿の子、緋縮緬等をよく用ゐ、ふち布は、天鵞絨、襦子やうのものを用ゆ、裏は木綿、金巾等なり。又子供ものには黑き絹糸を房にして、兩方につけ、やつこのやうに下ぐるがいと可愛きものなり。

(二) 恵比壽頭巾

恵比壽頭巾は、其人の頭をはかり、□圖の如く縦に長く、裏表とも二つづゝを裁ち、さて、後前ともに表がはを内にして、表と裏との布を合せ、縁になる所をぬひ、横を少しばかりわけおきて、兩方とも四ぬひになし、引きかへしてあけおきし所を小針にくけ、上

の方を、兩方より三角に前の方に折り、それを、又、前の縁まで折りかへし、裏側にてとぢつくるべし。之は一名を忍び頭巾と云ひて、男隱居等の被るもいと床しく見ゆるなり。布は、大人は黒、御納戸等の縮緬を用ゐ、小兒は紫、藤色等を多く用ゆ。

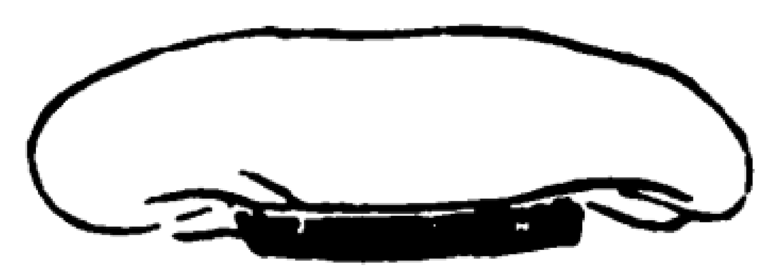
（三）　かむろ頭巾

かむろ頭巾は吉原かむろの被ぶれるをとりてつくり、小兒等に被らするものなり。布は、紫縮緬を用ひ、縁布は天鵞絨を用ゆ。之も惠比壽頭巾の如く、横八寸、縦一尺二寸ばかりに、縦を長く裁ち、兩はしを四つぬひにし、縁布をつけ、うしろへ五寸ばかり折りかへし、大白の糸にて結びおくべし。

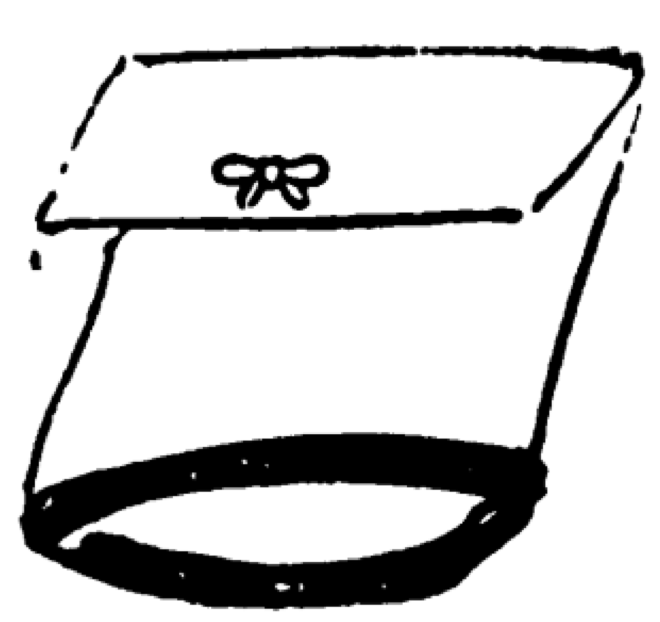
（四）　烏帽子頭巾

烏帽子頭巾は裏表とも圖の如く烏帽子やうに二つゞゝを裁ち、兩方を合せて圖の如く後の下の方を一寸五分ばかりわけおきてぬひ、ひきかへしてわけおきし所を、兩方に折りて絎け、縁布をつけ、又二尺ばかりの紐をぬひて、縁布の眞中に五六寸ばかり絹糸もてかゞり付けるべし。但し、表布は黒縮緬、縁布及び紐布は白縮緬を用ゆ。大方、頭巾に、黒、紫等の布を用ゆるは、顔の色を白く見するためなり。

大黒頭巾

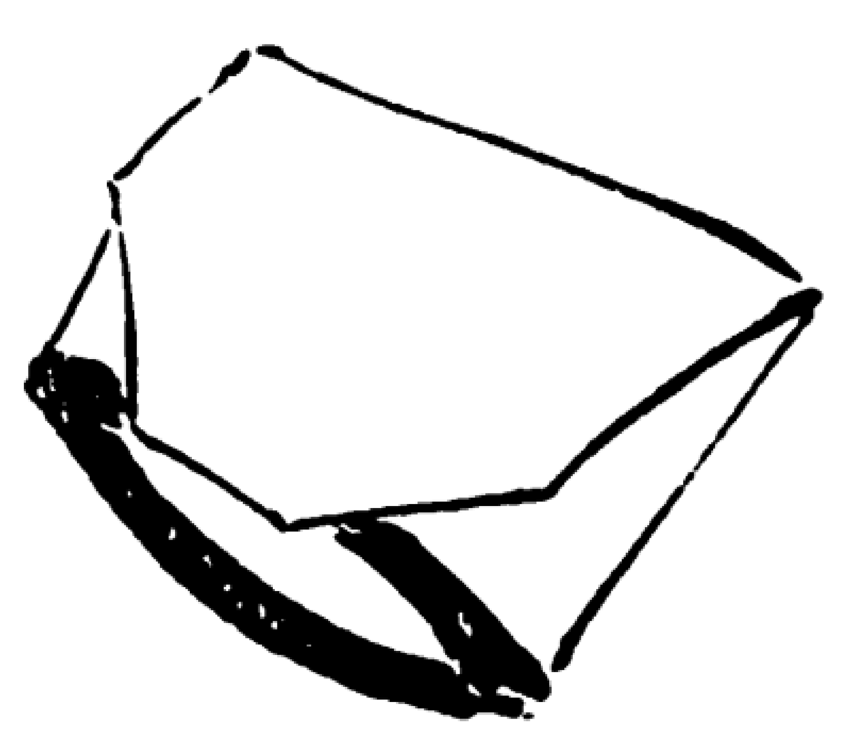


かむろ頭巾

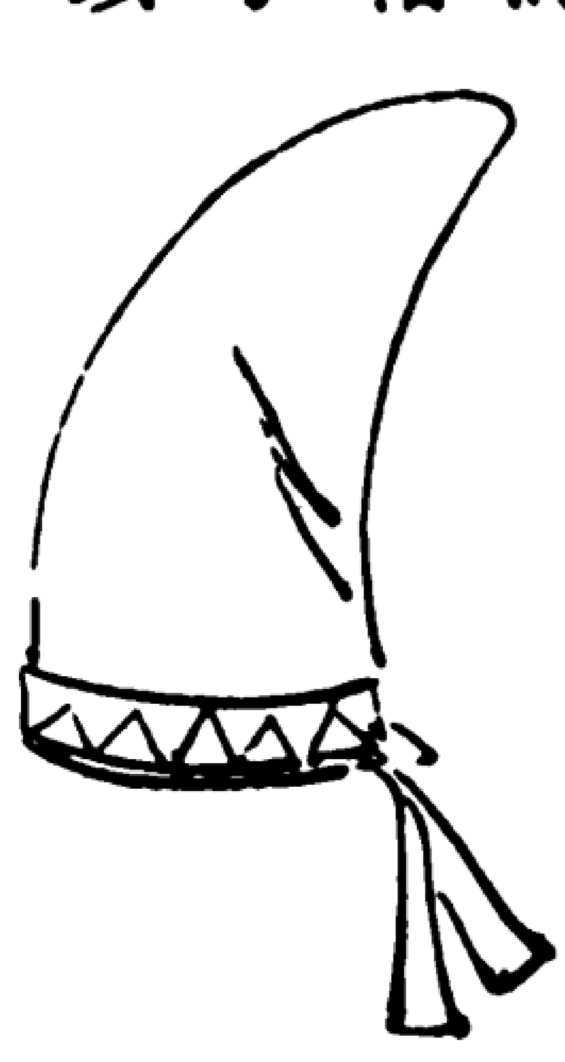


但しうしろの方

惠比壽頭巾



烏帽子頭巾



だいどころ

一小鰭（このしろの子）

こはだは九月より翌年の三月迄を期節とす、魚でん、酢の物、すし種、てんぷら等に用ふ。

一鰶

調理方前に同じ。

一生海鼠

生海鼠は十二月より翌年の四月頃を節とす、酢の物に用ふ。

一玄こ（ひしこいわし）

九月より十二月迄を節とす、煮びたし、酢入等に用ふ。

酢入とは、玄この頭とはしとを去り、よく洗ひ、沸騰たる湯の中に投れ、酢と醤油にて、能程に味をつけたるものを云ふ。

一虎魚

一月より四月迄を節とす、調理方味噌汁、すつぽん煮、茶碗だね等なり。

一たちの魚

一月より三月頃までを節とす、てり燒、煮肴、味噌漬等なり。

一魴鮄

十二月より翌年の三月迄を節とす、調理方、鹽燒、てり燒、味噌汁、味噌漬等なり。

一蛎

十二月より翌年の四月迄を節とす、酢のもの、椀たね、フライ等に用ふ。

一榮螺

期節は二月より四月迄なり、つぼやき、むし煮、さんばい等に用ふ。

一蛤

十二月より四月迄を節とす、用ひ方、酒蒸、吸物、すしだね、玄ぐれ等なり。

一わさづけの漬方

先づ大根を洗ひ、水氣を去り、大根百本に、麹、一升五合、鹽一升五合の割合にてよくもみませ、樽の底に交せ合せたるものをふり、其上に大根をのせ、段々につけこみ、壓ぶたをなし、強き壓をなし置、一ヶ月を經たる後用ふべし。樽は酒樽の明きたてのものをよしとす。

學園



秀歌集（卅二）

鹽井正男

○

君が爲めきその山道雲わけて
またいぬらむかきその山道

○これは、小澤芦庵が歌なり。蒲生君平が山陵志の著述を思ひ立ち、古陵をたづねて、京に至れる時、芦庵をたよりて、久しく住みけるが、さて、そが故郷なる下野國に歸へらむとせる別れに、芦庵がよみてれくれるなり。○君がため。大君の爲めなり、天皇の御爲めなり。○きその山道。信濃なる木曾の山道なり。こゝを經て下野國の方へは歸へる故に、かくいへるなり。○雲わけて、雲ふかき山路をわけ越ゆるさまなり。○またいぬらんか。いぬは行くといふ意なり。また行くであらうか君はマアーといふことなり。

○一首の意は、かく大君のみ爲めに、貴方はまた、雲ふかき木曾の嶮しき山道を分けて、行き給ふか、マアー、雲ふかき木曾の山道を分けて行たまふかマアーといふことにて、尊王愛國の心より、かく遠き路をゆきかへりする君平が忠誠を、憐れに思ひやりたるなり。君平が忠誠をまたひ君平が行路難を思ひや

る共に、芦庵が忠君愛國の至情もこもりて、いふばかりなき歌のさまなり。末に、木曾の山道をうちかへしたる手ぶり、殊に、古の歌の面白きふしをまねびて、調もいとおもしろく餘韻かぎりなければゆ。なほ、此の人のめでたき歌を、今日はかいつらねむ。

○

おろかにも千代萬代といのるかな
　　こゝは常世のやまと島根を

○この歌は、さきにあげて、ときたることあれど、いはず。才氣の非凡なるを見るべきにこそ。

○

川ぞひの堤をこめて立つきりに
　　かぎりも見えぬ秋の夕なみ

○此の歌は、詞には、殊更に取り出でゝ釋き立つべきむづかしきはあらねど、いはず。たゞ歌のおもむきをいへど、秋の夕ぐれ、渺々たる川べに、霧のとほく立ちこめたるけしきなり。歌の大やかにさかんなるを見るべし。

○

大井川月と花とのおぼろ夜に
　　ひとりかすまぬ波の音かな

○これも、別にむづかしき詞はあらず。歌のおもむきをいへど、京の嵐山のふもと大井川べの春夜のけしきなり。月にはにほひ、花のいろ、おぼろにかすみわたりて、水の流れの靜かにきこゆる、うらゝかなる春夜のけしきなり。優に花やかなる春夜のさま見えて、ゆかしともゆかし。花月おぼろなる中に、流るゝ水の音のみ清くきこゆるを、ひとりかすまぬ波の音かなといひたるあたり、才氣掬すべし。

○

櫻ちる春の港のおひ風に
　　花つみそへて出づる百舟

○追ひ風。後より追ひざまに吹き來る風のことにて

港川夜舟こぎ出づる追ひ風に鹿の聲さへせとわたるなり。」などの追ひ風にて知るべし。舟の艫の方より吹く風、さては、順風のことを追手風といふも、つまりは、仝じ意よりなり。○花つみそへて。つねの荷物の上に花までをつみ加へてといふことにて、舟に落花のつもるけしきなり。○出づる百舟。港を出づる數多の舟なり。○櫻ちる春の港。櫻花紛々として吹き散る暮春の港のけしきなり。○一首の意は、別にいはずも、明かならむ。紛々として吹き散る落花の中に、港をこぎ出づる舟のけしきをよめるなり花つみそへて出づる百舟、おもしろき暮春港邊のけしき、誠におもしろくよまれたりといふべし。

○

紅葉ちる頃なりけりな山里の
　ことぞともなく袖のぬるゝは

○これは、清原元輔のよめるなり。山里なる所に、秋の頃住みける時に、よみて人につかはしたるなり。元輔は、清少納言の父なり。○頃なりけりな。頃であるワイナといふ事にて、けりなは感動したる詞なり。○山里の。或本には、山里にとあり。いづれにても、さして歌の意にはかはりなし。○ことぞともなく。此の事ともなく或は何事ともなくといふ意にて、是れといふ事は無きにといふやうなるとなり。○袖のぬるゝは。涙のこぼるゝを、かくいへるなり。これ、詞の上一の面白き技術なり。○一首の意は、山里にて、是れといふ事はなきに、何となう身に悲しくおぼえて、涙の自からこぼるゝは、紅葉の散る頃であるワイナーといふとなり。歌も、また、これといふ事はなけれど、何となう身にしみて、涙こぼるゝ心地してなむ。

○

石川やせみの小川の清けれど
　月の流れをたづねてぞすむ

○これは、新今古集にあり、鴨長明のよめるなり。

○石川やせみの小川。せみの小川は、山城國なる愛宕郡にありて、今の加茂川の上流の古名なり。石川は、もと、底に石の多くある川といふ意にて、瀬見の小川わたりは、石の多き川なりし故に、また、石川ともいひたり。おなじ川の名なり。石川の瀬見の小川といふやうなる意にて、やは感動をこめたる詞なり。○清けれど。清き故にといふ如き意なり。○一首の意は、石川の瀬見の清き故に、其の清き流水をたづね來て、月もすむといふことにて、明かなり。下の句おもしろくおぼゆ。

源氏物語講義（第十二）

下田義天類

かぎりあれど、さのみも得とゞめさせ給はず。御覽じだにおくらぬおぼつかなさを、言ふかたなくおぼさる。いとにほひやかに、うつくしげなる人の、いたうおもやせて、いとあはれと物を思ひしみながら、ことにいでゝも聞えやらず、あるかなきかに消え入りつゝものし給ふを御らむずるに、きしかたゆくすゑおぼしめされず、萬のことを啼く〳〵契りのたまはすれど、御いらへも得聞え給はず、まみなどもいとたゆげに、いとゞなよ〳〵と、われかのけしきにてふしたれど、いかさまにかとおぼしめしまどはる。

此の段は、御息所の禁中より退出せむとし給ふを、陛下の氣遣はせ給ふ所なり。前回に、母君啼く〳〵そうしてまかんでさせ奉り給ふといひ、またみこをぞとゞめ奉りて、しのびてぞいでたまふといひて、既に禁中を退出したるやうに記したれども、前回にありし所は先その大躰をかき記したるものなり。その實はいまだ退出しはてたるにはあらず。これより立ちもどりて、其の退出せむとし給ふをりの有りさまを委しく書き記すなり。先其の大體をいひきり、さて立ちもどりて、其の事情の巨細を解き

明すことは、和漢に通じたる古今文の常格なり。心得おくべし。さて、これより物語は稍佳境に入り、文章はた絶妙の堺に進まむとす。心を潜めて聴講すべし。

○かぎりあれどさのみもえとゞめさせ給はず　とは、御息所の御退出を陛下のとゞめ給はぬ由なり。かぎりあれどとは、止めさせ給ふ御詞にも限りのあれどなり。さのみとは然のみにて、前回のありし猶しばし試みよとのみ宣はせられて、御賜暇の御聴許あらざりし事をさせるなり。止めさせ給ふ口實にも限のある事なれど、陛下にも、この御退出をさうどかりは止め給はざりし由なり。深く御なごりを惜ませ給ふやうすを察知し奉るべし。

○御覽じだに送らぬおぼつかなさを、言ふかたなくおぼさる　とは、陛下の御心の中を書き現したるものなり。御覽じだにおくらぬは、御見送りをもし給はぬよしなり。陛下の御心中には御息所の御里方までも附添ひ參らせて、御病狀の成り行くやうを見屆け參らせ度き程に思召し給へど、御儀式御格式等の制裁に遮られて、御叡慮の儘にも振舞がたければ、せめての事には、禁中御退出のやうをなりとも見送らむと思食し給へど、御息所の方にては、夜中しのびて出で給はむとて、それをも御辭退申上げて、早く常のおとゞへの還御あらせられむことを促し奉りたれど、見送る事さへも出來ざるかと思食したる由なり。御覽じだに送らぬとある、だにと云ふ助辭こゝには甚力ある文字なり。おぼつかなさは心許なさなり。御不安心の度合をいへるなり。いふ方なくおぼさるは、云ふかたなく哀しく思食し給ふ由なり。云ふかたなくとある下に、哀しくと云ふ語を省略したるものなり。云ひやうもなきまで哀しく思食し給ふ趣なり。

○いとにほひやかに、うつくしげなる人の　とは、御息所の御容躰を書きあらはしたるものなり。いと

は最なり。にほひやかは艶々しく麗はしきなり。うつくしげなるは聞ねたるが如し。但げは他より思ひやりたる詞なり。無事にて煩ふ所もなく裝ひたて丶居らせ、いかにも美しさうなる人のといふ義なり。人のは人がにて御息所を指せるなり。此の物語には、か丶る所のの文字に多くはながらといふ意を含ませて使用せり、こ丶も美さそうの人ながらといふ程の意味あり。

○いとうれもやせて　とは、痛く面痩せてなり。病氣危篤に瀕して甚しく衰弱の躰をあらはしたるなり。

○いとあはれと物を思ひしみながら　とは御息所の心中になり。御息所は今度の御病苦常とかはりて、假に身體も衰弱し氣力も消耗したれど、所詮今度は恢復せむこともむつかしからむと、心中竊に御覺悟を究めさせられたるさまにて、何かの事を甚あはれと思ひ染みたる由なり。あはれとは深く心中に感じたることありて思はずしらず口に出でくる嘆息の聲をいへるものなり。こ丶にては、御身の亡からむ後を思ひつ丶けさせ賜ひて、第一には皇子光君の御行末を案じ煩ひ、第二には母君北の方にも、如何にたよりなく思食し賜はむかと、此の世に殘る母人の上を氣遣ひ、また陛下にも如何に思食させ賜はむかと、御厚恩を蒙りたる陛下の御心の中をも思ひ廻し、夫より推しうつしては、世間の人のれのれに强面こと、油斷の出來ぬ世の中なることなどをも思ひつ丶けて、あはれと思ひ染みたるなり染むとは深く思ひ入りたるなり。ながらはなれどもの心なり、かく何かのことをあはれと深く思ひ染みたる躰なれどもなり。

○ことにいで丶も聞えやらず　とは、御息所其の心中に深くあはれと思ひ入りたることは多くあれども、言に出しても陛下へ申上げざりきとなり。萬感胸に隘る丶所を難みて、言葉にあらはさざるよしにて能

く聞えたり。舊註に「ことにいでゝいはゝゆゝしき山川の瀧つ心をせきぞかねつる」といふ古歌を引きて書けるよしに云へるは强言なり。

○あるかなきかにきこえいりつゝものしたまふを とは、御息所の病苦の躰に、恩愛の情をも添へたる容躰をいへるなり、神心恍惚として、我が身のあるかなきかをも辨へ兼ぬる程に悲み歎きつゝ臥して居たまふをなり。ものし給ふとは、こゝにては臥して居たまふことなり。

○御らむずるに とは、此の御容體を陛下の御覧じ給ふになり。

○きしかた行末おぼしめされず とは、陛下も御心まどひの爲に前後不覺の御ありさまになりてなり。きしかたは既往のこと、ゆくすゑは將來のことにて、既往のことも將來のことも思食し分き給ひ難き意なり。

○よろづのことを啼く〳〵契り宣はすれど とは、陛下此の御病人に對して諸事萬端の事共をあるひは御契約あそばされ、あるひは御誓言遊ばさるれどもの義なり。よろづのこととは醫藥療養のこと、加持祈禱のこと、病狀御報告のこと、全快參内の事等より、皇子光君の御身の上の事等まで宣はせしなるべし。啼く啼くとは、此のあるかなきかの御容躰にて臥し沈み給へるさまを見そなはして、御覧ずる御心にも、頻りに悲しく思食し給ひしより、啼きては語り、啼きてはかたりし給ふなり。

○まみなどもいとたゆげに とは、御息所には、目つきなども痒癢さうにてなり。閉ぢたる眼ぶたを重さうに見張りて、陛下の御さまを見上げ奉るさまにて、最御大患の樣子を書きあらはしたる所なり。

○いとゞなよ〳〵と いとゞは一層なり。なよなよは弱々にて力なき體なり。平生もしとやかにて力なき躰の御息所が、今は病苦と哀別とのせめぎに掛けられて、一層弱々とちからなき躰にならせ給へるなり、

○われかのけしきにてふしたれど　とは　彼我の差別も定め難き躰にて臥したれどなり。われかのけしきといふ語は、我か人かの辨別も附き兼ぬるまで、夢幻のごとくに衰弱したる氣色をいへる語なり。

○いかさまにかとおぼしめしまどはる　とは、陛下此の御危篤なる御容體御覽ぜらるゝに就けて、いかさまにかせむ。何としたら良からうぞと起つ居つして叡慮を定め兼ねさせ給へるよしなり。いかさまにかといふ下にせむといふ語を省きてあり。補ひてよみ試むべし。

以上を取都べて申せど、陛下には御息所と御別を惜ませ給ふこと限りもあらざれども、これを留めさせ給ふ御詞には限りあることなれど、さうばかりも得とゞめさせ給はず、叡慮の儘になる事なれど、御自親附添ひ給ひて、御息所の里方へまでも御はしまさまほしく思食し給へど、夫も協ひ難き事なれど、せめては、禁中御退出の御見送をだにし給はむと思食したるを、御息所の御都合によりて、それさへ協はせられぬ時宜なれど、行先の心許なさを云ふかたなき程哀しく思食させ給ひぬ。さて、陛下には御息所の御退出前に、御局に臨御遊ばされて、御息所の御容躰を親しく御覽ずるに、御息所は、元來いとにほひやかにうつくしげなる御方なるが、此の間の御病苦に痛く面瘦せ給ひて、ありし御姿の樣にもおはしまさず、その上に今度は御恢復も覺束なしと思食し賜へる故にや。何かと色々の事どもをいとあはれと思ひ染み給へる御容子にて、一際たのみ少く思食す御容子なれども、さりとて平生謹み深き御息所なれど、そのあはれに思ひ入りたる事がらを、あらはに詞に出しても奏上し奉らず。無量の思を帶びたるまゝながら、神心も恍惚たる御ありさまにて、御身もあるかなきかのやうに消え入りつゝ、御床に就かせ給へる御容子なり、今親しく此の容躰を御覽せられたる陛下は、餘りに御不憫に思食めさせて、

きしかた行末の事をも食されず。諸事萬端の事どもを啼く〳〵契り宣はすれど、御息所は御病苦のある上に、かく優渥なる勅掟を承るにつけ、これ今生にての御いとまでひと思ふにつけ、有難さと哀しさとが胸一杯にせまりきて、御勅答も申上げ兼ね兩眼に涙を浮べて、陛下の御顔を見つめて御座る眼つき、強ひて見張りては御座るもの丶、目蓋重げに御骨の折る丶容子にて、さらぬだにかよわき御身の、いとゞなよ〳〵と、彼我の堺をも見分き兼ね給へるやうにうとうととして御座る故に、陛下には何とせひかとかき亂る丶御心まどひに、起つ居つ叡慮を定め兼ねてれはしましきとなり。此の御二方の御擧動と、御心の裏とを細に書き分けたる筆つきに能々心を注ぐべし

漢文學講義（十三）

大林弘一郎

十一、百合傳（上）

頼襄

襄、字は子成、通稱を久太郎といふ、山陽、三十六峯外史などの號あり。安藝の人頼春水の子なり。初、尾藤孝肇に學び後に有名なる大儒となれり。天保三年、年五十三にして京都の寓居に歿しぬ。山陽の文名の高きことは近ごろ皆人の知れる所なれどその著書の中に、いとも、名高きものは、日本外史、日本政記、通議等なり。その文詩を集めたるものには、山陽詩鈔、山陽遺稿、山陽文抄、山陽題跋などあり、皆印行せられて世に廣まれり。山陽は、近世の文章家中いとも勝れたる大家なり。その文の自在にして、氣慨あり、雄大にして光彩あること、よく、其の文を讀みて後に知るべきなり。こゝに、揭げんとするは、遺稿の中に載する所なり。文、頗、洒落にして、事實も、亦、觀る

べきものなれど、之をわけて、前の課の拙堂が靜を稱揚せし例と同一に視んとす。拙堂、山陽、文に於いて、互に長ずる所あり、前課と比較して、その一斑を知るべし。

東山在京師。爲最佳麗地。每到花時。綺羅雜遝。絲肉嘔啞。盈耳遺響。相望於逕。而葛原最稱歌吹之海焉。外史氏曰。余誦慈鎭風葛蕭騷之詠。未嘗不歎今昔之異。又怪彼秀麗所鍾。豈無才貌俱秀。增美山水者。而徒見粉黛成陣。衣香扇影。與彩霞相亂而已。蓋嘗聞之故老。葛原之歌樓舞榭。夾路而起者。四五十年前。未至如是。寶永中。有女子阿穀。作茶肆于祇園華表南側。喜作國詩。好事者裒之。曰穀葉集。阿穀養一女。曰百合。二女皆以才藻名聞公卿間。冷泉黃門殊眷遇之。至召見之。而百合之事。最有足傳者。

こは、本傳の序にして、百合の傳を作る由來と、百合の養母の事とを簡短に述べたるなり。元祿の昔服部嵐雪が「蒲團着て寢たる姿や東山」と吟せしは、是、即、京の東山々の總名にして、山城の國愛宕郡より紀伊郡に亘れり。むかしより、三十六峯又、六々峯など呼びなせり。この山は、鴨川の景と相須ちて山水の美觀を盡くせる故に、京都の名勝多き中にも、取分けて、勝地の聞高き所なり。さて、この山の麓に市街連綿と引きつゞき、春秋の遊客群をなし、ことに、花柳の街もあれど、歌舞の聲も絶えず、最も佳麗繁華の地なり。滿山櫻樹多く、花時に到る每に綺羅を纒ひたる士女、雜遝して花を觀、あるは、酒を飮み、三絃を玩び、歌をうたひ噪ぎ狂ふこと甚しく、其の聲嘔啞として喧し、嘔啞とは、喜び笑ふ聲をいふなり。絲肉とは、絲は三絃などの絲によりて音をなすものをいひ、肉は肉好などつゞけて音聲の洪にして美なることにて、即、

歌を謡ふをいふなり。禮記、史記などに見えたり。かく、人々群集して狂ひ遊ぶゆゑ、あるは頭の飾物、即、櫛、簪、笄などを遺し落すことも夥しく路に相望みて此處にも彼處にもといふ樣に落ち居ると なり。この二句は、その雜遝する樣を形容していへる、詞なり。

さて、この東山、は、かくにぎはしき所なるが、その中にも、葛原といへる所は、最も歌吹の海ともいふべき、即歌の聲鳴りもの丶常に涌くが如く起りて靜かなる時なき所なり。秋里湘夕の安永年中にものせし都名所圖會に曰はく、

眞葛原は、祇園林の東、知恩院の南をいふ。

風さはぐ眞葛原の夕ぐれは
　都にしらぬ秋のやまかせ　慈鎭

又、同書拾遺にいはく

眞葛原、知恩院山門のまへより、南圓山長樂寺祇園林までをいふならん。

我戀は松をしぐれのそめかねて
　まくずか原に風さわぐなり

この歌は、慈鎭和尙坐禪石のうへに坐して詠給ふとなん。新古今集には、大僧正慈圓と見ゆ。これは、元の御名なるべし。歌のこゝろは季吟翁（北村氏）八代集の抄に、戀人の難面を松とし、我れもひかくるをしぐれとして詠るなり。我戀はといふ詞は、呼び出して松をしぐれの染かぬるが如くなりといふ五文字なり。眞葛原とれもひかけてもつれなく色もかはらねど恨る計といふ心なり、眞葛はこゝろ多く一筋ならぬ事にて、さわぐといふ字力あるなり、恨るこゝろのつよく切なるをいはんためなりとぞ。

續後撰　西園寺

かれはてゝ言の葉もなき眞葛原
　なにを恨の野べの秋風

新拾遺

今ぞしる眞葛が原に吹く風の　　道智法師

うらみも戀にうくる物とは

新後拾遺

まくず原露のなさけもとゞまらず　　従三位忠兼

恨し中に秋風ぞふく

右の抄に、名所にもありと侍りけれども、化野、千代古道のたぐひなり。世のあだなる事には、化野をよみ、君が代の久しきを千代古道跡はありけりとながめ、恨むるこゝろのさわぐを眞葛原まくすかはらとつゞけたり。後世名所にもよみたれど、今は、こゝかしこと云囃し、此のほとりの名とはなりけらし。

とあり。かゝれど、この邊は、むかしは野原なりしなり。慈鎭は、建久の頃、（即鎌倉時代）圓山安養寺に住せりといふ。

外史氏曰はくとは、**山陽自身は、史官にあらずして、**私に、歴史を撰み日本外史などの作あり、史家を以て、自ら任ずる故にかくいへるなり。山陽は、前にあげたる慈鎭和尚が歌どもを讀みて、眞葛原の今とむかしと相異せるを難せずはあらんず。而して、又、彼の東山は、山水秀美にして、殊に秀麗なる婦女の多く集る所なるに、いかで、才も貌も倶にすぐれて秀でたる女子の出でて美を山水に増すものならん。さるを、たゞ白粉をつけ黛を施したるなみ／＼の婦女のみ列をなし、その衣のかをりと扇の影などの、この山にたなびく霞と相映じ亂るゝをのみ見ることを怪しみたりき。かくいひかけて、暗に、百合阿穀などの出でたるをいはん爲の伏線となしたるなり。蓋し嘗て之を故老に聞きしに、この葛原の歌樓舞榭（榭は亭の如きものをいふ）などが路の兩側に立ち並びて盛なることは四五十年の前には、かくあらざりしなり。そのさむしかりしころ、即寶永年中に、阿穀といへる女子ありて、茶店を祇園の祠の華表の

南側に設け、茶を賣りて客をもてなしてありしが、喜みて和歌を詠みたり。ある人、その歌どもを集めて穀葉集と曰ひて、世に行へり。阿穀一女を養ひて居たりしが、その名を百合といへり。二人ともに、皆、才あり文藻ありてその名公卿の間にまで聞えたりしが、冷泉爲村卿（黄門とは中納言の唐名なり）殊に、之を憐みてあつく遇し給ひその邸に召し出されしことありき、而して、百合の事蹟は、最、傳ふるに足るべきふしありとなり。

この穀百合二女の事は、近世畸人傳（伴蒿溪著）、日本野史（飯田忠彦）近世叢語（角田簡）などに見えたれど、今、拾遺都名所圖會にのせる所をこゝにかゝげん。

こゝに、今より（安永六七年頃）いそしの春秋のむかし、享保の頃、下河原（祇園大鳥居の正面の通をいふ）に茶店をかまへし女あり。名を梶といふ。容顔おのづからの美艶ありて、つねに、粧粉をほどこさず、ゆきゝの人は、目を送りけるとぞ。和歌を好む、梶の葉といふ集あり。

雪ならむ梢にとめてあすやみん
　よるのあられの音計りして　梶

此梶の跡を嗣で、又、百合といふ女あり。夫と共に、東武（東の武藏といふことなり）より來り、漂流して、眞葛原に茶店をいとなみ、なりはひをせり。此女も、和歌を嗜みて、早百合葉といふ集あり。百合のむすめに、まちといふあり、是、大雅堂貨成が妻なりけり。書は、大和の柳里恭に學びて、夫の風流に從ひ、玉瀾といふ。和歌は、夫婦共に、冷泉家の門につらなりける。あるとしの春のあした、若菜に梅ををりそへて、携へ殿參し上りける時、御うたを賜ふ。

つむ若菜をりそふ梅の色もかも
　春の心のはなかたみかも

又、ある日、殿參しける時、まち女に遊可といふ名を賜り、其の上に、白き手巾、赤き蔽膝を賜ふ。これより、としのはじめのれいんよろこびには、手巾をかしらに置き、蔽膝を腰に絡ひて參りけるとなん。此人も、三とせのさき、辰の年の末の秋、下の八日にはかなくなりにける。今はむかしとなりてこれらの品も、大雅堂に藏めおりけるとなん。

娘のもとゐまくずの花を送りて　　百合

眞葛葉の色しあせずよやしなひし
　親の守りの花のひとふさ

　　　　玉瀾　遊可

さくら花色うつろはでいにしへの
　春のまゝなる香に匂ふらし

また、津久井が文久板の花洛名勝圖會にも、前文と、はゞ同じく記したれど、別に梶が十四になりける年の暮に歳暮懷といふことを詠める歌をのせたり。

こひ〳〵てことしもあだに暮にけり
　涙の氷あすやとけなん

また百合の歌をのせたり。

うたゝねの枕の露をよすがにて
　通ふ光やよひのいなつき

なほ、くはしくは、花洛舊跡一夕話に出せど、こゝに略するよしことわりおかれたり。

百合者。不知何許人也。或曰。江戸人也。爲人明慧。紘索鍼黹。一見輙解。既爲阿穀所養。習其母所爲。喜好吟咏。日著茜裙。捧茗供客。而偸閒輙手筆研。花香鳥語。隨觸入題。性不甚裝飾。而天姿娟秀潔白。淡粧常服。楚々動人。過者無不留連。都下貴介。豪富子弟。多惱意者。少年自喜者。或傳粉顧影。以求當其心。百合不顧也。（第一段）

この一段は、先、百合の性行を敍したるなり。これ

より、本傳に入るなり。百合は、もと、何處の人なるか明ならず。或は江戸の產なりしともいへり。その人となり、至りて明智にしてさとく、紜索、即、亂れ交りたる糸の如き解し難きことも、鍼黹、即、鍼をもて縫ひとりたる刺繡などの爲し難き藝も、一たび見れば、直に、解得したりといふ。既に、阿梶に養はれてよりは、その母の爲せることを習ひて、つねに、歌をよむことを好めり。日々茜染の裾の衣をつけ、茶を汲みて客をもてなして、なりはひとしながら、閒暇ある時には、必、筆をとりて、歌に心をよせ、花の香のゆかしきも、鳥の音の妙なるも、目に見、耳にふるゝにつけて、歌の資料となしたりき。

百合は、かゝる賤しき業をなせるものにも似ず、天性、身の裝を心にかけず、少しも飾れることなかりしかど、天のなせる麗質なれば、そのうるはしさは、ことに、秀でて潔白なりき。されど、淡粧したるさま、常の服にてあれど、楚々として、たをやかに、あでやかなること、人の心を動すばかりなりしかば、この店を過ぎるものは、居留まらぬはなかりけり。連は、つゝけて居る意なり。

かゝれば、百合の名は、都の内にひろまりて、都下の貴人の子弟、また、富豪家の子弟なども、意を百合に注げるもの多くして、その中にても、年少のみやび男を以て、自負するものは、或は白粉などをつけ、髮かたち後影までをも氣にかけて、以て、その心に當らんことを求めけれども、百合は少しも目にかけざりきとなり。

百合が詠歌に心をよせたること、既に、奇なるに、また、その裝飾に心を用ゐざること、更に奇なり。また、その心の浮薄ならざること益奇とすべし。これ、この傳ある所以なりと知るべし。

百合有下所二素暱一徳山某者上。爲二幕府士人子一。爽俊人也。因レ事流二寓都下一。落魄不レ能二自活一。

百合爲之傾竭心力。因得不乏。如斯者有年。有孕。生一女。情好益篤。會德山氏宗家嗣絕。族人議取某繼之。仍使使者齎書來迎。某乃欲與百合俱歸。百合辭曰妾與郎君綢繆十年。一旦萍離。遂斷極難爲情耳。某顧郎君晝錦。携婦人以旋。恐招人指目。某固要之曰。吾飄泊客土。得不遺溝壑。以致今日。皆因卿力。今一旦富貴。而遺弃糟糠。余不忍也。百合固辭曰。妾忝過愛。寧不蹈躍欲從。所以不能奉命者。抑郎君承重宗祧。當選良聘儷。路傍花柳。何堪攀折。即弃從纒綿。不唯玷辱郎君。施及祖宗。妾深恨於心。饒使憐充側室。風波中起。牽累郎君。是亦妾所逆覩也。妾日夜籌之熟矣。則一日之訣離。所以全十年之恩情。郎君珍重。妾生死自此辭矣。幸勿復以妾爲念也。某不敢强。乃欲携所生女去。百合曰。郎君少壯。更伴新人。前途多福。不患無成行遶膝之樂矣。妾既辭郎君。誓不見他夫。獨守青燈。賴有此一塊肉。見此。猶見郎君。幷之附去。何以消日。某遂舍女而去。」

第二段

この段は、百合が節操の正しきことを述べたり。これ本傳の眼目ともいふべきものなり。されど、その敘事も、巧にものせられたり。

百合が、もと親しみむつまじく交りし德山某といへる人ありけり。もと幕府の旗元の子にて、生れつき、けだかく、さわやかに、すぐれし人なりき。事によりて家を出で、京都に流浪して、いたく落ちぶれ、自活の途にも窮する有樣なりき。百合は、この有樣をあはれに思ひ、心力のあらんかぎりをつくし、ものをみつぎおくりしかど、これによりて衣食の窮乏を免れたりとぞ。かくて、年月を經し程に、百合は、身重になりて、一女を生めりしかど、兩人の好情は、ます〳〵篤くなりき。

たま〱、徳山氏の本家に家督たえしかど、その一族の人々評議して、某をして之を繼がしめんとし、使をして、書を持たせて、京都に來り迎へしめたり。某、即、江戸に歸ることゝなりて、百合をも、共どもつれ歸らんと思ひしに、百合之をいなみて、いふやう、「妾郎君と交りしより情好日にあつく、(綢繆は纏綿と同じく親密に結合する意なり。)して十年をも經たりき。さるを、一旦、離別の期來りて萍の離るゝ如く、蓬の斷ねたるが如く、立ち分れんことは、いかにしても、情なきことの極みにて、心も心ならぬことなれど、また、おもふに、郎君は、錦を着かざりて晝故郷に歸ることとなれど、婦人など伴ひて旋らど、恐らくは、人々に指さゝることもあらんか」と。某は、固く之を要していふやう「吾が身去るべき稀なるこの地に飄ひさまよひしに、行き仆れものとなりて、尸を溝壑の中にも遺られずして、今日の幸運を得たるは皆これきみが力によらぬはなかりき。さるに、今、一旦、富貴の身となりて、糟糠などの食を常にせし貧しき時の妻を遺し弃てんは余が心の忍び難き所なり。」と。百合、また、之を固くいなみて、いふやう「妾過分の恩愛を忝うするものなれど、いかで、踊りあがりて、喜び從うて江戸に赴くことを欲せずてあるべきか。さるを、郎君の命を奉ずること能はざるゆゑは、そも、郎君が今後は重き責任を負うて、宗祧、即、本家の祖廟の相續となり、永く、家を嗣ぐこととなれど、良善なる婦人を選び、儷、即、配偶者を聘し夫人とせらるべし。妾の如き路傍に咲ける花柳の如き賤が女は、いかで折り取るに堪ふべき。もし、奔り從ひて、御身に纏綿して附きまとはゞ、たゞ、郎君の德を玷き行を汚し辱むるのみならずして、辱を祖宗にまでも及ぼすこととなれど、妾は深く心の中に恐れ居れり。たとひ、また妾が身を憐みて側室として養ひれかるゝとも、或は、中途にて風波の起り、夫人との中らひあしかりなんには、郎

君の心を牽き累し、御身の憂となりぬべし。これ妾があらかじめ憂ふる所なり。妾、日夜心をくだきて、行末の事どもあつく思ひはかりたれど、かくまうすなり。今、一時の訣別の悲を忍ぶは、こし方十年の恩情を全うせん爲なり。悲は一時にして、恩愛のふかきことは、終身忘れず。これこよなき良法なり、郎君は、この後、いと〳〵御身をいたはり給へ。妾は一生の御暇乞をこれにて申し上げん、幸に、妾が事をな心にかけさせ給ひそ。」と。某も、その詞の理あるを以て敢て强ひていはざりき。かくて、その生める女子をつれて歸らんとせしに、百合は、之を止めていふやう「郎君は少壯なる御身にて、新に婦人をも迎へ給へど、前途の御運もよくて、多くの子供を生み給ふべけれど、幾人も行列をなし、膝下を取り廻す程に數多くならせ給ふ樂なからんことを患へずともよかるべし。妾は、郎君に辭したる上は、もはや、他の夫をも迎へ侍らじ。たゞ獨、ほの暗き燈を守りて明し暮さんのみ。賴に、此の一かたまりの肉躰（一塊肉とは、血を分けたる此の一人の兒といふ意なり。近き例は十八史畧などに、趙氏一塊の肉の爲のみといへること南宋紀の終に見えたり。）即、この一女あり、これをわすれがたみにして、郎君を見るが如くし心を慰めんとこそは、思ひ侍れ、之をも併せてつれ歸られなば、何をたよりに月日を送るべきぞ。」とてなげきけれど、某げにもと思ひてこの女を遺し置きて、江戸に歸りけりとぞ。

抑、此の一段に於いて、百合が心のすが〳〵しきことも、そのみさをの正しきことも、よく見ることをうべし。路傍の花柳などと、自、さげしめへりくだれりとも、その心は實に尊ぶべし。泥中の蓮とは、これ等をやいはまし。

（つゞく）

（本篇は、長けれど二回となしぬ。）



漫録

主從心得草（續）

諏訪忠元　寄贈

又不便さにせし事の却りて殺生なせる事もあり。一人の孫を寵愛のあまり、あまき物を喰せ過ぎ、病身にする殺生もあり、子を育つるに愛に溺れ、見たがる物を見せ、聞たがるものをきかせ、着たがるものを着せ、はしがるものを與へ、教ゆることををしへずして氣儘氣隨に身をもたせ、子息の内は濟むにもせよ、世持家持となつたとき、遊び事や慰みごとばかり器用にて、肝心の家業が御留主では、行末が覺束なひ、大小となく一軒の主は大事の物じや、其身正しからずして身上を持崩せむ、其家々相應に妻女眷屬が難儀する、是又大ひなる殺生ならずや、鳩や雀を殺すを見て、殺生なりと顏を顰め氣の毒がる、か丶る人にも、自家に思はずしらず無益の殺生する人多し、手代小者を使ふにも、いふべき事は急度いひ、止むべき事は急度止め、教ゆべきことを急度をしへ、呵るべきことはきつとしかるは後の爲なるに、是は人の子なりと思ひ、呵るべきをも急度しからず、止むべき事も急度止めず、少々の事は世間並など丶料簡して聞かぬ顏見ぬふりして濟すこと是又無益の殺生なり。首尾好宿這入するにもせよ、其とき身を持かねるものなり。●

扨又金錢は多少によらず必麁抹にし給ふな。此間も去所の、何でも、十九文見勢の端に小財布ありけるを、乞食ちよいと取りて走り行、外の乞食是を見付、引捕へて突倒し、盗みせまじきとての乞食ならずや、ぬすみせむ乞食をやめよ、盗みするごじきがありては、乞食仲間の顏垢しなりと、財布取かへし、彼店へ持行て、我等本よりぬすみせまじきとての乞食なれども、根がな

いからの乞食なれど、見るに煩惱手近き所に錢金あれど、ツイ盗む心が發りまする、たとひ手を出しぬすまずとも、心に罪をつくらする、是無益の殺生なり、人のほしがりそふな者は、かならず手近き所にれかしやますなと異見して歸りけり。是又乞食のみにあらず、取よき所に錢金を置ば、盗人にあらざる人を盗人にする事もあるもの也。是大ひなる殺生ぞかし、先刻もいふ通り、蚤もころさぬ程の人にも覺ず殺生する事あり、御用心御用心とあり。此通り相違なし。金銀など猶更手近き所に置べからず、人を科人にする事世間には澤山ある事なり。凡人間の心量りがたし、今日は善にして翌日は惡、皆時々にうつりかはるは人情の習ひ、是非もなき事なり。三日顔向せざれど其智はかり難しともいへり。去ながら生得にもよる事なり。たとへあしき中に染りても心愼なる者もあり、又よき中にひたりても腹あしき者もあり、是は限りしられぬ事なり。大旨かろき者抔には、大金を見せなどする事第一惡し、只今迄忠直の者も、元より貧窮の心うせず、兼て望の品も數々なれど、不圖心を取たがへ侍る事もあるべし。取分旅行などの折節は、金銀の出しいれ人目にかゝらぬやふにすべき事心得の一ッなり。かやふの事間々聞けるゆへしるし置、急度愼むべし。又思はず殺生の事も、心に留てなきやふにすべし。此類あまたありといへ共、餘は押てしるべし。歌に、

　れちこちのそこともしれぬ旅人は
　　むつましけれど心ゆるすな

浮世いかだ舟

作者不詳

よろづ麁想なれど仕損ずる事

今はむかし、うき世坊その生れつきいかにもそさうものにて、わらひ草になる事ればかりき、やかたの内にて能をさせて御らんじけるに、主君いまだ出給はず、其うちに能をはじめよと御つかひ有て、わきのうすでに

はじまりけり。うき世坊を召て、能は何ぞと御たづね有。只今高砂にて候といふ。高砂は番ぐみにせざりしが、高砂ではあるまいと仰らるゝ。いやしかと高砂にて候と申上る。おのれは高砂をしりたるかと仰らるゝに、うき世坊存じたると申。さらばうたへきかんと仰らるゝ。浮世坊かしこまりて「いはふなる心ぞしるきくもりなき」とうたひければ、をかしがり給ひて、さだうぼうずにおれききけと仰らるゝ、茶道の閑齋うけたまはりて小姓衆にむかひ、まことに高砂で御ざあるよといふた。」是につきて、そのかみ、ゑちせんの宰相殿に御能の有し時、澁谷が太夫にて、張良をいだしける後のてはに太夫のふゑを聞そこなふて、龍神がとんで出たり、狂言師そのまゝ袖をひかへて、いまだ太夫がいでぬに、まづ爰に居さしませどて太鼓うちのそどへおしつけておく、其後太夫出てよき時分に、さきの龍神いでよといへど、龍神中々いでまい、此やうな恥をかいた事はない、ねんもなう出る事ではないといふて尻ごみするを、地うたひなんぎしてやう〳〵引出したれど、猶々首尾あしかりけり。

展墓紀行（下）

安藤紫光

つとめてのあしたおきいでしまゝ前庭に立てど、日未上らず、朝霧ふかく四方をたちこめて、見わたすかぎりたゞ白き美しき薄絹におはれたらむがやうなるに、近き梢のあしたのそよぎ静にゆらげば、はと〳〵と音しておつる白露の、草葉の上にまた球を聯ぬるはど、前珠後珠相觸れ相合しくだけみだれ、ふたゝびまろびて地上にきゆるおもむき、われは未かくのごとくうたはれたる詩歌の美をきかざりき。いかに天才ある詩人も、永久に自然のいみじき力には打勝つあたはざるなるべし。寺の森とおぼしきあたりより、きはめて静なる鳩の聲の霧の中にきこゆる、草刈る少女の美しき聲の眞菰多き川そひにひゞきくる、げにいひしらす

めでたし、朝霧の少しくうすくなりゆくまゝに、こゝかしこの家居樹立の上の方のみ、ほのかに自然の一抹し去りたる筆の蹟の、いかに心曳くさまなるよ、まことにわれはかくばかり風景の美にうたれたることは少かりき。とりわけてめでたきふしのあるにもあらず、おしなべたる世の常のさまなりながら、田舍の靜なる朝の眺は、ふかくもわが感興をひきれてしけるよ。あゝげにもこれをこそ彼の美しき自然の淡き粧とこそいふべけれ。徒に花ばなしく、目眩くばかりよそほひかざれるよりは、淡きしづかなる姿のいみじく心ひかるゝは、たゞにわれの僻心によりてのみにはあらざるべし。しばしありて東の方に湖き光のほのめきいでたりとみるほど、白銀を鎔したらむやうなる日は上りそめたり。かくてやうやく霧もはれゆけど、千頃の稻葉の露かゞやきて見えぬ。

朝餐を終へて後老人に導れて寺にいたり、過去帳などいださせて母君の戒名をえ、さて卒塔婆求めむとするに、こゝにはあらずといへど、使を流山にやりて求めさせなどして、この日は畢りぬ。心の中にのみ深く母上の御前をふしをがみつゝ。

さる心がまへもなへてこゝに來りしものゝ、このわたりは一月おくれの宇蘭盆とて、この頃いそがはしく取行ふほどなりしかど、折よくも來あはせたるなりき。家々にて今宵は佛の來ますべきなりとて、精靈棚のそなへなどかひ〴〵しくいとなむをみれど、わが母上のみたまは、今宵いづ方にか到りつき給ふらむなど、はかなき事のそゞろかなしくもおもはれぬるよ。

あくる日の朝卒塔婆もとゝのひたれど、勤行に來れる僧に誦經をこひ、閼伽を手向け、香を焚きてその前に跪けど、今昔の感いたく胸にせまりて、おのづから淚のあふるゝをおぼえず。

我は記臆す、余は實に母上の無上の寵兒なりき。余は實に母上の唯一の愛子なりき。母上は頑是なきわれを視ては、その憂愁をわすれ給ひしなるべく、われも七

歳の春まで、浮世の辛酸を知らでぞすぎぬる、さるを掌中の珠としてあつく撫育せられし稚子は、今墓前に跪く一寒措大となりたれど、これを愛護せし人は早く幽冥境を異にし、杳としてその温容に接するに由なし。あゝ悲しきかな。されど、先つ者れくるゝ者いづれか幸にしていづれか幸ならざる、我これを知らず。本の露末の雫、何をか吊し何をか慶せむ。たゞ母ゐまさずなりてより、常に現世の酷薄にくるしめるわれは、ひたすらあたゝかき慈母のふところこひしくなつかしく、かきのせくれし膝の上したはしく、母ゐまさむ余のこらずをとこそれもはるれ。

久しき流寓の後、いまこゝにきてみれど、拂ふ人なき墳上の草は離々として露は無數の涙を點し、れふ人もあらぬ塋畔の鴉は啞々として聲は無限のあはれをひく。

われは實にこゝに幾多の沈思に耽りぬ。よしやなき人はよぶにもこたへずたづぬるにも見ねざりきとはいへ、われにはたゞ目のあたりれはすがごとくれもはれぬ。かくてぞ、われは親しくそのなぐさめ給ふ御言をきゝ、そのあたゝかき御惠を蒙りたるやうの心地したる、あはれこの時のこゝろよ。之をせめて筆に上せむとして二葉あまりに及びたれど、ね堪ふまじくなりてやみぬ、われはそれをこゝには記さゞるべし。わか偏れるかなしみの人々の純潔なる胸に波だゝせむをことをれそるれぞなり。素よりわが筆には、人々をうごかす程の力はあらじ。されど、心みづからゆるさねど、かくて佇徊躑躅感慨憂愁交々胸にあふれたるわれは、いつまでも立ち去りがたくれはねたれど、今日はこのわたりの故舊をたづぬべき宿約もあれども、せめて立ちかへるに、香烟ゆるく林樹の間を繞るもあはれふかくぞ、われは暗涙の滂沱たるをればねざりき。此の日諸處の故舊をとひてあつきもてなしをうけたりしが、その翌日は、松伏村までゆくべき心がまへありけれど、猶二三日はと止められしを、しひて晝すぐる頃立ちい

でぬ。寺にゆきて母上の御墓にまた一拜の香をさゝげ、再泣きて別を告げまゐらせてこそ松伏へむかひしか。

松伏にゆきてかはらぬ人の情嬉しくすぐすこと二日、かくて再紅塵巷裡の人となりぬるは十七日の夕のことなりき。

我はたゞ久しくおもひ結ばゝれたりし展墓の事をはたしをへたるのみぞ嬉しき。

　　をりにふれてかきつけたりし

母君の御墓のわたり草されて
　　涙催す夕風ぞふく

おく露の繁き御墓の夕そよき
　　いとゞ心もかきみたれつゝ

椎多き御寺のはやし霧こめて
　　もれくる鳩の聲ぞ靜けき

里の小川汀の眞菰昔わが
　　うなゐ遊のしのばるゝかな

　　わが友洲鳥子にこの事いひやりたりし返事に
　　　言ひおこせたるいと多き中に

母を思ひ夏野をわくる人故に
　　吾さへいとゞ袖のつゆけき

かりそめに契らぬものを母君に
　　我もとだにも名乘してよや

　　おなじく西海坊よりも

露はらふ人もあらじとかこちたる
　　君が袂はいかにひぢけむ

亡魂は天かけりつゝ己が子に
　　幸多かれと護りますらむ

われは、これらの親しき友を、永くわするゝことあらざるべし。

（完）

歸省雜錄

白松園主人

ふみ月の、初めつ方より、例の、夏季休業に、なりぬれば、ことしはふるさとに、老いたる母をも訪ひ、暑さをも避けばやと、遙々皈り來りしに、僅かふたとせがうちに、面目いたく改まりて、あるは兵營に、あるは鐵道に、諸々の會社さへ、設けられて、あまさかる鄙も、世の文明に伴はれ、開けゆくこそ、たのもしけれ。

きのふは、山を越えて友を訪ひ、けふは、里を過ぎて親族をたづぬるに、かにかくに、恙なきを、喜び聞ゆるにつけても、いたく、れよすげたりなど、もてはやして、額髮、撫でまほしうすめるも、親しきどちの、習ひなりけり。こし方の、ありし事ども、うち語ふに、朝はまだきより、長き日の、暮るゝも知らず、夜に入りては、特更に、夕風涼しきわたりに、簀子めきたる者、とう出て、有明の月の、山の端に入る頃まで、語りあかすに、猶あかずればゆるに。或時は、谷の細路を踏み分けて、落ちくる瀧津瀬に、身を滌ぎ、また或時は、鏡なす砂川に、釣を垂れなど、いづれにつけても、樂しからぬはなし。

ひと日、友がり、音づれてのかへるさ、敎證寺といふ、寺の前にさしかゝりて、暫し汗を拭はんと、照る日の蔭なる、楢の木のもとに、扇を使ひけるが、餘りに渇して、堪へがたければ、一碗の湯を乞はゞやと、方丈より、右手に當れる、かたに、丈ばかりなる、柴のとばそありけるを、入りて見るに、泉水築山など、をかしうて、前栽の木がくれに、さゝやかなる離座敷あり。此の寺には、先住の老僧ありと、曾つて聞きしが、さては、それなんめりと、獨り點頭かれて、やがて、高やかにおとなふに、奥の方より、いらへぬるは、いと老いたる者の、聲なりけり。軈て、出で來ぬるを見るに、眉白く腰曲りて、齡七十路余れる、老法師なるが、

懇に請ずるまゝに、すのこよりうち上りて、疊三枚なる座に、導びかれぬ。床の邊には、一帙の詩集に、菊の花びら一枝を活けて、香の煙心細う、たなびきたり、汲みもて、出さるゝまゝに、いろひもせで、茶いたくうち啜りつゝ、兎かくうち語ふに、法師、おん身はいづくとゝふ、云々の處にて、氏は云々、名は云々といふに、いたく打ち驚きて、さては御身の父君は、愚僧とは、若かりし時の、學友にて、こよなく親しかりつるものを、さるにても、ゆくりなく此處にて、會ひまゐらせんとは、前きつ世の緣なかりせぞなどいふに、おのれもいと驚かれて、今更に懐かしう、父がありし昔の事ども、尋ぬるに、こよなき人を、得たりけりと、おもひにけれど、まめやかに、昔語請ひ求めて、止まざる中にも、嘗て、父が師なりきと聞きつる、市川翁のことを問ふに、老僧語りけらく、長門國、厚狹郡厚狹村なる、市川玄伯先生と聞えしは、德行いと高く、やむごとなき、經學者にておはしけり。されど、名聲夙に四方に聞え、當時關西にては、實に、其右に出づる者なかりき。身陪臣なりしかども、藩主毛利公、其名を聞き給ひて、召して、藩黌明倫館の、教授となさんとし給ひしも、病多き由申して、就き給はざりき。門下の書生を導くこと、極めて懇篤にして、總て其性によりて、導き給ひ、決して、書生を叱責するなどのことなく、精神教育をもて、旨とし、若し非行ある時は、只室に籠りて、泣き給へり。嘗て語り給ふやう、衣食思ふがまゝなる、子等の身こそ羨ましけれ、おのれ、江戸に在りて學びける折は、子等の如き、餘裕とてはあらざりければ、欲しき肴さへ、買はんこといと難く、酒に至りては、更に六づかしかりければ、只折々、青銅二文をもて、鰻の頭を買ひ來りて、之を燒き、一合の酒を、德利に入れて、そを行燈なる火光の上に、吊し置く時は夜半、讀書を終る頃には、德利の底熱して、酒は飲むべく温まりぬ、即ち鰻の頭を肴に、之れを飲むに、めでたきこと、限りなかりき、云々と語り給へり。

之れを聞くもの、背に汗して、頭だに擧ぐる者なかりき。一日門人某の宅にて、易を講ぜらるゝ時、俄に病起りて、遂に其まゝみまかられぬ。門人等議していふやう、先生、平素清貧におはしけれど、家道極めて苦し、何をもて、嗣君が勉學の資に供せんと、一生曰く、先生常に、書冊の間より、金を出し給へり、或は蓄あらんかど、即ち數百の書を取り出でゝ、振り試みしに、片々として落つる者は、皆金なりけり、しかも、多くは封のまゝなりしかど、皆歎じて、其潔きに服しぬ。先生の碑文は、友人なりける、佐藤一齊翁が、物せられたり。さておん身が父君は、おはかた、市川先生の門に、ひとゝなられつるなり、と委さに語りて、猶くさ〳〵の話を、とり集めて、問ひもし語りも出で、互に懷舊の情に堪へかねて、袖をぬらす程に、日も傾きけれど、今はとて、來ん年は、再び皈郷すべけれど、その折には、必ず訪ひまゐらすべし、老体恙なくおはせなど、契りて、立ち出づるに、老少いつとも定かならぬ習なるに、おのれ既に古稀を越ゑたれど、命旦夕に迫れり、恐くは、再會すること、六つかしう候ひなん、と聲さへ沈みて、蕭やかにうら悲しう、路の邊まで送り出てゝ、彼處を行き給はゞ、近道なりなど、さし示して、袖を分ちぬ。戀々たる涙の玉は、あはれ、道芝の露とや宿るらむ。（未完）

兩縣令競レ義婚レ孤女　（二）

湘玉女史譯

却說本縣に、賈昌と呼べる一個の百姓あり。昔年人の爲に誣ひられて人命犯の罪に陷り、死刑に問擬られ獄に繫がれて、只死を待つ而已なりし處へ、石知縣任に到り、寃の情を審出して、直に他を放釋したり、これによりて賈昌は太く保家活命の恩を詫びて、いつかは報効を爲さんと心に銜み居たりけれども、其機會なきまゝ一向外に出で商を爲し居たりけるが、

近日故郷に回り來たるに、恰石知縣の死去せられたる時なれば、大に驚き、急ぎ邸に往きて石知縣の尸を撫て慟哭たり、特に其遺族は葬式を營む力もなき程の哀れなる有様なれど、備に衣衾棺木を辨じ、他を殯殮し合家掛孝を着け墓地を買ひて懇に埋葬せり。又官糧の缺損尙多くありときゝて、石知縣に替りて賠補はんと思ひたれども、萬一この錢糧の干係よりして禍を惹くやうのことありてはと心配し、是は其まゝに止みたりけれど、小姐と養娘とは發出され、其賣買を牙婆に管されたりときゝて、賈昌は慌忙て銀子を帶了し、李牙婆の家に尋ね行き、他等の身價を尋るに、李牙婆は硃批的の官票を取出し來り示して道やう、養娘は十六歳なれども只三十兩と判め、月香は十歳なれども五十兩に判めたり、かく金子の差違あるを怪み給ふならんが、月香はまだ年幼けれど容貌秀美て愛すべき人柄なり。養娘は歳長たれど、粗使婢として使ふより外に道なければ、斯く判價の等しからざるなりと、

賈昌之を聽きて、吝色なく身邊より銀包を取出し、八十兩の紋銀を兌足て牙婆に交付し、別に謝禮として他に五兩を與へ即時二人を領取りて家に回れり。牙婆は兩個の身價を把りて官庫に交納たり、地方官はこれにて石璧の家財人口すべて變賣し盡したることを上官に呈明し、上官は只得別項の金を那移して、官糧の欠損を賠補ひたれど、この下に話すべきこし。

却說月香は父親の死してより一刻も淚の乾くひまなく、啼々哭々て在りけるに、今日賈昌と云ふ者に贖はれたれど、固より賈昌が什麽なる人なるやを知らされは、他が何故に大金を出して我等を買取たるやを疑ひ、必然賤き業に落さんとの下心ならむと思込み一路に只痛き哭みて已まざりければ、養娘道やう、小姐你今番かの人の家に行きたまはゞ老爺の身邊に在はして隨意に暮したまひし時とはちがふゆゑ、屹と覺悟なし給へ、只管痛哭みてればさは必他の人の腹立ちて打ち罵り、辛き目に遭ひたまはんと注意けれど、月香は之を

き丶ていと丶悲傷に堪へざりけり。誰か知らん賈昌は一片仁義の心より出たることなれは、二人を領れて家に回り、老婆を呼ひ出して二人に相見せ、老婆に對ひて說くやう、この御方は大恩人石知縣の小姐なり、那の一人は小姐に伏待く養娘なり、われ當初恩人なかりしならんには、すでに寃の罪を蒙り縲絏の中に死す可かりしを、恩人の爲に今は不足なく生活居らる丶なり。されは今日に小姐を見參らするは恩人の面を見參らするに同じ心地するなり、你も其心して別に一間の香房を收拾けて、養娘と共に入れまゐらせ、日々好き茶や好き膳部をすゝめ、懇に款待し怠慢なきやう注意すべし。この後倘親族の方にても來訪らる丶ことあらは、那時送り還し參らせん、是我か一點の報効の心を盡すなり。若親族の方なきならは、小姐の成長を待ちて、本縣のうちにて當戸對的人家を擇みて、嫁入らせまゐらせん。さすれど恩人の墳墓にこの親しき人の手して水を手向け花を供し、看覩る丶ことの出來得るなれど、恩人も地下にて滿足に思されん、又この養娘は舊の如く小姐に伏待しめ、兩個して些の女工を做すの件と作し置き、養娘は一切外のことに使はぬやうすべしと諭しけり。月香は生成伶悧性なれど、今賈昌がかく老婆に吩附終るや、早くも立ちて前にすゝみ、萬福を唱へ、且道やう、奴家父をも家をも失ひて身を賣られたるを、御主人の情にてかく救ひ出されたるなれど、奴となし婢となして使ひ給ふも固より當然なるに、さるを今恩人の分に過ぎたる擡擧を蒙り、再生の御恩身に餘りたり、ねがふは奴が一拜を受けて義女とも見做給へ末長く孝養を盡し參らせんとて忙く下り跪き叮嚀に挨拶なしけれど、かの賈昌は慌忙て、己れも跪き禮を返し、老婆をして小姐を扶け起さしめて上座に押据ゑ道やう、小人は老相公の民にて、この螻蟻の如き命も、都て老相公の賜なり。この養娘すら小人に於ては怠慢めに、まして小姐に對しまゐらするをや、小人怎で尊大りて義女とせんなどの無禮を申さんや、暫くこの

寒家に忍びて在はせ、權に賓客として相待申さん、小姐怠慢を責め給はざれど、小生夫妻の幸なりと云ひけれど、石小姐は喜びて再三厚く稱謝たるに、賈昌は又家中の男女に吩咐て、石小姐と稱ふべきよしを云ひ聞かせ、小姐は是より賈昌夫婦を賈公賈婆と呼びけり、原來賈昌的老婆は素性賢慧からぬ女なるが、初月香を看しときは、月香が生得清秀乖巧なるを見て、自已には男女の子なきゆゑ、幸ひ螟蛉女兒とせんと心下に喜たるに、夫が賓客として慇に款待べきよしを說くをきゝて、早や三分は煩さきことに思ひたれど、石知縣は丈夫の恩人なるに相違なければ、詮方なく丈夫の言に從ひ勉强て奉承たれども、後來賈昌は外に出で、商を爲し、好き絹好き紬を得るたびに先づ小姐に與へて衣服となさしめ、家に回りたる時は先づ石小姐の安否を問ふなど、優待一方ならざれど、老婆はこれを見るたびに漸々不平の心を起し、今迄愼みたる馬脚を露し、但賈昌の家に在るときは、朝饔夕飧にも規矩に違はぬやう丁寧にし、一と口の假意奉承をも言ひけれど、賈昌が家に在らざるときは、飯も時々にあてがはず、別に一種の光景を呈はしけり、加之、丫娘を外に呼出し、雜差雜使に追廻はし、一刻も空間を與へず、又石小姐には每日時間を限定て若干の女工を爲さしめ、倘手遲脚慢るやうのことあるときは、雞を捉へ狗を罵るごとく口汚く言ひ罵り、口裏常に乾淨ならぬ有樣となりたり。正是、

人無㆓千日好㆒　花無㆓百日紅㆒

執心

蓬生屋女史

むかし繪佛師良秀とて、日來佛を畫きて世を渡るものありけるが、あるとき隣家より火出で、風おしおほひ來りて、やがて我が軒につかんとす。良秀は何も取り敢へず大路へ走り出で、さかまき燃るほのほをうちながめたり。家の内には人の書かする佛もおはすれど、衣

絹などさま〴〵の重寶たゞ家の内にあるを、繪佛師は更に心にもかけず、何一つをも持ち出でんともせで、向ひのつらにたゞずみながむるをあさましき事とて人



々怪しみけれど、良秀はなほ騒がず、向ひに立ちて、たゞ欣然吾が家の燒くるを眼もはなたでうちながめ、として何事か得たるげに、折り〳〵はひとりうちうなづき、あはれ、日來はわろく書きぬ、さてもいたき所得しつるかなとて大によろこびぬるに、訪ひ來るものみなあきれ、家をも寶をも燒け失するをも見ながら、斯く立ち給ひて、何の所得かある、あさましきことかな、物のけのつき給へるにやなど、人々あきれ笑ふを、なんでう物などのつくべき、年頃不動尊をかきつるが、火焔のさま、意にかなはず、なやみ居りしに、今見れどかうこそ燃えけれと心得つるなり、是こそ所得よ、此の道を立てゝ世にあらんには、佛だに書かで、百千の家も出で來なん。和君たちこそさせる能もれは

さね、物をも惜み給へとあざ笑ひけれど、人々大に恥ぢ、且つ感じけるとなり。かやうに心を道にこめたればにや、良秀がものせしよぢり不動は、今に世に傳はりて人々めで秘めけるとなり。

一休のはなし

草の屋主人

之もまた一休和尚十二三の頃なり、師の坊につかへて物よみ、手習ひなどしておはせしに、折りふし夜寒むにてする墨も氷り、習ふ筆の落つるも知らぬばかりなるに、少しあたゝまらんとて、鹽鮭をぞあつものにして、ひとり舌をならし、一休へは豆腐やうのものまゐらせけるに、一休これを見て、凡そ出家はなまぐさきものを喰はざるよし承り候か、聖は鹽鮭をまゐり給ふよ、苦しからずぞ、我等も食べんと云ふに、師の坊をかしくわれは年老つれど喰ふなり。汝かやうなる小僧の身としてなまぐさきもの食すれど、罰あたるなりと仰せられければ、一休は中々服せず、眉をひそめ、こはをかしきことを承はるものかな、同じ人間小僧にのみ罰あたり申さんや、老僧こそなかなかに、ばちあたり候はんとてあざ笑はるゝに、こは大人ぶりたることを云ふ小僧よ。されどなり、老僧とておゆるしはあらねど、引導をして食ふなりとの給へど、その引導とは如何なることにか、ちと承りたしと申さるれど、此の小僧何處まで小しやくなるぞ、いで引導して聞さんとて、一盃もりたるからざけのあつものを捧げ箸をれつとりのべての給はく、

汝元來枯木の如し、助けんとすれども生きて再び水中に遊ぶ事能はず、愚僧に服せられて佛果を得よ、喝。

との給ひ、小僧今はまた重ぬる言葉もなかるべし。してやりたりとおぼしながら鹽さけひたまゐりけり。一休はなほ感服せざるげにて、ひそめたる眉なほ開かず、

又物も云はずありけるが、夜の明くるをまちかてに、急ぎ魚屋へ走りゆき、大なる鯉を一献買ひとり來りて、味噌汁を作り、鯉をひん握り菜刀をおつとり、細くびちうにうちおとさんとせられける所へ、師の坊立ち出で、此のさまを御覽じて、大におどろき、是は沙汰の限りなり、小僧の身として鹽鮭まゐるだも無用と昨夜も示し教へしにはあらずや。しかるにさやうに生あるものを害して食はんとす。何たる事ぞやと師の坊いたくこらしたれど、一休は平然少しもさわがず、我等も引導おはしますとてさあらぬ体なるに、師の坊もあきれはて、それは如何なる引導ぞや。もししからば許し申すべし。こはきめ見せんものとて、御家の一棒を小脇にかひこみ、引導如何にと攻めたてけるを、一休はなほ泰然、いで引導つかまつるべしとて、鯉の細首ひん握り、右に菜刀をしやにかまへて、

汝元來なま木のごとし、助けんとすれどにげんとす、生きて水中に遊ばんよりは、しかじか愚僧が糞となれ、喝。

とて遂に生鯉が細くびちうとうちおとし、ぐつぐつとかひ煮て、またゝかに食ひ、空うそぶきぬるに、師の坊いたく感じ、かゝへこみし棒をもからりとなげすて、さてもよき引導ぶり、手がはりなる心得、我が昨夜の引導にては中々に鹽さけ佛果を得ずして、くそとなり、汝が鯉はくそとはならで佛果を得べし、さてもさても活機ある人や、三年になる鼠を今年生ひの猫がとるとは、かゝることよ、とかく汝はたゞものにはあらじとて、つくづくと感嘆されけるとなり。

笠子笑談集

金津常十郎

むけ物の長

むじなと狸と木の下に集りて云ひけるは、此の世の中で第一妖物の名人は何であらうといへど、むじながいふ、

されど、我らもよくばけると思へども、狐殿にはとてもおよばぬなり。まづ狐どのこそ妖物の第一ならめと云、側にねて居る狐が寢耳に入て目をさまし、いや〳〵貴樣がたわれを第一といはるれども、まだ〳〵我も及ばぬ上手あり。隨分我らもばけ勝たうと思ひてはたらけども、折節は油鼠で一ぱいだまさるゝなり。誠に人といふばけ物にはとてもかなはぬ、われらまづ人におふと、われはじめ眉毛に唾をつけて用心するといへば、狸が云、なるほど是は尤じや、思ひて見れば人といふ奴は奇妙不思儀をやるものじや、夜になると石と金でかちかちいはせてちよいと火を取出し、或は地に穴あけて水を出したり、こんな術はとても及ばぬ、それじやから妖物の長は人にきはまりたり。

註に曰、萬物一つも妖物にあらざる物なし、皆一氣より化せられて妖て居るなり、其内人は知巧のまさりて妖たる物ゆゑ、自から萬物の長などと得手に引かけたる名目を付て、外の物を押へ制するなり。外禽獸の類は知巧人に及ばぬゆゑ、皆々人を恐れて屈み居るなり、誠に人は自由自在に衣食住をなすゆゑ、定て彼らから見たなら、さぞ妙不思儀に思ふなるべし。人同士にては、互にすることとなすこと同きゆゑ、敢て奇妙とも不思儀とも思はず、只狐や狸のすることは人々怪めども、狐同士では何の不思義とも思はぬ筈なり。それゆゑ、常になすことはいかなる不思儀なことでも人々怪しとも思はぬものなり。人は萬物の長として妖物の頭分に居ながら狐狸の類に惑はさるゝ人々は、實に淺間しきことならずや、隨分氣をたしかに持たがよい。

梅の下風

白魚女史

これは專、村中のものを一同あつめおきて、其中に金子取りに來りたる盜人の其中にあるやを伺ふなり。し

たらく彼方此方を見まはしたれどおぼしき人もあらぬにや、傳吉に向ひ、かくて村中皆にやと問へどたゞ庄屋の息子のをらぬのみ。と、密かに答ふる中に、座敷はがや〳〵傳吉どのは如何せし、あまりにお産の長きにはあらずや、又よき人の江戸より追ひかけ來り、越後の風のいやになりて駈けおちしにはあらずや、さきに忍ぶ姿の女を見たりなど云ひつゝ、さては立つて此方へ來らんとするものさへあるに、傳吉は折りわろしとて、そつと其場を立ちぬ。

火の用心さつされませ、二階を見まはりませうとれば、ゐたる吉原そゝりを歌ひながら、何なきさまに、座に戻れどあのやうの江戸子なもの、花魁の追ひかくも無理ならずとたはぶれさわぐほどに、庄屋上臺馮司の息子昌次郎、何用かにおくれて今しも來り、ずつと上座に着き慇懃なる挨拶を、おうへいなる辭儀に答ふるも憎くし、傳吉は盃をさしつ、おさへつ、人々をもてなす際をはかりて、そつと以前の所へ立ち出れど、まち設けたるお專は見るより、傳吉に向ひ、只今あとより入り來り、上より八番めに座りたる若き年にて、色白く鼻高く、太織の紋付羽織いかめしう着し、棧留の着物着たる人こそ彌太八と云ひて、お身が旅荷を取りに來りし人なれと云ふに、傳吉はうち驚き何を云ひ給ふ、われは庄屋の息子殿にて、我には、ゆかりある人、人違ひにも程こそあれと思はず高まる聲を我と押ふるに、お專は固くとりて、何をか人を違へ申すべき、彼の人に相違なし、假令庄屋にもあれ、御親類にもせよ、金錢は上下の分ちなく、親子も金故にはたがひ侍り、必ず彼の人なりと赤心こめ云ふ言葉に、傳吉はやゝ信じぬれど、なほうたがひとけずたゆたふを猶豫してとり逃し給ふな、妾にたしかなる證據も侍れど、はやく人を正し給へときつとそゝのかされ必ず彼の人にや、若し信ならむ上に立つべき人誡めずはあるべからず、粗忽はあやらずや、幾度か問ひ、幾度かそゝのかされ、やがてもとの座敷になほれど、人はさうとも知ら

ず、とかく、傳吉殿の尻のすわらぬことよ、必ず花魁の忍び居るには相違なしとのざれ言、傳吉は笑ひ納め、やがてきつと形をあらため、げに五六年の江戸稼ぎに百五六兩の金圓をためこせしよしを語り、留守中の世話のほどをあらたまりて人々に禮し、さて其金圓、野尻宿なる知人の家に預けおきしに、今朝隣りの彌太八と申すよし云ひて、はやく其金圓を奪はれぬときくより人々おどろき、一同傳吉が顔をうち守り、何と云ひ出つる人もあらざりしが、傳吉は重ねて彌太八と申すは、彼處にとて、遙かに上座なる昌次郎にそれと目をくれど、一同また驚き、何れも昌次郎を見る折りしも、おせん其場へ入り來り、妾は野尻宿なる旅宿屋の下婢なるが、傳吉に荷物を托されしこと、今朝はやく人の取りに來りたること、與へたる事、おちもなく語れど、一同醉もさめて、いよいよおどろくを、昌次郎はいたく怒り、我れ盗みせし事なしと爭ふを馮司も共に怒りて、我は盗みする子は持たず、昌次郎必ずわかり立てよ、なすられし泥拭はでは、己れも聞かぬとかた肘張れど、昌次郎はいよいよ怒り立ち、そも汝等何を以て我をぬす人と呼ぶぞ、其方こそは盗人尼め、傳吉と申し合せ、我れになき名をとらせんとす、何の怨みありてなすことぞと云へど、わが子ひくなと馮司共にいらだつけんまくおそろしきを、盗人たけだけしとはよく云ひぬる事昌次郎とやらはやく白狀し給へ、もはや逃れえぬ天罰、証據を見せ申さんかとあるに、己れ憎き尼め、思ふに、傳吉江戸に行き、稼ぎて百五十兩貯へ持ち來りしとはまつかな僞りにて、そこのおせんとやら、お百とやら云ふおぶとき奴と忍びあひ、びた一文も持たで故郷へ歸へる面目なさに、二人語りあひ、わが子が若年をしほにして、からぬれ衣を着せるならん、盗人の男女めと嚙みつく如く罵り叱すれど、おせんはさわがず、論より証據彌太八とやらが歸り給ふ跡に、此の手紙のおちありしとて、懐中よりふみとり出し傳吉にわたすに、傳吉うけ取り開き見れど、



一筆示しまゐらせ候、傳吉留守の間は、誠におもしろう日來樂みあひ候處、今宵江戸よりたち歸へり候へば、此の上は夜々の契りも和ならずと、今より悲しく存じ候、つきては、傳吉江戸においてためたる金百五十兩持ち歸へり、途中盜人につけられ候ゆゑ、野尻宿の近江屋與三次と申す宿屋のおせんへ金子をあづけ、其かたとして櫛を持參致し、それだに持ちゆかば誰にても引き替へわたすとの事承り候まゝ、其櫛をお手許にさしあげまゐらせ候、明朝夜のわけぬほどに、彼處に參られ、其金子御うけ取なさらば、私事は近きほどに、わが家を忍び出で、御身と共に何處の浦、如何なる里にてもながく夫婦となりて暮らし申したく、どうぞ〱首尾よう御うけ取り被下度、何れ御目もじにて、萬々語りたのしむべく候、かしく

花より

戀しき昌次郎樣

と認めありけるに、一座おどろきあきれて、顏を見合すれば、昌次郎はまた逃れんすべなく、うつぶきたるまゝ言語もあらぬを馮司共に面目なき肘はり上げて、昌次郎がたぶさ摑みて引きつけ己れよく〱も親の面に泥をなすりしよと怒りの拳ふりあぐれば、お花の母も共に娘がたぶさを取りて、互みに表むきの擲着、不埒者めと叱りこらせば、こゝろは傳吉お專を憎くしと罵るは、人々の中にて、あか恥かゝせられぬとつらあてがましき言葉にあらはれたり。

昌次郎は今はつゝまれず、懷になほかくしたる金圓取り出せば、馮司は昌次郎を足に蹴飛して、之を傳吉にわたし、悴が不埒を重々わぶれば傳吉は今は氣の毒にえ堪へず、女房とらるゝも、金子取らるゝも、皆わがいくぢなきよりの故にて、我れもまた人にあはさん面もあらじとて、紙取り出し、三行り半の離緣狀したゝめ、只今限り緣を絕ちたれば、何も若きうちの事なり、親御の慈悲、お花と昌次郎殿とゑにし結ばせ給へ、

のう伯母御とて彼方を顧れど、伯母は憑司と顔見合せ、心にはとく合點しながら面はなは怒りよそはふを、傳吉どのがあのやうに開けて云はるゝを、名主どんも伯母御どんも堪忍して、思ふどちそはせ給へと、人々のとりもちに、二人もしぶ〳〵聞き入るれど、傳吉又伯母に向ひさらど、伯母御は行末長ら我が家へ居給ふか、さりとも、娘の方へ行き給ふかと云へど、娘もをらぬに、傳吉殿の世話にならんも氣の毒なれど、娘の方へ行かまほしとあるに傳吉さらど伯母御が養育料にとて、ためてし金圓の半ばをさき與へ、之にて事もすみたり、折角の興さまませし不覺さ、いで今一銚子あつくして、二人がかための盃もろともに汲みかはさんとて、酒肴又とり出すを、人々皆感じあひ、傳吉どんはれ江戸の水に洗はれたれど、心までさつぱりときれいどとはやし立つるあれど、伯母御も憑司どのと固めの盃汲みては如何にど、そつと云ひて目を見合すもありけり。



文林

秋旅行　　東久世通禧

うちまねく尾花の袖にたちまじり
秋のすゑ野をわくるたびかな

深夜月　　鍋島直大

秋の夜のふけゆくまゝに雲はれて
つきはます〳〵てり增りけり

孟母　　久我建通

擇びつゝやどり定めしはゝきゝは
のちの木かげの樂ねまちけん

嶺上月　　前田利鬯

山まつの梢はなると見るがうちに
みねよりたかくなれる月かな

秋露

きのふけふつゆに心のおくむかり
庭のあきはぎ咲きみちにけり　　諏訪忠元

移野花

野にあそぶたびにうつして百草の
はなぞのとこそ庭をなしつれ　　宮地厳夫

霧中野花

秋ぎりはたちかくせども八千種の
はなのにほひは隠れざりけり　　北郷久政

旅宿月

世のうさを忘れし旅のひとりねに
ものおもはする月のかげかな　　手塚光榮

初雁

この朝けにはかに寒しやまかせを
翼にかけてかりはきつらん　　植松有經

剣

村ぎもの心むかりはきたひてん
よしやつるぎは身におびずとも　　千葉胤明

蘆洲月

葦のはのそよぐよ風も身にしみて
洲崎のつき夜かげふけにけり　　遠山英一

秋ふかし

おく露の玉にまじりてはとむぎも
みのしろむまで秋は來にけり　　下田義天類

秋夜

月かげのおよはぬくまもすゝ虫の
しめてもらさぬ秋の夜半かな　　山川鶴一

月の歌あまたよみける中に

思ひやるのやまのはてはつき人の
くにゝさへゆく我がこゝろ哉　　三輪義方

苅萱

八重葎しげれるのきのさびしさに
やどかるかやの風のおとかな　　光岡正彰

喜右衛門が妻　　佐々豊水

陸奥のれくゆかしくもみゆるかな
わらぐつとりしそこの心は

山家秋　赤松景福

もみぢ葉を見にくる人に誘はれて
やました庵を今日もいでつゝ

草花變　足立正枝

むしの音に秋を殘して我がにはの
ひとむら眞萩うつろひにけり

雨中虫　近衛貞子

雨ふれどかきねにしげき虫の音も
ひとつ二つになりにけるかな

舟中月　前田朗子

いつしかと夜は更ぬらん舟まどに
さしいる月のかげのさやけさ

曉露　柳原愛子

こほろぎの鳴く聲寒きあかつきの
草むらしろくつゆそむすへる

庭秋草　北島以登子

今年うゑし庭のすゝきの一もとに
つきもはじめてかゝりける哉

案山子　松平健子

暮ぬとてひとはかへりし山どたに
かゝしのみこそ獨たちけれ

菊をかざして　岩崎寧子

千世のいろうつりやするど山川の
みぎはの菊をかざしつるかな

雨後紅葉　南鄉柳子

我よりも先にやあめのふりすぎし
やまぢの紅葉ぬれしまゝなる

秋舟　佐藤艶子

のる人の有とも見えず山かはの
紅葉のかげにふねはあれども

月明かなる夜友きたり　坂田泰子

もろともに學びし窓にみしあきを

月にむかひてかたる夜半かな

山家雁　小川直子

雲にとぶ雁もうき世やいとふらん
やまさとさしてなき渡るなり

引板　土岐いく子

とみ草のみのりもみちて小山田に
引板の音たかき夕まぐれかな

折にふれて　内田遊歌子

いかにして今日をむ過ぎむ紛べき
友もとひこずかせもふきこず

海邊秋風　足立三尾子

漕ぎ出づる海士の小舟を吹く風は
秋のあはれを添ふるなりけり

佐々豐水

明治元年の役にしたがひゆきて陸奥原釜の戰に賊のために討死せし舊臣内村金衞が三十年祭によみて供ける旋頭歌

むらぎもの、心かなし、むかし偲べは、きもむかふ、心しをゝし、そのかみ思へむ
天つちの、かみのまもれる、大八洲國、かきみだす、しこのみたてと、なりし人はも

將行豐國祭時作歌並短歌　赤松景福

豐國の神はかしこし　我國を鎭めし神ぞ　唐國をきためし神ぞ。我國の朝廷忘れて　唐國に媚てつかへし足利の軍の君に　較ぶれむ痛く勝りて　其功今も殘れり。然あるをゆゝ敗も有か。山城のひむかし山に　其神のましゝ社は早くより人に毀たれ　然のみか阿彌陀か峯の　其神の御墓もあれて　祭ちふ事もあらねむ行て問ふ人もなかりき。こゝを以て今の御代には、朝廷より祭らせ賜ひ　世の人も仰奉りて　百年に三度なりぬる　御祭の年は今年と　いかめしく御墓つくらひうるはしく御垣もつくり　賑はしく御祭せむと　言

計はかるまにまに　速けく賛け成むと　皆いへど先そ樂しき。かく祭り然仕へては　國の爲我は願はく　今も亦唐の國國　攻て取り取りて治めむ　功しき人を生さね　國の御爲に

短歌

古に枯しひさでの久にへていよゝ貴き時にあへるかも

根岸喜久園

大宮に行きける人より來るべきやうたよりありけれどれそくつきけれどねゆかでよめる

秋のはじめに　なりぬれど
千草八千草　花さきて
今さかりなる　大宮に
ひと日の旅を　なしましぬ。
御供のうちを　かへしつゝ
厂の玉づさ　れこせしと
きくとはすれど　れとづれの
れそかりつるぞ　くちをしき。
みやびをたちが　わらはにも
とひこしかしの　言の葉は
いと嬉しやと　れもへども
夕ぐれ近く　なりにけり。
けふのまどゐは　もれぬれど
またいづくにか　ゆきまさむ
をりはかならず　もろともに
ことどのはなを　つみてまし。



寒家に忍びて在はせ、權に賓客として相待申さん、小姐怠慢を責め給はざれど、小生夫妻の幸なりと云ひけれど、石小姐は喜びて再三厚く稱謝たるに、賈昌は又家中の男女に吩附て、石小姐と稱ふべきよしを云ひ聞かせ、小姐は是より賈昌夫婦を賈公賈婆と呼びけり、原來賈昌的老婆は素性賢慧からぬ女なるが、初月香を看しときは、月香が生得淸秀乖巧なるを見て、自已には男女の子なきゆゑ、幸ひ螟蛉女兒とせんと心下に喜たるに、夫が賓客どして懇に款待べきよしを說くをき〻て、早や三分は煩さきことに思ひたれど、石知縣は丈夫の恩人なるに相違なけれど、詮方なく丈夫の言に從ひ勉强て奉承たれども、後來賈昌は外に出で〻商を爲し、好き絹好き紬を得るたびに先づ小姐に與へて衣服となさしめ、家に回りたる時は先づ石小姐の安否を問ふなど、優待一方ならざれど、老婆はこれを見るたびに漸々不平の心を起し、今迄愼みたる馬脚を露し、但賈昌の家に在るときは、朝餐夕餐にも規矩に違はぬやう丁寧にし、一と口の假意奉承をも言ひけれど、賈昌が家に在らざるときは、飯も時々にあてがはず、別に一種の光景を呈はしけり、加之、養娘を外に呼出し、雜差雜使に追廻はし、一刻も空間を與へず、又石小姐には每日時間を限定て若干の女工を爲さしめ、倘手遲脚慢るやうのことあるときは、雞を捉へ狗を罵るごとく口汚く言ひ罵り、口裏常に乾淨ならぬ有樣となりたり。正是、

人無二千日好一　花無二百日紅一

執心

蓬生屋女史

むかし繪佛師良秀とて、日來佛を畫きて世を渡るものありけるが、あるとき隣家より火出で、風おしおほひ來りて、やがて我が軒につかんとす。良秀は何も取り敢へず大路へ走り出で、さかまき燃るほのほをうちながめたり。家の内には人の書かする佛もおはすれど、衣



絹などさま〳〵の重寶たゞ家の内にあるを、繪佛師は更に心にもかけず、何一つをも持ち出でんともせで、向ひのつらにたゝずみながむるをあさましき事とて人々怪しみけれど、良秀はなほ騒がず、向ひに立ちて、吾が家の燒くるを眼もはなたでうちながめ、たゞ欣然として何事か得たるげに、折り〳〵はひとりうちうなづき、あはれ、日來はわろく書きぬ、さてもいたき所得しつるかなとて大によろこびぬるに、訪ひ來るものみなあきれ、家をも寶をも燒け失するをも見ながら、斯く立ち給ひて、何の所得かある、あさましきことかな、物のけのつき給へるにやなど、人々あきれ笑ふを、なんでう物などのつくべき、年頃不動尊をかきつるが、火焔のさま、意にかなはず、なやみ居りしに、今見れどからこそ燃ゑけれと心得つるなり、是こそ所得よ、此の道を立てゝ世にあらんには、佛だに書かで、和君たちこそさせる能もれは百千の家も出で來なん。

さね、物をも惜み給へとわざ笑ひけれど、人々大に耻ぢ、且つ感じけるとなり。かやうに心を道にこめたればにや、良秀がものせしよぢり不動は、今に世に傳はりて人々めで秘めけるとなり。

一休のはなし

草の屋主人

之もまた一休和尚十二三の頃なり、師の坊につかへて物よみ、手習ひなどしてればせしに、折りふし夜寒むにてする墨も氷り、習ふ筆の落つるも知らぬばかりなるに、少しわたヽまらんとて、鹽鮭をどわつものにして、ひとり舌をならし、一休へは豆腐やうのものまゐられけるに、一休これを見て、凡そ出家はなまぐさきものを喰はざるよし承り候か、聖は鹽鮭をまゐり給ふよ、苦しからずど、我等も食べんと云ふに、師の坊をかしくれれは年老つれど喰ふなり。汝かやうなる小僧の身としてなまぐさきもの食すれど、罰あたるなりと仰せられけれど、一休は中々服せず、眉をひそめ、こはをかしきことを承はるものかな、同じ人間小僧にのみ罰あたり申さんや、老僧こそなかヽに、むちあたり候はんとてわざ笑らはるヽに、こは大人ぶりたることを云ふ小僧よ。されどなり、老僧とてわゆるしはあらねど、引導をして食ふなりとの給へど、その引導とは如何なることにか、ちと承りたしと申されど、此の小僧何處まで小しやくなるぞ、いで引導して聞さんとて、一盃もりたるからざけのわつものを捧げ箸をれつとりのべての給はく、

汝元來枯木の如し、助けんとすれども生きて再び水中に遊ぶ事能はず、愚僧に服せられて佛果を得よ、喝。

との給ひ、小僧今はまた重ぬる言葉もなかるべし。してやりたりとればしながら鹽さけひたまゐりけり。一休はなほ感服せざるげにて、ひそめたる眉なほ開かず、

又物も云はずありけるが、夜の明くるをまちがてに、急ぎ魚屋へ走りゆき、大なる鯉を一献買ひとり來りて、味噌汁を作り、鯉をひん握り菜刀をおつとり、細くびちうにうちおとさんとせられける所へ、師の坊立ち出で、此のさまを御覽じて、大におどろき、是は沙汰の限りなり、小僧の身として鹽鮭まゐるだも無用と昨夜も示し敎へしにはあらずや。しかるにさやうに生あるものを害して食はんとす。何たる事ぞやと師の坊いたくてらしたれど、一休は平然少しもさわがず、我等も引導おはしますとてさわらぬ体なるに、師の坊もあきれはて、それは如何なる引導ぞや。もししからむ許し申すべし。こはきめ見せんものとて、御家の一棒を小脇にかひこみ、引導如何にと攻めたてけるを、一休はなは泰然、いで引導つかまつるべしとて、鯉の細首ひん握り、右に菜刀をしやにかまへて、

汝元來なま木のごとし、助けんとすれどにげんとす、生きて水中に遊ばんよりは、しか〳〵愚僧が糞となれ、喝。

とて遂に生鯉が細くびちうとうちおとし、ぐつ〳〵とかひ煮て、したゝかに食ひ、空うそぶきぬるに、師の坊いたく感じ、かゝへこみし棒をもからりとなげすて、さてもよき引導ぶり、手かはりなる心得、我が昨夜の引導にては中々に鹽さけ佛果を得ずして、くそとなり、汝が鯉はくそとはならで佛果を得べし、さても〳〵活機ある人や、三年になる鼠を今年生ひの猫がとるとは、かゝることよ、とかく汝はたゞものにはあらじとて、つく〴〵と感嘆されけるとなり。

笠子笑談集

金津常十郎

ばけ物の長

むじなと狸と木の下に集りて云けるは、此の世の中で第一妖物の名人は何であらうといへど、むじながいふ、

されど、我らもよくばけると思へども、狐殿にはとてもれよばぬなり。まづ狐どのこそ妖物の第一ならめと云、側にねて居る狐が寢耳に入て目をさまし、いや〳〵貴樣がたわれを第一といはるれども、まだ〳〵我も及ばぬ上手あり。隨分我らもばけ勝たうと思ひてはたらけども、折節は油鼠で一ぱいだまさるゝなり。誠に人といふばけ物にはとてもかなはぬ、われらまづ人にあふと、われはじめ眉毛に唾をつけて用心するといへば、狸が云、なるほど是は尤じや、思ひて見れば人といふ奴は奇妙不思議をやるものじや、夜になると石と金でかちかちいはせてちよいと火を取出し、或は地に穴あけて水を出したり、こんな術はとても及ばぬ、それじやから妖物の長は人にきはまりたり。

註に曰、萬物一つも妖物にあらざる物なし、皆一氣より化せられて妖て居るなり、其内人は知巧のまさりて妖たる物ゆゑ、自から萬物の長などと得手に引かけたる名目を付て、外の物を押へ制するなり。外禽獸の類は知巧人に及ばぬゆゑ、皆々人を恐れて屈み居るなり、誠に人は自由自在に衣食住をなすゆゑ、定て彼らから見たなら、さぞ妙不思議に思ふなるべし。人同士にては、互にすることとなすこと同じゆゑ、敢て奇妙とも不思議とも思はず、只狐や狸のすることは人々怪めども、狐同士では何の不思議とも思はぬ筈なり。それゆゑ、常になすことはいかなる不思議なことでも人々怪しとも思はぬものなり。人は萬物の長として妖物の頭分に居ながら狐狸の類に惑はさるゝ人々は、實に淺間しきことならずや、隨分氣をたしかに持たがよい。

梅の下風

白魚女史

これはれ專、村中のものを一同あつめおきて、其中に金子取りに來りたる盜人の其中にあるやを伺ふなり。し

たらく彼方此方を見まはしたれどればしき人もあらぬにや、傳吉に向ひ、かくて村中皆にやと問へどたゞ庄屋の息子のをらぬのみ。と、密かに答ふる中に、座敷はがや〱傳吉どのは如何せし、あまりにれ產の長きにはあらずや、又よき人の江戸より追ひかけ來り、越後の風のいやになりて駈けおちしにはあらずや、さきに忍ぶ姿の女を見たりなど云ひつゝ、さては立つて此方へ來らんとするものさへあるに、傳吉は折りわろしとて、そつと其場を立ちぬ。

火の用心さつされませ、二階を見まはりませうとればねたる吉原そゝりを歌ひながら、何なきさまに、座に戻れどあのやうの江戸子なもの、花魁の追ひかくも無理ならずとたはぶれさわぐほどに、庄屋上臺馮司の息子昌次郎、何用かにれくれて今しも來り、ずつと上座に着き慇懃なる挨拶を、れうへいなる辭儀に答ふるも憎くし、傳吉は盃をさしつ、れさへつ、人々をもてなす隙をはかりて、そつと以前の所へ立ち出れど、まち設けたるれ專は見るより、傳吉に向ひ、只今あとより入り來り、上より八番めに座りたる若き年にて、色白く鼻高く、太織の紋付羽織いかめしう着し、棧留の着物着たる人こそ彌太八と云ひて、れん身が旅荷を取りに來りし人なれと云ふに、傳吉はうち驚き何を云ひ給ふ、あれは庄屋の息子殿にて、我には、ゆかりある人、人違ひにも程こそあれと思はず高まる聲を我と押ふるに、れ專は固くとりて、何をか人を違へ申すべき、彼の人に相違なし、假令庄屋にもあれ、御親類にもせよ、金錢は上下の分ちなく、親子も金故にはたがひ侍り、必ず彼の人なりと赤心こめ云ふ言葉に、傳吉はやゝ信じぬれど、なほうたがひとけずたゆたふを猶豫してどり逃し給ふな、妾にたしかなる證據も侍れど、はやく人を正し給へときつとそゝのかされ必ず彼の人にや、若し信ならど上に立つべき人誡めずはあるべからず、粗忽はあやらずや、幾度か問ひ、幾度かそゝのかされ、やがてもとの座敷になはれど、人はさうとも知ら

ず、とかく、傳吉殿の尻のすわらぬことよ、必ず花魁の忍び居るには相違なしとのざれ言、傳吉は笑ひ納め、やがてきつと形をあらため、げに五六年の江戸稼ぎに百五六兩の金圓をためこせしよしを語り、留守中の世話のほどをあらたまりて人々に禮し、さて其金圓、野尻宿なる知人の家に預けおきしに、今朝隣りの彌太八と申すよし云ひて、はやく其金圓を奪はれぬときくより人々おどろき、一同傳吉が顏をうち守り、何と云ひ出づる人もあらざりしが、傳吉は重ねて彌太八と申すは、彼處にとて、遙かに上座なる昌次郎にそれと目をくばれど、一同また驚き、何れも昌次郎を見る折りしも、お專其場へ入り來り、妾は野尻宿なる旅宿屋の下婢なるが、傳吉に荷物を托されしこと、今朝はやく人の取りに來りたること、與へたる事、おちもなく語れど、一同醉もさめて、いよいよおどろくを、昌次郎はいたく怒り、我れ盜みせし事なしと爭ふを馮司も共に怒りて、我は盜みする子は持たず、昌次郎必ずわかり立てよ、なすられし泥拭はでは、己れも聞かぬとかた肘張れど、昌次郎はいよいよ怒り立ち、そも汝等何を以て我をぬす人と呼ぶぞ、其方こそは盜人尼め、傳吉と申し合せ、我れになき名をとらせんとす、何の怨みありてなすことぞと云へど、わが子ひくなと馮司共にいらだつけんまくおそしきを、盜人たけだけしとはよく云ひぬる事昌次郎とやらはやく白狀し給へ、もはや逃れぬ天罰、証據を見せ申さんかとあるに、己れ憎き尼め、思ふに、傳吉江戸に行き、稼ぎて百五十兩貯へ持ち來りしとはまつかな僞りにて、そこのおせんとやら、お百とやら云ふずぶとき奴と忍びあひ、びた一文も持たで故郷へ歸へる面目なさに、二人語りあひ、わが子が若年をしほにして、かうぬれ衣を着せるならん、盜人の男女めと噛みつく如く罵り叱すれど、おせんはさわがず、論より証據彌太八とやらが歸り給ふ跡に、此の手紙のおちありしとて、懷中よりふみとり出し傳吉にわたすに、傳吉うけ取り開き見れば、



一筆示しまゐらせ候、傳吉留守の間は、誠におもしろう日來樂みあひ候處、今宵江戸よりたち歸へり候へど、此の上は夜々の契りも和ならずと、今より悲しく存じ候、つきては、傳吉江戸においてためたる金百五十兩持ち歸へり、途中盜人につけられ候ゆゑ、野尻宿の近江屋與三次と申す宿屋のおせんへ金子をあづけ、其かたとして櫛を持參致し、それだに持ちゆかど誰にても引き替へわたすとの事承り候まゝ、其櫛をお手許にさしあげまゐらせ候、明朝夜のあけぬほどに、彼處に參られ、其金子御うけ取なさらど、私事は近きほどに、わが家を忍び出で、御身と共に何處の浦、如何なる里にてもながく夫婦となりて暮らし申したく、どうぞ〳〵首尾よう御うけ取り被下度、何れ御目もじにて、萬々語りたのしむべく候、かしく

戀しき昌次郎樣　花より

と認めありけるに、一座おどろきあきれて、顔を見合すれど、昌次郎はまた逃れんすべなく、うつぶきたるまゝ言語もあらぬを馮司共に面目なき肘はり上げて、昌次郎がたぶさ摑みて引きつけ己れよく〳〵も親の面に泥をなすりしよと怒りの拳ふりあぐれど、お花の母も共に娘がたぶさを取りて、互みに表むきの擲着、不埒者めと叱りこらせど、こゝろは傳吉お專を憎くしと罵るは、人々の中にて、あか耻かゝせられぬとつらあてがましき言葉にあらはれたり。昌次郎は今はつゝまれず、懐になほかくしたる金圓取り出せど、馮司は昌次郎を足に蹴飛して、之を傳吉にわたし、悴が不埒を重々わぶれど傳吉は今は氣の毒にゐ堪へず、女房とらるゝも、金子取らるゝも、皆わがいくぢなきよりの故にて、我れもまた人にあはさん面もあらじとて、紙取り出し、三行り半の離緣狀したゝめ、只今限り緣を絶ちたれど、何も若きうちの事なり、親御の慈悲、お花と昌次郎殿とゐにし結ばせ給へ、

のう伯母御とて彼方を顧れど、伯母は憑司と顔見合せ、心にはとく合點しながら面はなは怒りよそほふを、傳吉どのがあのやうに開けて云はるゝを、名主どんも伯母御どんも堪忍して、思ふどちそはせ給へと、人々のとりもちに、二人もしぶ〳〵聞き入るれど、傳吉又伯母に向ひさらば、伯母御は行末長う我が家へ居給ふか、さりとも、娘の方へ行き給ふかと云へど、娘もをらぬに、傳吉殿の世話にならんも氣の毒なれど、娘の方へ行かまほしとあるに傳吉さらば伯母御が養育料にとて、ためてし金圓の半ばをさき與へ、之にて事もすみたり、折角の興さまさせし不覺さ、いで今一銚子あつくして、二人がかための盃もろともに汲みかはさんとて、酒肴又とり出すを、人々皆感じあひ、傳吉どんはれ江戸の水に洗はれたれど、心までさつぱりときれいぞとはやし立つるあれど、伯母御も憑司どのと固めの盃汲みては如何にと、そつと云ひて目を見合すもありけり。



文林

秋旅行　　東久世通禧

うちまねく尾花の袖にたちまじり
秋のすゑ野をわくるたびかな

深夜月　　鍋島直大

秋の夜のふけゆくまゝに雲はれて
つきはます〳〵てり增りけり

孟母　　久我建通

擇びつゝやどり定めしはゝきゝは
のちの木かげの榮えまちけん

嶺上月　　前田利鬯

山まつの梢はなると見るがうちに
みねよりたかくなれる月かな

秋懷　諏訪忠元

きのふけふつゆに心のれくせかり
庭のおきはぎ咲きみちにけり

移野花　宮地嚴夫

野にあそぶたびにうつして百草の
はなぞのとこそ庭をなしつれ

霧中野花　北郷久政

秋きりはたちかくせとも八千種の
はなのにはひは隱れざりけり

旅宿月　手塚光榮

世のうさを忘れし旅のひとりねに
ものれもはする月のかげかな

初雁　植松有經

この朝けにはかに寒しやまかせを
翼にかけてかりはきつらん

劍　千葉胤明

村きもの心をかりはきたひてん

よしやつるぎは身にれびす共

蘆洲月　遠山英一

蘆のはのそよぐよ風も身にしみて
洲崎のつき夜かげふけにけり

秋ふかし　下田義天類

れく露の玉にまじりてはとむぎも
みのしろむまで秋は來にけり

秋夜　山川鵜一

月かげのれよはぬくまもすゞ虫の
しめてもらさぬ秋の夜半かな

月の歌あまたよみける中に　三輪義方

思ひやるのやまのはてはつき人の
くにゝさへゆく我がこゝろ哉

苅萱　光岡正彰

八重葎しげれるのきのさびしさに
やどかるかやの風のれとかな

喜右衛門が妻　佐々豊水

陸奥のれくゆかしくもみゆるかな
　　わらぐつとりしそこの心は

山家秋　　赤松景福

もみぢ葉を見にくる人に誘はれて
　　やました庵を今日もいでつゝ

草花變　　足立正枝

むしの音に秋を殘して我がにはの
　　ひとむら眞萩うつろひにけり

雨中虫　　近衛貞子

雨ふれどかきねにしげき虫の音も
　　ひとつ二つになりにけるかな

舟中月　　前田朗子

いつしかと夜は更ぬらん舟まどに
　　さしいる月のかげのさやけさ

曉露　　柳原愛子

こほろぎの鳴く聲寒きあかつきの
　　草むらしろくつゆぞむすべる

庭秋草　　北島以登子

今年うゑし庭のすゝきの一もとに
　　つきもはじめてかゝりける哉

案山子　　松平健子

暮ぬとてひとはかへりし山どたに
　　かゝしのみこそ獨たちけれ

菊をかざして　　岩崎寧子

千世のいろうつりやすると山川の
　　みぎはの菊をかざしつるかな

雨後紅葉　　南郷柳子

我よりも先にやあめのふりすぎし
　　やまぢの紅葉ぬれしまゝなる

秋舟　　佐藤艶子

のる人の有とも見えず山かはの
　　紅葉のかげにふねはあれども

月明かなる夜友きたり　　坂田泰子

もろともに學びし窓にみしあきを

月にむかひてかたる夜半かな

山家雁　小川直子

雲にとぶ雁もうき世やいとふらん
やまさとさしてなき渡るなり

引板　土岐いく子

とみ草のみのりもみちて小山田に
引板の音たかき夕まぐれかな

折にふれて　内田遊歌子

いかにして今日をぞ過ぎむ紛べき
友もとひこずかぜもふきこず

海邊秋風　足立三尾子

漕ぎ出づる海士の小舟を吹く風は
秋のあはれを添ふるなりけり

佐々豊水

明治元年の役にしたがひゆきて陸奥原釜の戰に賊のために討死せし舊臣内村金衛が三十年祭によみて供ける旋頭歌

むらぎもの、心しかなし、むかし偲べは、さもむかふ、
心しをゝし、そのかみ思へぞ
天つちの、かみのまもれる、大八洲國、かきみだす、し
このみたてと、なりし人はも

將行豐國祭時作歌並短歌　赤松景福

豐國の神はかしこし　我國を鎮めし神ぞ　唐國をきためし神ぞ。我國の朝廷忘れて　唐國に媚てつかへし足利の軍の君に　較ぶれぞ痛く勝りて　其功今も殘れり。然あるをゆゝ敗も有か。山城のひむかし山に　其神のまし﹅社は早くより人に毀たれ　然のみか阿彌陀か峯の　其神の御墓もあれて　祭ちふ事もあらねぞ行て問ふ人もなかりき。こゝを以て今の御代には、朝廷より祭らせ賜ひ　世の人も仰奉りて　百年に三度なりぬる　御祭の年は今年と　いかめしく御墓つくらひうるはしく御垣もつくり　賑はしく御祭せむと　言

計はかるまにまに　速けく贊け成むと　皆いへど先そ
樂しき。かく祭り然仕へては　國の爲我は願はく　今
も亦唐の國國　攻て取り取りて治めむ　功しき人を生
さね　國の御爲に

短歌

古に枯しひさでの久にへていよゝ貴き時にあへるかも

根岸喜久園

大宮に行きける人より來るべきやうたよりあり
けれどれそくつきければねゆかでよめる

秋のはじめに　なりぬれど　千草八千草　花さきて
今さかりなる　大宮に　ひと日の旅を　なしましぬ。
御供のうちを　かへしつゝ　厂の玉づさ　れこせしと
きくとはすれど　れとづれの　れそかりつるぞ　くちをしき。
みやびをたちが　わらはにも　とひこしかしの　言の葉は
いと嬉しやと　れもへども　夕ぐれ近く　なりにけり。
けふのまとゐは　もれぬれど　またいづくにか　ゆきまさむ
をりはかならず　もろともに　ことぞのはなを　つみてまし。





雜報

●大御惠　天皇、皇后兩陛下より、さいつころ、雨風の災害にかゝれる國々へ、左の金員を、めぐませ給へり。なほ、北海道へは、侍從片岡利和氏、又、山梨、長野、靜岡、栃木、の四縣へは、おなじく侍從日根野要吉氏を御使として遣はさせ給ひ、其の災害にかゝれるありかたちを見しめ給へりとぞ。

一金五千圓	北海道廳へ
一金千五百圓	山梨縣へ
一同上	長野縣へ
一金千二百圓	埼玉縣へ
一同上	茨城縣へ
一金千圓	愛知縣へ
一金八百圓	群馬縣へ
一金七百圓	新潟縣へ
一金二千三百圓	靜岡縣へ
一金一千二百圓	栃木縣へ

●御詠

夜ひかる玉も何せん身をてらす
　ふみこそ人の寶なりけれ

の御歌は、さきに　皇后陛下のよませ給へるなり。このたび、之を美しき紙にうつせるを、華族女學校、其の他の女學校の生徒一同へ、おの〳〵、之を賜はれりとぞ。大御心の深くわたらせられおはしますこと、仰ぎ奉れども、はてしもおはしまさず。女生徒たらんもの、よく、大御心をわが心とせよ。

●御兼題詠進歌　例のなり。九月五日のは、御題「叢路」にて、その歌ども。

なく虫の聲繁かりしくさむらは露ばかり也よのあけゆけば　正風
花もなきよもぎの庭のくさむらも露のたまこそ盛なりけれ　建通
朝日影にほびそめたるくさむらに玉しく如く露ぞおきける　直大
朝露にぬれぬ草葉もなかりけりうへこそ虫のなき明しつれ　豐頴
うちわたすのべの草むらおく露の日にそへ深くなれる秋哉　利嗣
果もなきのべの千草におく露を花さかぬまの花とこそみれ　承昭
秋の野の花さきみてるくさむらは露の色さへ千ぐさ也けり　詮
ひさしきりすゞしくすくろ村雨に露の玉ちる庭のくさむら　通禧
こぼれてはまたおきかはるつゆみえて月夜ふけゆく庭の叢　顯允
てにされはかつきえにけり叢におく白つゆの玉さみゆれど　長説

繁りあふ草葉のこらず玉なしてきよくもむすぶのべの白露　光昭
むしのれはあけゆくまゝにしづまりて露のみしげき庭の叢　利艶
なく虫の聲をさめつゝわけくればおくつゆふかきのべの叢　忠敬
ゆふべ／＼おく露ごさに月影も別れてやさる庭のくさむら　清
荒はてし庭のくさむらゆふべ／＼玉しきたりさみゆる露哉　美稻
玉数の庭さみるまでおきわたす露のひまなきあさちふの宿　通治
叢におく夕露のふかければわがそでさへにうちしめりつゝ　雅之
有明の月しづかなるくさむらに秋をふかめてむすぶつゆ哉　量弘
秋風に玉さみだる草くさむらのつゆの光の淸くもあるかな　隆元
くさむらにおける白露風ふけば玉さみだれて凉しかりけり　長言
朝風のたねまなるらんくさむらのくもの糸にも露の結べる　愛子
なく虫の聲をきかんとおりたてばおく露深し庭のくさむら　任子
荻におきすゝきにむすび秋の野の深き憐をつゆにみるかな　文子
ふみわくるすそも秋もぬれにけりのべの叢つゆふかくして　祥子
つさひつる螢はいつかきねはてゝおくつゆひかるにはの叢　貞子
きのふまで螢やさりし叢にはやくもむすぶあきのつゆかな　敦子
秋風に木々のしづくもおちぬらしあさつゆふかしにはの叢　道子
こほろぎのなくれ淋しきくさむらに露おきあまる庭の夕暮　兼子
終夜なきつるむしの聲たねてあさつゆふかし庭のくさむら　以登子
月影もすみわたりたるくさむらに光をそへてたけるつゆ哉　好子
村雨のふりしあさかさ思ふまでおくつゆ深し庭のあさちふ　鈺子
拂ふべき人なき庭のくさむらは露のやさりさなりにける哉　三枝
なきしきる虫の涙かくさむらの白くなるまでつゆの結べる　愛
なもしらぬ庭の　葉もおく露をもてなす秋はなかしかり危　眞賴
朝露の光をみればくさむらもいぶせきものと思はざりけり　嚴夫
村雨のなこりすゝしきくさむらのつゆふりごほす鈴蟲の聲　正臣
　は凉しかれどもむくらふの露の玉をはちらさすもかな　重嶽
いかばかりおく露ならん淺茅はふ虫の聲さへ濡てきこゆる　秋香
なつかりのあさより生し村草に凉しき秋のつゆぞむすべる　榮
月影はきねゆくにはのくさむらに露を殘してよは明にけり　有經
繁くのみなりゆくみれば叢のつゆこそ秋のもやさなりけれ　嚴雄
繁りあふのぢの叢わけゆけば袖もすそもつゆにぬれつゝ　有經
あき日さすなかの叢風ふけばみだれてつゆの玉ぞちりける　行久
秋の日に葉末はかれてみゆれどもふめばつゆありにはの叢　胤明
靜にもよはあけそめて叢におくしらつゆもこほれざりけり　英一
秋風のたちしさころか白露のおきみだれたる庭のくさむら　義濟
虫のれもしたにうもれてあさほらけおくつゆふかし庭の叢　久子

●華族女學校の生徒の風、近ごろは、やう／＼下ざまに、流るゝかたぶきありて、中には、かのあそび女が用ゐると聞くなる七枚重に緋鼻緒つけたる草履をうがち、或は、雨傘絞紺がすりの單衣うちきて、昇校するものあり。質素をむねとするは、よきことなれども、縞柄、いでだちなどの、下卑なるは、よろしからず。なほ聞くに、女生徒、互に、書状などとりかはすに、その文中、僕、君、甚しきは、ベランメー、ネイサン賴ムヨ、などの用語あるもあり、「素より戯れに、かりそめの書状なるべけれども、言語同斷の事なり。」と語らふ人あり。記者、いまだ、實、虚を知るによしなけれども、かたはらいたき聞ゑなりや。そも、華

族女學校といへど、かしこきわたりのことなる御惠をうけ、且、世の上流に立てる人の子女の入學する所、はた、之を敎育する所たり。されど、女流の鑑ともなるべきなるを、さりとは、うたてきわざならずや。ゆめ、敎官の人々よ。女生徒等よ、ねがはくは、心したまひてよ。

●義勇　さいつころ、風雨いたくあれて、その災にかゝれる、こゝかしこ、多かるが中にも北海道は、ことに甚しくて、この石狩十勝兩川の本流支流、一時にあふれて、家をたゞよはし、鐵道を壞り、田畑をうづめぬれど、人畜は或は、きずつき、或は死ぬるもの數も知らず、石狩川、本支兩流にそへる地は、災ことに甚しく、夕張郡、由仁、角田の村々、そが中心たり。こゝに、この角田村に住める土人が妻に、某といへるがあり。(土人アイヌの女をば、おしなべてメノコと呼ふといふ) 常に心いさましく、義俠の性なりけるが、すは、水よと聞きて、忽、一葉の獨木舟に乘りて、わきかへれる濁浪の中を、物ともせず、あちこちに乘りめぐりつゝ、溺れて、流れ來る人々を救へる其の數百二十餘名の多きに及べりとぞ。角田村由仁村の人、他にくらべて、溺死せし人數の少かりしは、全くこれが功なりといふ。交通絕えたれど、其の名は、知るによしなけれども、身は、渡守の妻なりと聞く。稀なる勇婦もありけるよ。

●あはれ童よ　な忘れぞ。今汝がいふなる其の言葉を。なはふらかしぞ。今汝が立てたる其の志を。かくてこそ師たるもの、常のありさまも見ゆれ。およそ師たるもの、我に誠なくば、如何でか、敎を全うせん。我が誠、子弟を感せしめて、始めて、敎は行はるべけれ。こゝに、越後の國、猿橋村に住める某が子に、布施留吉とて、今年十一歲になれるがあり。家貧しくして、學資はと〳〵給せず、日每に學校に昇るに、行厨の如きも、いと粗食なり。父母の之を憂ふる色あるを見て、慰めていへらく、「師常に敎へたまひしく、粗衣

飽食は恥とすべきに足らず、たゞ學業の進まざるをこそ、恥とはすべけれ」と。されど、飽食も、などかは、意とすべき」といへり。さて、學業に至りては、同級の生徒、これに及ぶものなしとぞ。誠にたのもしき童にこそ。

●友愛の情　掬すべし。陸前の國、栗原郡、鳥矢崎村に住める阿部正吉といへるは、小學校の生徒なるが、さきに、水害の爲に、山腹くづれおちて、母と兄弟姉妹とは、皆、おしつぶされて、身うせ、殘れるは、たゞ我と老いたる父とのみなり。そが上に、身にまとふべき衣だにもなければ、同級の生徒ども、あはれがりて一同金五圓をつのりて、師に託して、之をそが許におくれりとぞ。あはれ〳〵。

●臺灣教育談　こは、土人教育のものがたりなり。さて、これまで、國語傳習所といひしを、公學と改め、費用をば、地方費の負擔とせり。其の學年をば、六ケ年とし、就學年齡をば、八歲よりとさだめたり。おしなべて、學校を思ふ心、いと深くして、其の費金等の支出を　厭ふ色なし。學生の精神も、質實にして、就業の時に遲るゝ者なし、學業の進步もいと速なり。たとへば、入學の際、さま〳〵の質問をするに、初、「雲は如何なるものぞ」と問へば、「龍怒りて生じたるものなり」と答へ、或は、「雨は如何なるものぞ」と問へば、「天の汗なり」など答へしを、一年も過ぎて後、その水蒸氣によりて起るものたるを知れば、われと我を疑ふさまなりといふ。さて又、幼時、父母の膝下にありては、冒險談、おと伽話、或は、よろしき玩具等もなければ、智識開發の度、甚しく後れたり。然れども、一旦、種々の理をさとり得ては、其の心理、應用、本土の人に比すれば、いと確實なる赴あり。さはいへど、おと伽話は、必しもなきにあらず。いと〳〵苦心をつみて、あつめ得たるもの、九十二種あり。されども、これ皆、あるまじき空想のもの多く、たとへば、「大龍來て、この臺灣を一呑にせん」などいへる說多し。これも一部分

に行はるゝに過ぎず。と、さる人は語れり。記者いふ。このお伽話は、いまだ、委しくは、えききかねども、あながちに、皆ながら棄つべきにはあらじ。これによせて、深き心をふくめたるもなきにはあらざるべしかし。

●地球直立説　こは、この大地球をして、直立せしむべしといへるにて、佛國の地理學者ホーヘ氏が説なり。先生いと暇ありと見えて、年ごろ、さま〴〵の工夫を凝しけるが、このほど、やう〳〵、其の考案も熟せりとぞ。其の説に曰く、今この地球は、軌道上に、直角をなさずして、三十度の傾斜をなせるが故に、各地何れも、氣候風土みな、一定の變化をなせり。かくては、心ゆかぬわざなれど、この地軸を直角ならしめ、あらゆるものをして皆、根本より改革せしむべし。其の方法は、地球の赤道の部に、凡、一兆噸の十億倍の大重量をおかんに、地軸はために、自、直立すべし。しかせば、氣候風土もまた、おのづからにかはりて、動植物等も、一變し、世の中、全く豹變すべしといふにあり。ポルモルガゼット新聞、之を冷評して、もししからんには、北極地方なる白熊、海豹、氷山等は、赤道直下に、移るべく、なほ高緯度に住める人民は、低緯度に住める人民と戰を開くに至るべく、なほ、且、赤道部に、かゝる大重物を積むべき手段なしといへり。ホーヘ先生、屈せずして之と爭ひ、蒸氣の全力をつくさば、二百萬年がうちには、この大事業をも成就し得べしといへりとぞ。かくては、學者、既に、愚人に近しともいはん。えうもなき事をも、主張するもの哉。

●むだ六がやたら帖　前號にも、一つぬき出つ。今又、一つぬき出ぬ。この慶安のこと、はやくものにも見えて、珍しきものにはあらねど、むかしを見ぬ今のわかき女どもにはとて、まづ〳〵。

東京にて奉公人の口入をする者をけいあんと呼べる事の起りは寛文の頃木挽町に大和慶安といへる醫師ありその親しく交はれる浪人に伊達三郎兵衛長谷川助衛門

といへるありこの三人相謀りて世間の人の出入あるひは男女婚姻の媒酌などを肝煎り居り某諸侯の縁邊を取持ちて息女の方より金五六千兩お參いの筈し[illegible]定め三人竊かに言合てその內の金二千兩ばかりを掠め取りしに此事世上にあまねく聞ゑて寛永五年八月廿四日右の三人には追放の刑に處せられたり依りて其頃より人の出入の世話する者を慶安と言初めしなりと然れども桂庵と書くは舛訛へるにや。

●乳兒の脚氣症　このごろ流行すといふ。其の病狀、腦膜炎に似たるが故に、往々誤診して、ちひさきながき若芽を、二葉のほどに、枯れしむるもありと聞く。醫師たるもの、父母たるもの、ともに、深く注意すべきなり。さる人、嬰兒の病にかゝれるを、醫の大家に見せたるに、腦膜炎なりと診して、氷嚢を用ゐて、さま〴〵に治療を加へしかども、病勢次第に重り行けば、心もとながりて、更に、小兒科專門醫に診せけるに、こは、脚氣症なりとて、直に母乳をはなち、煉乳を用ゐしめて、治療を加へしかば、日ならずして、快復せりといふ。こは、母親のまづ、脚氣症にかゝれるが、其の乳汁より的然波及せしなりとぞ。およそ、母乳と嬰兒との關係は、いときびしくして、かの脚氣症などは、母のいまだ、何とも感ぜざるに、嬰兒は、はやく、變態をあらはし、まづ、聲音嗄れ、乳汁を吐出し、糞尿變色するなど、そのありさま、腦膜炎、實扶垤利等に似たり。されど、婦人科の醫師にしてて、往々誤診するもありとぞ。ともに〱、かへす〴〵も、心すべきなり。

●外人敎師　こは、我が敎師にして、外人を敎ふるにはあらで、外人をして、我が小學敎員たらしめ、或は、小學校を起すを得しむるをよしとすべしといふ說あり。よしあしは知らねど輕きことならねど、深く講究すべきことがらなるべし。

●奇童　もあるものの哉。遠州、榛原郡、菅山村に住める某が子、今年二歳なるが、毛髮いと黑々として、

聲は、牛の如く、体量七貫目ありといふ。父、之を愛育して、やがて、日本第一の勇士たれとて、國一と名づけつとぞ。行末いとたのもしくこそ。

●耳いたし　北海道、小樽、量徳高等小學校三年生、何のはつ(今年十七歲)又、日本赤十字社、富山支部看護婦養成所生徒、何のしげといへる二人は、女として、最、かたく守るべき操をはぶらかしつるのみか、罪をさへ犯して、罰せられしときく。かゝる友からは、わが顔のみか、學校、或か、社の面をもけがせりといふべし。おほかたのわかき女は、これを見て、いましめとせよ。この二人は、これより心をもちかへて、この恥をすゝぐばかりの人となれ。

●しみおとし　若ものなどの汗じみたるを、おとなく落さんには、まづ水入の「アンモニア」を、その汚れたる所に注ぎ、さて白ききれにて、拭へぞ、地合、艶色をも、そこなはずして、拔き去るを得べしとぞ。又、一法には、其の汗のかわかぬうちに、水に燒酎をすこし混じて、これに浸しおき、三四時間を經て後、振り出せぞ、あとをとゞめずといふ。されど、これは、化學染のものは効なしとぞ。試みてよ。

●假名遣のあやまり　は、おほかたには、多くあることなり。されども、これは、よく心得てあるべきはいふをまたず。かの「ベンケイ、ガ、ナー、ヤナタヲモッテ」とは、讀みざまのよからぬをいへる例にて、今これは、假名遣をあやまれる例なり。さいつころ、所々に水の災害ありし時、野州、足利町に住める某、わが妻の他國に行きてあるを呼びよせんとて、電報をもて、いひやりしに、その妻、返電して、「ミズテタユケヌ」といへり。夫、これを見て、「見捨てた。行けぬ」とは、心得ぬいひざま哉。とて、いたく怒れりしが、よくく讀みあぢはへぞ、こは、假名づかひをあやまれるにて、まことは、「水出タ行ケヌ」のこゝろなりけり。と心づきて、怒もとけたりきとぞ。

教の庭



十月五日兼題　雲間雁

天　東京府下北豊島郡巣鴨三丁目三番地　春野梅子

なつかしき聲ぞきゝて仰むけど
　雲間すきゆくかりのひとむら

地　横濱市日出町太田二千二百三番地　笹子茂子

雲かくりつきにゑのびてとぶ雁は
　誰かたまづさのつかひなる覧

人　甲府市八日町　坂田きみ子

しら雲のよそにのみなく聲ぞして
　そらたのめなる雁のたまづさ

秀逸（十五首）

ふる里をかへりみしつゝむら雨の　三河　永井さい子
　雲間のかりやなきわたるらん

見るが中にみね隠れする厂がねは　豊後　田代艶子
　くもの通ひ路ふみやまよひし

白くものたえま〳〵にかけ見えて　大坂　眞島ちづ子
　とほくなりゆく厂のこゑかな

月影はくもまもるれとかりかねは　東京　河田いし子
　いづこゆくらん聲のみぞする

むらくもにすがたはきえて初厂の　東京　木村きく子
　こゑさやけくも遠さかり行く

久方のくものあなたをなかむれは　出雲　山根久子
　ともよびたてゝかり渡る見ゆ

八重雲に羽根打さまは見えねとも　越前　山田璋子
　はるかにかりの聲ぞきこゆる

はれ渡る空よりもなほなか〳〵に　三河　石川南江子
　雲のたえまのかりぞゆかしき

なく聲は雲にさはらすきこゆれと　甲府　名取よゑ子
　たえ〳〵見ゆる厂のひとつら

薄墨にかすかくもゑかあまとふや　東京　横山柳子
　くもぢにむせぶ厂のひとつら

月影をまづくもまよりうれしくも　横濱　綿野りき子
　れもはきゝつゝ厂のはつこゑ

雨はれしゆふべの雲のたえまより　伊豫　野中あさ子
　みえてうれしきかりの一つら

かりがねの姿はくもにかくろひて　豊後　鵜濃喜代子
　こゑのみとほくなき渡りゆく

さやかにもなくねのこして久堅の　東京　屋摩高繁子

くも路にきゆる厂のひとつら

明らけき月もくもまになりはてゝ　千葉　佐久間八重子
　聲のみのこる厂のひとつら

(以下原稿到着順)

秋かせのそよくさやまをみわたせは　濱口貞子
　くものはたてにかりのもじかく。

雲まよりほのかにみねてあまつかり　石井[illegible]子
　こゑ志つかなるあきのゆふくれ

すみなれしさとはいつこか志ら浪に　鹿瀬島嘉子
　はれうちかはしわたるかりかね

雲まをはわたるかりかれこゝろあらは　江口華子
　わかふるさとのおとつれをせよ

たちたほふ雲のたね間にかけ見ねて　安孫子かづ子
　ひとつらわたるあきのかりかね

月のふれからろおすかさきこゆなり　佐々小琴子
　くものなみ路をわたるかりかれ

うき雲のなひくみそらのかりかれは　佐々有鄰子
　今朝み越路をこねてきつらん

つきくらきこよひを思ひあかせとや　竹内頼子
　くもまをわたるかりのこゑ〱

ふるさとやいつこなるらん雲間より　谷口なほ子
　なこりをしむかりのひとこゑ

つはさあらはゆきて道をもつけなまし　松枝鶴子
　くもまもれくるかりかれのこゑ

なきつるゝこゑはいつこかしら雲の　根岸豊子
　いくへわけくるかりのひとつら

雲間とふかりのすかたは見ねれとも　久米貞子
　それと志らるゝこゑかすかなり

すみそめのゆふくれ近きくもまより　山本靜江子
　ほのかにみねてかりなきわたる

はなれしと呼びつく聲はきこゆれと　山内かず子
　くもまにきねてみねぬかりかな

三日月のくもゐはるけくこゑもれぬ　竹村竹昱子
　はつかりかれやいまわたるらむ

しらくものいつこにやさを厂かれの　森やす子
　あかつきふかくなきわたるなり

かくれたる雲間のつきのかけをさへ　田代綾子
　かすめてゆくかかりのひとつら

あきかせや吹きおくるらん雲間より　安村歌子
　かすかにもるゝはつかりのこゑ

あまつかり雲井をわたるこゑすなり　澤田せい子
　つきのみやこにゆかんとやする

うきまよふ幾重のくもをわけつゝも　根岸豊子
　たゝしくわたるかりのひとつら

ひさかたの雲のうなはらわたるらし　失名
　こゑほにあけてかりそなくなる

月いつとみそらはるかになかむれは　西艶子
　くも間をわたるかりのひとつら

みねかくれ雲間をわたるかりかれの　橋口たき子
　たちゆくさきはいつこなるらむ

立ち渡るくも路にゆく手まとひしか　井川澄子
　こゑもあはれにかりそなくなる

仰き見れは雲のゆきかひたゞならぬ　深井けい子
　しくれのそらにかりそなくなる

月かけのもれくるたにもうれしきを　遠藤千代子
　かりもくもまをなきわたるかな

秋ふけしいなはのかせにさそはれて　丸木久樂子

　　くものたえ間をわたるかりがね　　佐藤よし子

あまのはら八重のむら雲たなびきて
　　見えかくれゆくかりをしぞ思ふ　　前澤しげ子

きけばまつかなしき物をいかにせん
　　くものたえ間のはつかりのこゑ　　前澤こう子

ふきはらふ風もなくくうきくもの
　　たえ間をわたるかりのひとつら　　前澤つれ子

おほそらに聲ぎこゆなりかりがねの
　　くも間がくれに鳴きわたるらん　　曾巨よし子

聲はかりきこえきにけりあまくもに
　　のりてやかりのなきわたるらん　　六鹿廣子

しばらくは雲にすがたをかくしつゝ
　　いくつらとなくわたるかりかな　　新浦美津子

月くらきゆふへなれどもかりがねの
　　あとをしりてやなきわたるなり　　白石由子

雲井とほしはつかりがねのこゑすなり
　　いまたたひなるこゝろなるらん　　川上喜代子

立ち出てゝくれゆく空をながむれば
　　くもまへだてゝかりぞなくなる　　川上博子

めづらしくけふ初かりのこゑすなり
　　くもまにいりてかげはみえねど　　曾根雪子

夕くれのあきかぜさむくおとづれて
　　くもゐはるかにわたるかりがね　　山本つる子

つきゝよきくもまをわたる初かりの
　　こゑもしくれてあきかぜぞふく　　深野たけ子

むらくもにかくれし月をまつほどに
　　なきてぞわたるかりのひとつら　　福原菫子

春のかりいにしくもぢにくらぶれば
　　かすみとてなしいまくるそらは

むらくもの中にもみちはかよふらん
　　まよふともなきかりのきこゆる　　小神野きむ子

うき人のいかにきくらんあきのよの
　　くもゐのおくになくかりの音を　　黒木信子

夕くれのくものはたてをはつかりの
　　見えつかくれつなきわたるなり　　辻本ひさ子

もの思ふ身にはいとこそかなしけれ
　　くもまわけゆくかりがねのこゑ　　高田ゆきへ子

ふる里のたよりまちつゝそらみれば
　　くもかきわけてかりはきにけり　　友永章子

むら雨のはるゝゆふべのくもまより
　　わたるかりがねいづちおつらん　　黒田明子

立ちまよふ雲のはたてをはつかりは
　　みえかくれつゝなきわたるなり　　山田介子

ながめやる雲ゐのそらにうすすみの
　　文字ともみえてかりなきわたる　　虎口賓子

やみのよの雲ぢやいかにまよふらん
　　なきつゝわたりあまつかりがね　　高島酉子

かたふきしつきのしたゆく八重雲を
　　わけてぞわたるあまつかりがね　　遠藤巨久子

夕あらしあめ吹きさそふくも間より
　　さびしくわたるはつかりのこゑ　　高砂きよ子

夕やけのほのめくそらに見つるかな
　　くも間をわたるかりのひとつれ　　高砂菊代子

すがたさへ見えねばいかに雲間行く
　　こゑなつかしきあまつかりがね　　塙いさむ子

小夜更けてこゑもあはれに久かたの
　　くもまをわたるあきのはつかり　　佐藤喜代子

鳴く聲は見えねどかりのくもまにて　　作田美志子

萩盛　諏訪忠元

きのふけふつゆに心のおくばかり
庭のあきはぎ咲きみちにけり

移野花　宮地嚴夫

野にあそぶたびにうつして百草の
はなぞのとこそ庭をなしつれ

霧中野花　北郷久政

秋ぎりはたちかくせども八千種の
はなのにほひは隠れざりけり

旅宿月　手塚光榮

世のうさを忘れし旅のひとりねに
ものおもはする月のかげかな

初雁　植松有經

この朝けにはかに寒しやまかぜを
翼にかけてかりはきつらん

剣　千葉胤明

村きもの心ばかりはきたひてん
よしやつるぎは身におびず共

蘆洲月　遠山英一

蘆のはのそよぐよ風も身にしみて
洲崎のつき夜かげふけにけり

秋ふかし　下田義天類

おく露の玉にまじりてはとむぎも
みのしろむまで秋は來にけり

秋夜　山川鵜一

月かげのおよばぬくまもすゞ虫の
しめてもらさぬ秋の夜半かな

月の歌あまたよみける中に　三輪義方

思ひやるのやまのはてはつき人の
くにゝさへゆく我がこゝろ哉

苅萱　光岡正彰

八重葎しげれるのきのさびしさに
やどかるかやの風のおとかな

喜右衛門が妻　佐々豊水

陸奥のれくゆかしくもみゆるかな
　わらぐつとりしそこの心は

山家秋　　赤松景福
もみぢ葉を見にくる人に誘はれて
　やました庵を今日もいでつゝ

草花變　　足立正枝
むしの音に秋を殘して我がにはの
　ひとむら眞萩うつろひにけり

雨中虫　　近衛貞子
雨ふれどかきねにしげき虫の音も
　ひとつ二つになりにけるかな

舟中月　　前田朗子
いつしかと夜は更ぬらん舟まどに
　さしいる月のかげのさやけさ

曉露　　柳原愛子
こほろぎの鳴く聲寒きあかつきの
　草むらしろくつゆぞむすべる

庭秋草　　北島以登子
今年うゑし庭のすゝきの一もとに
　つきもはじめてかゝりける哉

案山子　　松平健子
暮ぬとてひとはかへりし山たたに
　かゝしのみこそ獨たちけれ

菊をかざして　　岩崎寧子
千世のいろうつりやすると山川の
　みぎはの菊をかざしつるかな

雨後紅葉　　南郷柳子
我よりも先にやあめのふりすぎし
　やまぢの紅葉ぬれしまゝなる

秋舟　　佐藤艶子
のる人の有とも見えず山かはの
　紅葉のかげにふねはあれども

月明かなる夜友きたり　　坂田泰子
もろともに學びし窓にみしあきを

月にむかひてかたる夜半かな

山家雁　小川直子

雲にとぶ雁もうき世やいとふらん
やまさとさしてなき渡るなり

引板　土岐いく子

とみ草のみのりもみちて小山田に
引板の音たかき夕まぐれかな

折にふれて　内田遊歌子

いかにして今日をぞ過ぎむ紛べき
友もとひこずかぜもふきこず

海邊秋風　足立三尾子

漕ぎ出づる海士の小舟を吹く風は
秋のあはれを添ふるなりけり

佐々豐水

明治元年の役にしたがひゆきて陸奥原釜の戰に賊のために討死せし舊臣内村金衛が三十年祭によみて供ける旋頭歌

むらぎもの、心しかなし、むかし偲べば、きもむかふ、心しをゝし、そのかみ思へぞ
天つちの、かみのまもれる、大八洲國、かきみだす、しこのみたてと、なりし人はも

將行豐國祭時作歌並短歌　赤松景福

豐國の神はかしこし　我國を鎮めし神ぞ　唐國をきためし神ぞ。我國の朝廷忘れて　唐國に媚てつかへし足利の軍の君に　較ぶれぞ痛く勝りて　其功今も殘れり。然あるをゆゝ敗も有か。山城のひむかし山に　其神のましゝ社は早くより人に毀たれ　然のみか阿彌陀か峯の　其神の御墓もあれて　祭ちふ事もあらねぞ行て問ふ人もなかりき。こゝを以て今の御代には、朝廷より祭らせ賜ひ　世の人も仰奉りて　百年に三度なりぬる　御祭の年は今年と　いかめしく御墓つくらひうるはしく御垣もつくり　賑はしく御祭せむと　言

計はかるまにまに　速けく賛け成むと　皆いへど先ぞ
樂しき。かく祭り然仕へては　國の爲我は願はく　今
も亦唐の國國　攻て取り取りて治めむ　功しき人を生
さね　國の御爲に

短歌

古に枯しひさでの久にへていよゝ貴き時にあへるかも

根岸　喜久園

大宮に行きける人より來るべきやうたよりありけれどれそくつきけれどもゆかでよめる

秋のはじめに　なりぬれど
千草八千草　花さきて
今さかりなる　大宮に
ひと日の旅を　なしましぬ。
御供のうちを　かへしつゝ
厂の玉づさ　れこせしと
きくとはすれど　れとづれの
れそかりつるぞ　くちをしき。
みやびをたちが　わらはにも
とひこしかしの　言の葉は
いと嬉しやと　れもへども
夕ぐれ近く　なりにけり。
けふのまとゐは　もれぬれど
またいづくにか　ゆきまさむ
をりはかならず　もろともに
ことどのはなを　つみてまし。





雜報

●大御惠　天皇、皇后兩陛下より、さいつころ、雨風の災害にかゝれる國々へ、左の金員を、めぐませ給へり。なほ、北海道へは、侍從片岡利和氏　、又、山梨、長野、靜岡、栃木、の四縣へは、おなじく侍從日根野要吉氏を御使として遣はさせ給ひ、其の災害にかゝれるありかたちを見しめ給へりとぞ。

一金五千圓	北海道廳へ
一金千五百圓	山梨縣へ
一同上	長野縣へ
一金千二百圓	埼玉縣へ
一同上	茨城縣へ
一金千圓	愛知縣へ
一金八百圓	群馬縣へ
一金七百圓	新潟縣へ
一金二千三百圓	靜岡縣へ
一金一千二百圓	栃木縣へ

●御詠

夜ひかる玉も何せん身をてらす
　ふみこそ人の寶なりけれ

の御歌は、さきに　皇后陛下のよませ給へるなり。こたび、之を美しき紙にうつせるを、華族女學校、其の他の女學校の生徒一同へ、おの／＼、これを賜はれりとぞ。大御心の深くあつくおはしますこと、仰ぎ奉れども、はてしもおはしまさず。女生徒たらんもの、よく、大御心をわが心とせよ。

●御兼題詠進歌　例のなり。九月五日のは、御題「叢路」にて、その歌ども。

なく虫の聲繁かりしくさむらは露ばかり也よのあけゆけは　正風
花もなきよもぎの庭のくさむらも露のたまこそ盛なりけれ　建通
朝日影にほひそめたるくさむらに玉しく如く露ぞおきける　直大
朝露にぬれぬ草葉もなかりけりうへこそ虫のなき明しつれ　豊頴
うちわたすのべの草むらおく露の日にそへ深くなれる秋哉　利嗣
果もなきのべの千草におく露を花さかぬまの花とこそみれ　承昭
秋の野の花さきみてるくさむらは露の色さへ千ぐさ也けり　詮
ひさしきりすゝしくすくる村雨に露の玉ちる庭のくさむら　通禧
こぼれてはまたおきかはるつゆみゐて月夜ふけゆく庭の叢　顯允
てにさればかつきゐにけり叢におく白つゆの玉さみゆれど　長說

繁りあふ草葉のこらず玉なしてきよくもむすぶのべの白露　光昭

むしのねはあけゆくまゝにしづまりて露のみしげき庭の叢　利卿

なく虫の聲をとめつゝわけくればおくつゆふかきのべの叢　忠敬

ゆふべゝゝおく露ごとに月影も別れてやどる庭のくさむら　清

荒はてし庭のくさむらゆふべゝゝ玉しきたりとみゆる露哉　美稻

玉敷の庭とみるまでおきわたす露のひまなきあさちふの宿　通治

叢におく夕露のふかければわがそでさへにうちしめりつゝ　雅之

有明の月しづかなるくさむらに秋をふかめてむすぶつゆ哉　量弘

秋風に玉とみだる草くさむらのつゆの光の淸くもあるかな　隆元

くさむらにおける白露風ふけば玉とみだれて涼しかりけり　長言

朝風のたえまなるらんくさむらのくもの糸にも露の結べる　愛子

なく虫の聲をきかんとおりたてばおく露深し庭のくさむら　任子

荻におきすゝきにむすび秋の野の深き憐をつゆにみるかな　文子

ふみわくるすそも袂もぬれにけりのべの叢つゆふかくして　祥子

つとひつる螢はいつかきえはてゝおくつゆひかるにはの叢　貞子

きのふまで螢やどりし叢にはやくもむすぶあきのつゆかな　敦子

秋風に木々のしづくもおちぬらしあさつゆふかしにはの叢　道子

こほろぎのなくね淋しきくさむらに露おきあまる庭の夕暮　兼子

終夜なきつるむしの聲たえてあさつゆふかし庭のくさむら　以登子

月影もすみわたりたるくさむらに光をそへてたけるつゆ哉　好子

村雨のふりしあとかと思ふまでおくつゆ深し庭のあさちふ　鉦子

拂ふべき人なき庭のくさむらは露のやどりとなりにける哉　三枝

なきしきる虫の涙かくさむらの白くなるまでつゆの結べる　愛

なもしらぬ庭の　葉もおく露をもてなす秋はをかしかり鳬　眞賴

朝露の光をみればくさむらもいぶせきものと思はざりけり　嚴夫

村雨のなごりすゞしきくさむらのつゆふりこぼす鈴蟲の聲　正臣

は涼しかれともむくらふの露の玉をはちらさずもがな　重嶺

いかばかりおく露ならん淺茅はふ虫の聲さへ濕てきこゆる　秋香

なつかりのあとより生し村草に涼しき秋のつゆぞむすべる　榮

月影はきえゆくにはのくさむらに露を殘してよは明にけり　有經

繁くのみなりゆくみれば叢のつゆこそ秋のもやとなりけれ　嚴雄

繁りあふのちの叢わけゆけば袖もすそもつゆにぬれつゝ　有經

あき日さすなかの叢風ふけばみだれてつゆの玉ぞちりける　行久

秋の日に葉末はかれてみゆれどもふめばつゆありにはの叢　胤明

靜にもよはあけそめて叢におくしらつゆもこぼれざりけり　英一

秋風のたちしこころか白露のおきみだれたる庭のくさむら　義清

虫のねもしたにうもれてあさぼらけおくつゆふかき庭の叢　久子

●華族女學校の　生徒の風、近きころは、やうやう下ざまに、流るゝかたぶきありて、中には、かのあそび女が用ゐると聞くなる七枚重に緋鼻緒つけたる草履をうがち、或は、雨傘絞紺がすりの單衣うちきて、昇校するものあり。質素をむねとするは、よきことなれども、縞柄、いでたちなどの、下卑なるは、よろしからず。なほ聞くに、女生徒、互に、書狀などとりかはすに、その文中、僕、君、甚しきは、ベランメー、ネイサン賴ムヨ、などの用語あるもあり、「素より戯れに、かりそめの書狀なるべけれども、言語同斷の事なり。」と語らふ人あり。記者、いまだ、實、虛を知るによしなけれども、かたはらいたき聞ゑなりや。そも、華

族女學校といへど、かしこきわたりのことなる御惠をうけ、且、世の上流に立てる人の子女の入學する所、はた、之を敎育する所たり。されど、女流の鑑ともなるべきなるを、さりとは、うたてきわざならずや。ゆめ、敎官の人々よ。女生徒等よ、ねがはくは、心したまひてよ。

●義勇　さいつころ、風雨いたくあれて、その災にかゝれる、こゝかしこ、多かるが中にも北海道は、ことに甚しくて、この石狩十勝兩川の本流支流、一時にあふれて、家をたゞよはし、鐵道を壞り、田畑をうづめぬれど、人畜の或は、きずつき、或は死ぬるもの數も知らず、石狩川、本支兩流にそへる地は、災ことに甚しく、夕張郡、由仁、角田の村々、そが中心たり。こゝに、この角田村に住める土人が妻に、某といへるがあり。(土人アイヌの女をぞ、おしなべてメノコと呼ふといふ) 常に心いさましく、義俠の性なりけるが、すは、水よと聞きて、忽、一葉の獨木舟に乗りて、わきかへれる濁浪の中を、物ともせず、あちこちに乗りめぐりつゝ、溺れて、流れ來る人々を救へる其の數百二十餘名の多きに及べりとぞ。角田村由仁村の人、他にくらべて、溺死せし人數の少かりしは、全くこれが功なりといふ。交通絶えたれど、其の名は、知るによしなけれども、身は、渡守の妻なりと聞く。稀なる勇婦もありけるよ。

●あはれ童よ　な忘れぞ。今汝がいふなる其の言葉を。なはふらかしぞ。今汝が立てたる其の志を。かくてこそ師たるもの、常のありさまも見ゆれ。およそ師たるもの、我に誠なくぞ、如何でか、敎を全うせん。我が誠、子弟を感せしめて、始めて、敎は行はるべけれ。こゝに、越後の國、猿橋村に住める某が子に、布施留吉とて、今年十一歳になれるがあり。家貧しくして、學資はと〳〵給せず、日毎に學校に昇るに、行厨の如きも、いと麁食なり。父母の之を愛ふる色あるを見て、慰めていへらく、「師常に敎へたまはく、粗衣

麁食は恥とすべきに足らず、たゞ學業の進まざるをこそ、恥とはすべけれ」と。されど、麁食も、などかは、意とすべき」といへり。さて、學業に至りては、同級の生徒、これに及ぶものなしとぞ。誠にたのもしき童にこそ。

●友愛の情　掬すべし。陸前の國、栗原郡、鳥矢崎村に住める阿部正吉といへるは、小學校の生徒なるが、さきに、水害の爲に、山腹くづれおちて、母と兄弟姉妹とは、皆、おしつぶされて、身うせ、殘れるは、たゞ我と老いたる父とのみなり。そが上に、身にまとふべき衣だにもなければ、同級の生徒ども、あはれがりて一同金五圓をつのりて、師に託して、之をそが許におくれりとぞ。あはれ〳〵。

●臺灣教育談　こは、土人教育のものがたりなり。さて、これまで、國語傳習所といひしを、公學と改め、費用をば、地方費の負擔とせり。其の學年をば、六ケ年とし、就學年齡をば、八歲よりとさだめたり。おしなべて、學校を思ふ心、いと深くして、其の費金等の支出を厭ふ色なし。學生の精神も、質實にして、就業の時に遅るゝ者なし、學業の進歩もいと速なり。たとへば、入學の際、さま〴〵の質問をするに、初、「雲は如何なるものぞ」と問へば、「龍怒りて生じたるものなり」と答へ、或は、「雨は如何なるものぞ」と問へば、「天の汗なり」など答へしを、一年も過ぎて後、その水蒸氣によりて起るものたるを知れば、われと我を疑ふさまなりといふ。さて又、幼時、父母の膝下にありては、冒險談、お伽話、或は、よろしき玩具等もなければ、智識開發の度、甚しく後れたり。然れども、一旦、種々の理をさとり得ては、其の心理、應用、本土の人に比すれば、いと確實なる趣あり。さはいへど、お伽話は、必しもなきにあらず。いと〳〵苦心をつみて、あつめ得たるもの、九十二種あり。されども、これ皆、あるまじき空想のもの多く、たとへば、「大龍來て、この臺灣を一呑にせん」などいへる說多し。これも一部分

に行はるゝに過ぎず。と、さる人は語れり。記者いふ。このれ伽話は、いまだ、委しくは、ねきかねども、おながちに、皆ながら棄つべきにはおらじ。これによせて、深き心をふくめたるもなきにはおらざるべしかし。

●地球直立説　こは、この大地球をして、直立せしむべしといへるにて、佛國の地理學者ホーヘ氏が説なり。先生いと暇ありと見ゑて、年ごろ、さま〳〵の工夫を凝しけるが、このほど、やう〳〵、其の考案も熟せりとぞ。其の説に曰く、今この地球は、軌道上に、直角をなさずして、三十度の傾斜をなせるが故に、各地何れも、氣候風土みな、一定の變化をなせり。かくては、心ゆかぬわざなれど、この地軸を直角ならしめ、あらゆるものをして皆、根本より改革せしむべし。其の方法は、地球の赤道の部に、凡、一兆噸の十億倍の大重量をれかんに、地軸はために、自、直立すべし。しかせぞ、氣候風土もまた、れのづからにかはりて、動植物等も、一變し、世の中、全く豹變すべしといふにあり。ボルモルガゼット新聞、之を冷評して、もししからんには、北極地方なる白熊、海豹、氷山等は、赤道直下に、移るべく、なほ高緯度に住める人民は、低緯度に住める人民と戰を開くに至るべく、なほ、且、赤道部に、かゝる大重物を積むべき手段なしといへり。ホーヘ先生、屈せずして之と爭ひ、蒸氣の全力をつくさぞ、二百萬年がうちには、この大事業をも成就し得べしといへりとぞ。かくては、學者、既に、愚人に近しとやいはん。ねうもなき事をも、主張するもの哉。

●むだ六がやたら帖　前號にも、一つぬき出つ。今又、一つぬき出ぬ。この慶安のこと、はやくものにも見ゑて、珍しきものにはおらねぞ、むかしを見ぬ今のわかき女どもにはとて、まづ〳〵。

東京にて奉公人の口入をする者をけいおんと呼べる事の起りは寛文の頃木挽町に大和慶安といへる醫師おりその親しく交はれる浪人に伊達三郎兵衛長谷川助衛門

といへるありてこの三人相謀りて世間の人の出入あるひは男女婚姻の媒酌などを肝煎り居り某諸侯の縁邊を取持ちて息女の方より金五六千兩持參の筥に定め三人竊かに言合てその内の金二千兩ばかりを掠め取りしに此事世上にあまねく聞ゑて寛永五年八月廿四日右の三人には追放の刑に處せられたり依りて其頃より人の出入の世話する者を慶安と言初めしなりと然れど桂庵と書くは舛訛へるにや。

●乳兒の脚氣症　このごろ流行すといふ。其の病狀、脳膜炎に似たるが故に、往々誤診して、れひさきなかき若芽を、二葉のほどに、枯れしむるもありと聞く。醫師たるもの、父母たるもの、ともに、深く注意すべきなり。さる人、嬰兒の病にかゝれるを、醫の大家に見せたるに、脳膜炎なりと診して、氷嚢を用ゐて、さまざまに治療を加へしかども、病勢次第に重り行けば、心もとながりて、更に、小兒科專門醫に診せけるに、こは、脚氣症なりとて、直に母乳をはなち、煉乳を用ゐしめて、治療を加へしかど、日ならずして、快復せりといふ。こは、母親のまづ、脚氣症にかゝれるが、其の乳汁より的然波及せしなりとぞ。れよそ、母乳と嬰兒との關係は、いときびしくして、かの脚氣症などは、母のいまだ、何とも感せざるに、嬰兒は、はやく、變態をあらはし、まづ、聲音啞れ、乳汁を吐出し、糞尿變色するなど、そのありさま、脳膜炎、實扶垤利等に似たり。されど、婦人科の醫師にして、往々誤診するもありとぞ。ともにくゝ、かへすぐも、心すべきなり。

●外人教師　こは、我が教師にして、外人を教ふるにはあらで、外人をして、我が小學教員たらしめ、或は、小學校を起すを得しむるをよしとすべしといふ説あり。よしあしは知らねど輕きことならねど、深く、講究すべきことがらなるべし。

●奇童　もあるもの哉。遠州、榛原郡、萓山村に住める某が子、今年二歳なるが、毛髪いと黑々として、

聲は、牛の如く、体量七貫目ありといふ。父、之を愛育して、やがて、日本第一の勇士たれとて、國一と名づけつとぞ。行末いとたのもしくこそ。

●耳いたし　北海道、小樽、量徳高等小學校三年生、何のはつ(今年十七歳)又、日本赤十字社、富山支部看護婦養成所生徒、何のしげといへる二人は、女として、最、かたく守るべき操をはぶらかしつるのみか、罪をさへ犯して、罰せられしときく。かゝる友がらは、わが顔のみか、學校、或か、社の面をもけがせりといふべし。れはかたのわかき女は、これを見て、いましめとせよ。この二人は、これより心をもちかへて、この恥をすゝぐばかりの人となれ。

●しみれとし　着ものなどの汗じみたるを、あとなく落さんには、まづ水入の「アンモニア」を、その汚れたる所に注ぎ、さて白ききれにて、拭へば、地合、艶色をも、そこなはずして、拔き去るを得べしとぞ。又、一法には、其の汗のかわかぬうちに、水に焼酎をすこし混じて、これに浸しれき、三四時間を經て後、振り出せば、あとをとゞめずといふ。されど、これは、化學染のものは效なしとぞ。試みてよ。

●假名遣のあやまり　は、れはかたには、多くあることなり。されども、これは、よく心得てあるべきはいふをまたず。かの「ベンケイ、ガ、ナー、ギナタヲモツテ」とは、讀みざまのよからぬをいへる例にて、今これは、假名遣をあやまれる例なり。さいつころ、所々に水の災害ありし時、野州、足利町に住める某、わが妻の他國に行きてあるを呼びよせんとて、電報をもて、いひやりしに、その妻、返電して、「ミズテタユケヌ」といへり。夫、これを見て、「見捨てた。行けぬ」とは、心得ぬいひざま哉。とて、いたく怒れりしが、よくよく讀みあぢはへば、こは、假名づかひをあやまれるにて、まことは、「水出タ行ケヌ」のこゝろなりけり。と心づきて、怒もとけたりきとぞ。

敎の庭



十月五日兼題　雲間雁

天　東京府下北豐島郡巣鴨三丁目三番地　森野梅子

なつかしき聲ぞとき〻て仰むけど
雲間すきゆくかりのひとむら

地　横濱市日出町太田二千二百三番地　笹子茂子

雲かくりつきに声のびてとぶ雁は
誰かたまづさのつかひなる闇

人　甲府市八日町　坂田きみ子

しら雲のよそにのみなく聲ぞして
そらたのめなる雁のたまづさ

秀逸（十五首）

ふる里をかへりみしつ〻むら雨の
雲間のかりやなきわたるらん　三河　永井さい子

見るが中にみね隠れする厂がねは
くもの通ひ路ふみやまよひし　肥後　田代艶子

白くものたえま〳〵にかけ見えて
とほくなりゆく厂のこゑかな　大坂　眞島ちづ子

月影はくもまもるれどかりかねは
いづこゆくらん聲のみぞする　東京　河田いし子

むらくもにすがたはきえて初厂の
こゑさやけくも遠ざかり行く　東京　木村きく子

久方のくものあなたをなかむれは
ともよびたて〻かり渡る見ゆ　出雲　山根久子

八重雲に羽根打さまは見えねども
はるかにかりの聲ぞきこゆる　越前　山田璋子

はれ渡る空よりもなほなか〳〵に
雲のたえまのかりぞゆかしき　三河　石川甫江子

なく聲は雲にさはらすきこゆれど
たえ〳〵見ゆる厂のひとつら　甲府　名取よし子

薄墨にかすかくも声かあまとふや
くもぢにむせぶ厂のひとつら　東京　横山柳子

月影をまづくもまよりうれしくも
れもはすき〻つ厂のはつこゑ　横濱　綿野りき子

雨はれしゆふべの雲のたえまより
みえてうれしきかりの一つら　伊豫　野中あさ子

かりがねの姿はくもにかくろひて
こゑのみとほくなき渡りゆく　豊後　鵜濃喜代子

さやかにもなくねのこして久堅の　東京　屋摩高繁子

くも路にきゆる厂のひとつら

明らけき月もくもまになりはてゝ　聲のみのこる厂のひとつら　千葉　佐久間八重子

（以下原稿到着順）

秋かせのそよくさやまをみわたせは　くものはたてにかりのもじかく。　溝口貞子

雲まよりほのかにみえてあまつかり　こゑ志つかなるあきのゆふくれ　石井數子

すみなれしさとはいつこか志ら雲に　はれうちかはしわたるかりかね　鹿瀨島嘉子

雲まをはわたるかりかねこゝろあらは　わかふるさとのおとつれなせよ　江口隼子

たちおほふ雲のたえ間にかけ見えて　ひとつらわたるあきのかりかね　安孫子かづ子

月のふねからろおすかさきこゆなり　くものなみ路をわたるかりかね　佐々小琴子

うき雲のなひくみそらのかりかねは　今朝み越路をこえてきつらん　佐々有鄰子

つきくらきこよひを思ひあかせとや　くもまをわたるかりのこゑ〳〵　竹内賴子

ふるさとやいつこなるらん雲間より　なこりをしむかりのひとこゑ　谷口なほ子

つはさあらはゆきて道をもつけなまし　くもまもれくるかりかねのこゑ　松枝鶴子

なきつるゝこゑはいつこかしら雲の　いくへわけくるかりのひとつら　根岸豐子

雲間とふかりのすかたは見えねとも　それと志らるゝこゑかすかなり　久米貞子

すみそめのゆふくれ近きくもまより　ほのかにみえてかりなきわたる　山本靜江子

はなれしと呼びつく聲はきこゆれと　くもまにきえてみえぬかりかな　山内かず子

三日月のくもゐはるけくこゑもれぬ　はつかりかねやいまわたるらむ　竹村竹呈子

しらくものいつこにやとを厂かねの　あかつきふかくなきわたるなり　森やす子

かくれたる雲間のつきのかけをさへ　かすめてゆくかかりのひとつら　田代綾子

あきかせや吹きおくるらん雲間より　かすかにもるゝはつかりのこゑ　安村歌子

あまつかり雲井をわたるこゑすなり　つきのみやこにゆかんとやする　澤田せい子

うきまよふ幾重のくもをわけつゝも　たゝしくわたるかりのひとつら　根岸豐子

ひさかたの雲のうなはらわたるらし　こゑほにあけてかりそなくなる　失名

月いつとみそらはるかになかむれは　くも間をわたるかりのひとつら　西豔子

みねかくれ雲間をわたるかりかねの　たちゆくさきはいつこなるらむ　橋口たき子

立ち渡るくも路にゆく手まとひしか　こゑもあはれにかりそなくなる　井川澄子

仰き見れは雲のゆきかひたゞならぬ　しくれのそらにかりそなくなる　深井けい子

月かけのもれくるたにもうれしきを　かりもくもまをなきわたるかな　遠藤千代子

秋ふけしいなはのかせにさそはれて　丸木久樂子

くものたえ間をわたるかりがね

あまのはら八重のむら雲たなひきて
　見えがくれゆくかりをしそ思ふ　佐藤よし子

きけばまつかなしき物をいかにせん
　くものたえ間のはつかりのこゑ　前澤しげ子

ふきはらふ風もなく〱うきくもの
　たえ間をわたるかりのひさつら　前澤こう子

おほそらに聲きこゆなりかりがねの
　くも間がくれに鳴きわたるらん　前澤つれ子

聲はかりきこえきにけりあまくもに
　のりてやかりのなきわたるらん　曾兵よし子

しばらくは雲にすがたをかくしつゝ
　いくつらさなくわたるかりかな　六鹿廣子

月くらきゆふへなれさもかりがねの
　あきをしりてやなきわたるなり　新浦美津子

雲井さほしはつかりがねのしゑすなり
　いまたたひなるこゝろなるらん　白石由子

立ち出てゝくれゆく空をながむれば
　くもまへだてゝかりそなくなる　川上喜代子

めづらしくけふ初かりのこゑすなり
　くもまにいりてかげはみえねさ　川上博子

夕くれのあきかぜさむくおとつれて
　くもゐはるかにわたるかりがね　曾根雪子

つきゝよきくもまをわたる初かりの
　こゑもしくれてあきかぜそふく　山本つる子

むらくもにかくれし月をまつほどに
　なきてそわたるかりのひさつら　深野たけ子

春のかりいにしくもちにくらぶれば
　かすみさてなしいまくるそらは　稲原菫子

むらくもの中にもみちはかよふらん
　まよふさもなきかりのきこゆる　小神野　きむ子

うき人のいかにきくらんあきのよの
　くもゐのおくになくかりの音を　黒木信子

夕くれのくものはたてをはつかりの
　見えつかくれつなきわたるなり　辻本ひさ子

もの思ふ身にはいさこそかなしけれ
　くもまわけゆくかりがねのこゑ　高田ゆきへ子

ふる里のたよりまちつゝそらみれば
　くもかきわけてかりはきにけり　友永章子

むら雨のはるゝゆふべのくもまより
　わたるかりがねいつちおつらん　黒田明子

立ちまよふ雲のはたてをはつかりは
　みえがくれつゝなきわたるなり　山田介子

ながめやる雲ゐのそらにうすすみの
　文字さもみえてかりなきわたる　虎口賀[illegible]

やみのよの雲ちやいかにまよふらん
　なきつゝわたりあまつかりがね　高島酉子

かたふきしつきのしたゆく八重雲を
　わけてそわたるあまつかりがね　遠藤兵久子

夕あらしあめ吹きさそふくも間より
　さびしくわたるはつかりのこゑ　高砂きよ子

夕やけのほのめくそらに見つるかな
　くも間をわたるかりのひさつれ　高砂菊代子

すがたさへ見えなばいかに雲間行く
　こゑなつかしきあまつかりがね　堀　いさむ子

小夜更けてこゑもあはれに久かたの
　くもまをわたるあきのはつかり　佐藤喜代子

鳴く聲は見えねさかりのくもまにて　作田美志子

萩露　　諏訪忠元

きのふけふつゆに心のをくぞかり
庭のあきはぎ咲きみちにけり

移野花　　宮地嚴夫

野にあそぶたびにうつして百草の
はなぞのとこそ庭をなしつれ

霧中野花　　北郷久政

秋ぎりはたちかくせとも八千種の
はなのにほひは隠れざりけり

旅宿月　　手塚光榮

世のうさを忘れし旅のひとりねに
ものをもはする月のかげかな

初雁　　植松有經

この朝けにはかに寒しやまかせを
翼にかけてかりはきつらん

劍　　千葉胤明

村ぎもの心ぞかりはきたひてん
よしやつるぎは身にをびす共

蘆洲月　　遠山英一

蘆のはのそよぐよ風も身にしみて
洲崎のつき夜かげふけにけり

秋ふかし　　下田義天類

をく露の玉にまじりてはとむぎも
みのしろむまで秋は來にけり

秋夜　　山川鶫一

月かげのをよはぬくまもすゞ虫の
しめてもらさぬ秋の夜半かな

月の歌あまたよみける中に　　三輪義方

思ひやるのやまのはてはつき人の
くににさへゆく我がこゝろ哉

苅萱　　光岡正彰

八重葎しげれるのきのさびしさに
やどかるかやの風のをとかな

喜右衛門が妻　　佐々豊水

陸奥のれくゆかしくもみゆるかな
わらぐつとりしそこの心は

山家秋　赤松景福

もみぢ葉を見にくる人に誘はれて
やました庵を今日もいでつゝ

草花變　足立正枝

むしの音に秋を殘して我がにはの
ひとむら眞萩うつろひにけり

雨中虫　近衛貞子

雨ふれどかきねにしげき虫の音も
ひとつ二つになりにけるかな

舟中月　前田朗子

いつしかと夜は更ぬらん舟まどに
さしいる月のかげのさやけさ

曉露　柳原愛子

こほろぎの鳴く聲寒きあかつきの
草むらしろくつゆそむすへる

庭秋草　北島以登子

今年うゑし庭のすゝきの一もとに
つきもはじめてかゝりける哉

案山子　松平健子

暮ぬとてひとはかへりし山どたに
かゝしのみこそ獨たちけれ

菊をかざして　岩崎寧子

千世のいろうつりやすると山川の
みぎはの菊をかざしつるかな

雨後紅葉　南郷柳子

我よりも先にやあめのふりすぎし
やまぢの紅葉ぬれしまゝなる

秋舟　佐藤艶子

のる人の有とも見ねず山かはの
紅葉のかげにふねはあれども

月明かなる夜友きたり　坂田泰子

もろともに學びし窓にみしあきを

月にむかひてかたる夜半かな

山家雁　小川直子

雲にとぶ雁もうき世やいとふらん
やまさとさしてなき渡るなり

引板　土岐いく子

とみ草のみのりもみちて小山田に
引板の音たかき夕まぐれかな

折にふれて　内田遊歌子

いかにして今日をば過ぎむ紛べき
友もとひこずかぜもふきこず

海邊秋風　足立三尾子

漕ぎ出づる海士の小舟を吹く風は
秋のあはれを添ふるなりけり

佐々豐水

明治元年の役にしたがひゆきて陸奥原釜の戰に賊のためにに討死せし舊臣内村金衛が三十年祭によみて供ける旋頭歌

むらぎもの、心しかなし、むかし偲べは、きもむかふ、
心しをゝし、そのかみ思へば
天つちの、かみのまもれる、大八洲國、かきみだす、し
このみたてと、なりし人はも

將行豐國祭時作歌並短歌　赤松景福

豐國の神はかしこし　我國を鎭めし神ぞ　唐國をきためし神ぞ。我國の朝廷忘れて　唐國に媚てつかへし足利の軍の君に　較ぶれば痛く勝りて　其功今も殘れり。然あるをゆゝ敷も有か。山城のひむかし山に　其神のまし　社は早くより人に毀たれ　然のみか阿彌陀か峯の　其神の御墓もあれて　祭ちふ事もあらねば行て問ふ人もなかりき。こゝを以て今の御代には、朝廷より祭らせ賜ひ　世の人も仰奉りて　百年に三度なりぬる　御祭の年は今年と　いかめしく御墓つくらひうるはしく御垣もつくり　賑はしく御祭せむと　言

計はかるまにまに　速けく賛け成むと　皆いへも先そ樂しき。かく祭り然仕へては　國の爲我は願はく　今も亦唐の國國　攻て取り取りて治めむ　功しき人を生さね　國の御爲に

短歌

古に枯しひさでの久にへていよゝ貴き時にあへるかも

根岸　喜久園

大宮に行きける人より來るべきやうたよりありけれどおそくつきけれどゐゆかでよめる

秋のはじめに　なりぬれど
千草八千草　花さきて
今さかりなる　大宮に
ひと日の旅を　なしましぬ。
御供のうちを　かへしつゝ
厂の玉づさ　おこせしと
きくとはすれど　おとづれの
おそかりつるぞ　くちをしき。
みやびをたちが　わらはにも
とひこしかしの　言の葉は
いと嬉しやと　おもへども
夕ぐれ近く　なりにけり。
けふのまとゐは　もれぬれど
またいづくにか　ゆきまさむ
をりはかならず　もろともに
ことどのはなを　つみてまし。





雜報

●大御恵　天皇、皇后兩陛下より、さいつころ、雨風の災害にかゝれる國々へ、左の金員を、めぐませ給へり。なほ、北海道へは、侍從片岡利和氏、又、山梨、長野、靜岡、栃木、の四縣へは、おなじく侍從日根野要吉氏を御使として遣はさせ給ひ、其の災害にかゝれるありかたちを見しめ給へりとぞ。

一金五千圓	北海道廳へ
一金千五百圓	山梨縣へ
一同上	長野縣へ
一金千二百圓	埼玉縣へ
一同上	茨城縣へ
一金千圓	愛知縣へ
一金八百圓	群馬縣へ
一金七百圓	新潟縣へ
一金二千三百圓	靜岡縣へ
一金一千二百圓	栃木縣へ

●御詠

夜ひかる玉も何せん身をてらす
　ふみこそ人の寶なりけれ

の御歌は、さきに　皇后陛下のよませ給へるなり。このたび、之を美しき紙にうつせるを、華族女學校、其の他の女學校の生徒一同へ、おの〳〵、これを賜はれりとぞ。大御心の深くおはしますこと、仰ぎ奉れども、はてしもおはしまさず。女生徒たらんもの、よく、大御心をわが心とせよ。

●御兼題詠進歌　例のなり。九月五日のは、御題「叢路」にて、その歌ども。

なく虫の聲繁かりしくさむらは露ばかり也よのあけゆけは	正風
花もなきよもぎの庭のくさむらも露のたまこそ盛なりけれ	建通
朝日影に匂ひそめたるくさむらに玉しく如く露ぞおきける	直大
朝露にぬれぬ草葉もなかりけりうへこそ虫のなき明しつれ	豊頴
うちわたすのべの草むらおく露の日にそへ深くなれる秋哉	利嗣
果もなきのべの千草におく露を花さかぬまの花とこそみれ	承昭
秋の野の花さきみてるくさむらは露の色さへ千ぐさ也けり	銓
ひさしきりすゝしくすくる村雨に露の玉ちる庭のくさむら	通禧
こぼれてはまたおきかはるつゆみゐて月夜ふけゆく庭の叢	顯允
てにされはかつきゐにけり叢におく白つゆの玉さみゆれど	長説

繁りあふ草葉のこらず玉なしてきよくもむすぶのべの白露　光昭
むしのねはあけゆくまゝにしづまりて露のみしげき庭の叢　利兕
なく虫の聲をとめつゝわけくればおくつゆふかきのべの叢　忠敬
ゆふべ／\おく露ごとに月影も別れてやどる庭のくさむら　清
荒はてし庭のくさむらゆふべ／\玉しきたりとみゆる露哉　美稻
玉敷の庭とみるまでおきわたす露のひまなきあさぢふの宿　通治
叢におく夕露のふかければわがそでさへにうちしめりつゝ　雅之
有明の月しづかなるくさむらに秋をふかめてむすぶつゆ哉　量弘
秋風に玉とみだるる草くさむらのつゆの光の清くもあるかな　隆元
くさむらにおける白露風ふけば玉とみだれて涼しかりけり　長言
朝風のたねまなるらんくさむらのくもの糸にも露の結べる　愛子
なく虫の聲をきかんとおりたてばおく露深し庭のくさむら　任子
荻におきすゝきにむすび秋の野の深き儔をつゆにみるかな　文子
ふみわくるすそも袂もぬれにけりのべの叢つゆふかくして　祥子
つとひつる螢はいつかきゐはてゝおくつゆひかるにはの叢　貞子
きのふまで螢やどりし叢にはやくもむすぶあきのつゆかな　敦子
秋風に木々のしづくもおちぬらしあさつゆふかしにはの叢　道子
こほろぎのなくね淋しきくさむらに露おきあまる庭の夕暮　嫏子
終夜なきつるむしの聲たねてあさつゆふかし庭のくさむら　以登子
月影もすみわたりたるくさむらに光をそへてたけるつゆ哉　好子
村雨のふりしおさとかと思ふまでおくつゆ深し庭のあさちふ　鈺子
拂ふべき人なき庭のくさむらは露のやどりとなりにける哉　三枝
なきしきる虫の涙かくさむらの白くなるまでつゆの結べる　愛
なもしらぬ庭の　葉もおく露をもてなす秋はをかしかり鳬　眞頼
朝露の光をみればくさむらもいぶせきものと思はざりけり　嚴夫
村雨のなごりすゞしきくさむらのつゆふりこぼす鈴蟲の聲　正臣
は涼しかれどもむくらふの露の玉をはちらさずもがな　重嶺
いかばかりおく露ならん淺茅はふ虫の聲さへ濡てきこゆる　秋香
なつかりのあさより生し村草に涼しき秋のつゆぞむすべる　粲
月影はきぬゆくにはのくさむらに露を殘してよは明にけり　有經
繁くのみなりゆくみれば叢のつゆこそ秋のもやさなりけれ　嚴雄
繁りあふのぢの叢わけゆけば袖もすそもつゆにぬれつゝ　有經
あき日さすなかの叢風ふけばみだれてつゆの玉ぞちりける　行久
秋の日に葉末はかれてみゆれどもふめばつゆありにはの叢　胤明
靜にもよはあけそめて叢におくしらつゆもこぼれざりけり　英一
秋風のたちしころか白露のおきみだれたる庭のくさむら　義濟
虫のねもしたにうもれてあさぼらけおくつゆふかし庭の叢　久子

●華族女學校の生徒の風、近きころは、やう／\下ざまに、流るゝかたぶきありて、中には、かのおそび女が用ゐると聞くなる七枚重に緋鼻緒つけたる草履をうがち、或は、雨傘絞紺がすりの單衣うちきて、昇校するものあり。質素をむねとするは、よきことなれども、縞柄、いでたちなどの、下卑なるは、よろしからず。なほ聞くに、女生徒、互に、書狀などとりかはすに、その文中、僕、君、甚しきは、ベランメー、ネイサン賴ムヨ、などの用語あるもあり、「素より戲れに、かりそめの書狀なるべけれども、言語同斷の事なり。」と語らふ人あり。記者、いまだ、實、虚を知るによしなけれども、かたはらいたき聞ねなりや。そも、華

族女學校といへど、かしこきわたりのことなる御惠をうけ、且、世の上流に立てる人の子女の入學する所、はた、之を敎育する所たり。されど、女流の鑑ともなるべきなるを、さりとは、うたてきわざならずや。ゆめ、敎官の人々よ。女生徒等よ、ねがはくは、心したまひてよ。

●義勇　さいつころ、風雨いたくあれて、その災にかゝれる、こゝかしこ、多かるが中にも北海道は、ことに甚しくて、この石狩十勝兩川の本流支流、一時にあふれて、家をたゞよはし、鐵道を壞り、田畑をうづめぬれど、人畜の或は、きずつき、或は死ぬるもの數も知らず、石狩川、本支兩流にそへる地は、災ことに甚しく、夕張郡、由仁、角田の村々、そが中心たり。こゝに、この角田村に住める土人が妻に、某といへるがあり。(土人アイヌの女をぞ、おしなべてメノコと呼ふといふ) 常に心いさましく、義俠の性なりけるが、すは、水よと聞きて、忽、一葉の獨木舟に乗りて、わきかへれる濁浪の中を、物ともせず、あちこちに乗りめぐりつゝ、溺れて、流れ來る人々を救へる其の數百二十餘名の多きに及べりとぞ。角田村由仁村の人、他にくらべて、溺死せし人數の少かりしは、全くこれが功なりといふ。交通絶えたれど、其の名は、知るによしなけれども、身は、渡守の妻なりと聞く。稀なる勇婦もありけるよ。

●あはれ童よ　な忘れぞ。今汝がいふなる其の言葉を。なはふらかしぞ。今汝が立てたる其の志を。かくてこそ師たるもの、常のありさまも見ゆれ。およそ師たるもの、我に誠なくど、如何でかも、敎を全うせん。我が誠、子弟を感せしめて、始めて、敎は行はるべけれ。こゝに、越後の國、猿橋村に住める某が子に、布施留吉とて、今年十一歳になれるがあり。家貧しくして、學資はとく〳〵給せず、日毎に學校に昇るに、行厨の如きも、いと麁食なり。父母の之を憂ふる色あるを見て、慰めていへらく、「師常に敎へたまはく、粗衣

飩食は耻とすべきに足らず、たゞ學業の進まざるをこそ、耻とはすべけれ」と。されど、飩食も、などかは、意とすべき」といへり。さて、學業に至りては、同級の生徒、これに及ぶものなしとぞ。誠にたのもしき童にこそ。

●友愛の情　掬すべし。陸前の國、栗原郡、鳥矢崎村に住める阿部正吉といへるは、小學校の生徒なるが、さきに、水害の爲に、山腹くづれおちて、母と兄弟姉妹とは、皆、おしつぶされて、身うせ、殘れるは、たゞ我と老いたる父とのみなり。その上に、身にまとふべき衣だにもなけれど、同級の生徒ども、あはれがりて一同金五圓をつのりて、師に託して、之をそが許におくれりとぞ。あはれ〳〵。

●臺灣教育談　こは、土人教育のものがたりなり。さて、これまで、國語傳習所といひしを、公學と改め、費用をば、地方費の負擔とせり。其の學年をば、六ケ年とし、就學年齡をば、八歲よりとさだめたり。おしなべて、學校を思ふ心、いと深くして、其の費金等の支出を厭ふ色なし。學生の精神も、質實にして、就業の時に遲るゝ者なし、學業の進歩もいと速なり。たとへば、入學の際、さま〴〵の質問をするに、初、「雲は如何なるものぞ」と問へば、「龍怒りて生じたるものなり」と答へ、或は、「雨は如何なるものぞ」と問へば、「天の汗なり」など答へしを、一年も過ぎて後、その水蒸氣によりて起るものなるを知れば、われと我を疑ふさまなりといふ。さて又、幼時、父母の膝下にありては、冒險談、お伽話、或は、よろしき玩具等もなければ、智識開發の度、甚しく後れたり。然れども、一旦、種々の理をさとり得ては、其の心理、應用、本土の人に比すれど、いと確實なる赴あり。さはいへど、お伽話は、必しもなきにあらず。いと〳〵苦心をつみて、あつめ得たるもの、九十二種あり。されども、これ皆、あるまじき空想のもの多く、たとへば、「大龍來て、この臺灣を一呑にせん」などいへる說多し。これも一部分

に行はるゝに過ぎず。と、さる人は語れり。記者いふ。このお伽話は、いまだ、委しくは、えきかねども、あながちに、皆ながら棄つべきにはあらじ。これによせて、深き心をふくめたるもなきにはあらざるべしかし。

●地球直立説　こは、この大地球をして、直立せしむべしといへるにて、佛國の地理學者ホーへ氏が説なり。先生いと暇ありと見えて、年ごろ、さまざまの工夫を凝しけるが、このほど、やうやう、其の考案も熟せりとぞ。其の説に曰く、今この地球は、軌道上に、直角をなさずして、三十度の傾斜をなせるが故に、各地何れも、氣候風土みな、一定の變化をなせり。かくては、心ゆかぬわざなれど、この地軸を直角ならしめ、あらゆるものをして皆、根本より改革せしむべし。其の方法は、地球の赤道の部に、凡、一兆噸の十億倍の大重量をおかんに、地軸はために、自、直立すべし。しかせど、氣候風土もまた、おのづからにかはりて、動植物等も、一變し、世の中、全く豹變すべしといふにあり。ポルモルガゼット新聞、之を冷評して、もしからんには、北極地方なる白熊、海豹、氷山等は、赤道直下に、移るべく、なほ高緯度に住める人民は、低緯度に住める人民と戰を開くに至るべく、なほ、且、赤道部に、かゝる大重物を積むべき手段なしといへり。ホーへ先生、屈せずして之と爭ひ、蒸氣の全力をつくさど、二百萬年がうちには、この大事業をも成就し得べしといへりとぞ。かくては、學者、既に、愚人に近しとやいはん。えうもなき事をも、主張するもの哉。

●むだ六がやたら帖　前號にも、一つぬき出つ。今又、一つぬき出ぬ。この慶安のこと、はやくものにも見えて、珍しきものにはあらねど、むかしを見ぬ今のわかき女どもにはとて、まづまづ。

東京にて奉公人の口入をする者をけいあんと呼べる事の起りは寛文の頃木挽町に大和慶安といへる醫師ありその親しく交はれる浪人に伊達三郎兵衛長谷川助衛門

といへるありこの三人相謀りて世間の人の出入あるひは男女婚姻の媒酌などを肝煎り居り某諸侯の縁邊を取持ちて息女の方より金五六千兩お叅の筈し[illegible]定め三人竊かに言合てその内の金二千兩ぞかりを掠め取りしに此事世上にあまねく聞ねて寛永五年八月廿四日右の三人には追放の刑に處せられたり依りて其頃より人の出入の世話する者を慶安と言初めしなりと然れど桂庵と書くは舛訛へるにや。

●乳兒の脚氣症　このごろ流行すといふ。其の病狀、腦膜炎に似たるが故に、往々誤診して、れひさきながき若芽を、二葉のほどに、枯れしむるもありと聞く。醫師たるもの、父母たるもの、ともに、深く注意すべきなり。さる人、嬰兒の病にかゝれるを、醫の大家に見せたるに、腦膜炎なりと診して、氷嚢を用ゐて、さま〲に治療を加へしかども、病勢次第に重り行けど、心もとながりて、更に、小兒科專門醫に診せけるに、こは、脚氣症なりとて、直に母乳をはなち、煉乳を用ゐしめて、治療を加へしかど、日ならずして、快復せりといふ。こは、母親のまづ、脚氣症にかゝれるが、其の乳汁より的然波及せしなりとぞ。されど、母乳と嬰兒との關係は、いときびしくして、かの脚氣症などは、母のいまだ、何とも感せざるに、嬰兒は、はやく、變態をあらはし、まづ、聲音嗄れ、乳汁を吐出し、糞尿變色するなど、そのありさま、腦膜炎、實扶垤利等に似たり。されど、婦人科の醫師にしてて、往々誤診するもありとぞ。ともに〱、かへす〲も、心すべきなり。

●外人敎師　こは、我が敎師にして、外人を敎ふるにはあらで、外人をして、我が小學敎員たらしめ、或は、小學校を起すを得しむるをよしとすべしといふ說あり。よしあしは知らねど輕きことならねど、深く、講究すべきことがらなるべし。

●奇童　もあるもの哉。遠州、榛原郡、萱山村に住める某が子、今年二歳なるが、毛髮いと黑々として、

聲は、牛の如く、体量七貫目ありといふ。父、之を愛育して、やがて、日本第一の勇士たれとて、國一と名づけつとぞ。行末いとたのもしくこそ。

●耳いたし　北海道、小樽、量徳高等小學校三年生、何のはつ(今年十七歳)又、日本赤十字社、富山支部看護婦養成所生徒、何のしげといへる二人は、女として、最、かたく守るべき操をはぶらかしつるのみか、罪をさへ犯して、罰せられしときく。かゝる友がらは、わが顔のみか、學校、或か、社の面をもけがせりといふべし。れはかたのわかき女は、これを見て、いましめとせよ。この二人は、これより心をもちかへて、この耻をすゝぐばかりの人となれ。

●しみれとし　若ものなどの汗じみたるを、おとなく落さんには、まづ水入の「アンモニア」を、その汚れたる所に注ぎ、さて白ききれにて、拭へど、地合、艶色をも、そこなはずして、拔き去るを得べしとぞ。又、一法には、其の汗のかわかぬうちに、水に燒酎をすてし混じて、これに浸しれき、三四時間を經て後、振り出せど、あとをとゞめずといふ。されど、これは、化學染のものは効なしとぞ。試みてよ。

●假名遣のあやまり　は、れはかたには、多くあることなり。されども、これは、よく心得てあるべきはいふをまたず。かの「ベンケイ、ガ、ナー、ヤナタヲモツテ」とは、讀みざまのよからぬをいへる例にて、今これは、假名遣をあやまれる例なり。さいつころ、所々に水の災害ありし時、野州、足利町に住める某、わが妻の他國に行きてあるを呼びよせんとて、電報をもて、いひやりしに、その妻、返電して、「ミヅテタユケヌ」といへり。夫、これを見て、「見捨てた。行けぬ」とは、心得ぬいひざま哉。とて、いたく怒れりしが、よくく讀みあぢはへど、こは、假名づかひをあやまれるにて、まことは、「水出タ行ケヌ」のこゝろなりけり。と心づきて、怒もとけたりきとぞ。



教の庭

十月五日兼題　雲間雁

天　東京府下北豊島郡巣鴨三丁目三番地　春野梅子

なつかしき聲ときゝて仰むけを
雲間すきゆくかりのひとむら

地　横濱市日出町太田二千二百三番地　笹子茂子

雲かくりつきにしのびてとぶ雁は
誰かたまづさのつかひなる闘

人　甲府市八日町　坂田きみ子

しら雲のよそにのみなく聲をして
そらたのめなる雁のたまづさ

秀逸（十五首）

ふる里をかへりみしつゝむら雨の
雲間のかりやなきわたるらん　三河　永井さい子

見るが中にみね隠れする厂がねは
くもの通ひ路ふみやまよひし　肥後　田代艶子

白くものたえまたえまにかけ見えて
とほくなりゆく厂のこゑかな　大坂　眞島ちづ子

月影はくもまもるれとかりかねは
いづこゆくらん聲のみぞする　東京　河田いし子

むらくもにすがたはきえて初厂の
こゑさやけくも遠さかり行く　東京　木村きく子

久方のくものあなたをなかむれは
ともよびたてゝかり渡る見ゆ　出雲　山根久子

八重雲に羽根打さまは見えねとも
はるかにかりの聲きこゆる　越前　山田琼子

はれ渡る空よりもなはなかなかに
雲のたえまのかりぞゆかしき　三河　石川南江子

なく聲は雲にさはらすきこゆれと
たえだえ見ゆる厂のひとつら　甲府　名取よし子

薄墨にかすかくもしかあまとふや
くもぢにむせぶ厂のひとつら　東京　横山柳子

月影をまづくもまよりうれしくも
れもはすきゝつ厂のはつこゑ　横濱　綿野りき子

雨はれしゆふべの雲のたえまより
みえてうれしきかりの一つら　伊豫　野中あさ子

かりがねの姿はくもにかくろひて
こゑのみとほくなき渡りゆく　豊後　鵜濃喜代子

さやかにもなくねのこして久堅の　東京　屋摩高繁子

くも路にきゆる厂のひとつら

明らけき月もくもまになりはてゝ　千葉　佐久間八重子
聲のみのこる厂のひとつら

（以下原稿到着順）

秋かせのそよくとやまをみわたせは　溝口貞子
くものはたてにかりのもじかく

雲まよりほのかにみえてあまつかり　石井數子
こゑ志つかなるあきのゆふくれ

すみなれしさとはいつこか志ら雲に　鹿瀬島嘉子
はねうちかはしわたるかりかね

雲まをはわたるかりかねこゝろあらは　江口隼子
わかふるさとのおとつれもせよ

たちおほふ雲のたえ間にかけ見えて　安孫子かづ子
ひとつらわたるあきのかりかね

月のふねからろおすかときこゆなり　佐々小學子
くものなみ路をわたるかりかね

うき雲のなひくみそらのかりかねは　佐々有鄰子
今朝み越路をこえてきつらん

つきくらきこよひを思ひあかせとや　竹内賴子
くもまをわたるかりのこゑ〱

ふるさとやいつこなるらん雲間より　谷口なほ子
なこりををしむかりのひとこゑ

つはさあらはゆきて道をもつけなまし　松枝鶴子
くもまもれくるかりかねのこゑ

なきつるゝこゑはいつこかしら雲の　根岸豐子
いくへわけくるかりのひとつら

雲間とふかりのすかたは見えねとも　久米貞子
それと志らるゝこゑかすかなり

すみそめのゆふくれ近きくもまより　山本靜江子
ほのかにみえてかりなきわたる

はなれしと呼びつく聲はきこゆれと　山内かず子
くもまにきえてみえぬかりかな

三日月のくもゐはるけくこゑもれぬ　竹村竹呈子
はつかりかねやいまわたるらむ

しらくものいつこにやとを厂かねの　森やす子
あかつきふかくなきわたるなり

かくれたる雲間のつきのかけをさへ　田代綾子
かすめてゆくかかりのひとつら

あきかせや吹きおくるらん雲間より　安村歌子
かすかにもるゝはつかりのこゑ

あまつかり雲井をわたるこゑすなり　澤田せい子
つきのみやこにゆかんとやする

うきまよふ幾重のくもをわけつゝも　根岸豐子
たゝしくわたるかりのひとつら

ひさかたの雲のうなはらわたるらし　失名
こゑほにあけてかりそなくなる

月いつとみそらはるかになかむれは　西豔子
くも間をわたるかりのひとつら

みえかくれ雲間をわたるかりかねの　橋口たき子
たちゆくさきはいつこなるらむ

立ち渡るくも路にゆく手まとひしか　井川澄子
こゑもあはれにかりそなくなる

仰き見れは雲のゆきかひたゞならぬ　深井けい子
しくれのそらにかりそなくなる

月かけのもれくるたにもうれしきを　遠藤千代子
かりもくもまをなきわたるかな

秋ふけしいなはのかせにさそはれて　丸木久樂子

くものたえ間をわたるかりかね

あまのはら八重のむら雲たなひきて
見えかくれゆくかりをしそ思ふ　佐藤よし子

きけはまつかなしき物をいかにせん
くものたえ間のはつかりのこゑ　前澤しげ子

ふきはらふ風もなくくうきくもの
たえ間をわたるかりのひとつら　前澤こう子

おほそらに聲きこゆなりかりかねの
くも間かくれに鳴きわたるらん　前澤つれ子

聲はかりきこえきにけりあまくもに
のりてやかりのなきわたるらん　曾我よし子

しはらくは雲にすかたをかくしつゝ
いくつらとなくわたるかりかな　六鹿廣子

月くらきゆふへなれともかりかねの
あきをしりてやなきわたるなり　新浦美津子

雲井とほしはつかりかねのこゑすなり
いまたたひなるこゝろなるらん　白石由子

立ち出てゝくれゆく空をなかむれは
くもまへたてゝかりそなくなる　川上喜代子

めつらしくけふ初かりのこゑすなり
くもまにいりてかけはみえねと　川上博子

夕くれのあきかせさむくおとつれて
くもゐはるかにわたるかりかね　曾根雪子

つきゝよきくもまをわたる初かりの
こゑもしくれてあきかせそふく　山本つる子

むらくもにかくれし月をまつほとに
なきてそわたるかりのひとつら　深野たけ子

春のかりいにしくもちにくらふれは
かすみとてなしいまくるそらは　福原菫子

むらくもの中にもみちはかよふらん
まよふともなきかりのきこゆる　小神野まむ子

うき人のいかにきくらんあきのよの
くもゐのおくになくかりの音を　黒木信子

夕くれのくものはたてをはつかりの
見えつかくれつなきわたるなり　辻本ひさ子

もの思ふ身にはいとこそかなしけれ
くもまわけゆくかりかねのこゑ　高田ゆきへ子

ふる里のたよりまちつゝそらみれは
くもかきわけてかりはきにけり　友永章子

むら雨のはるゝゆふべのくもまより
わたるかりかねいつちおつらん　黒田明子

立ちまよふ雲のはたてをはつかりは
みえかくれつゝなきわたるなり　山田介子

なかめやる雲ゐのそらにうすすみの
文字ともみえてかりなきわたる　虎口實[illegible]

やみのよの雲ちやいかにまよふらん
なきつゝわたりあまつかりかね　高島酉子

かたふきしつきのしたゆく八重雲を
わけてそわたるあまつかりかね　遠藤艮久子

夕あらしあめ吹きさそふくも間より
さひしくわたるはつかりのこゑ　高砂きよ子

夕やけのほのめくそらに見つるかな
くも間をわたるかりのひとつれ　高砂菊代子

すかたさへ見えなはいかに雲間行く
こゑなつかしきあまつかりかね　塙いさむ子

小夜更けてこゑもあはれに久かたの
くもまをわたるあきのはつかり　佐藤喜代子

鳴く聲は見えねとかりのくもまにて　作田美志子

知らぬ野やまのつきを待つらん

あさきりに雲のいつこをゆくかとも
さためかねたるかりのこゑかな　河田ふく子

うき雲のたゝよふそらにこゑたかく
つらもみたさすかりなきわたる　羽田みれ子

秋かせにさそはれてくるはつかりの
こゑほのかにもくもま行くなり　栗生菊子

秋の夜のうすゝみいろのくもまより
もれておちくるかりかれのこゑ　濱田よし子

夕やみにたれかたまつさおくるらん
くもまをわたるかりかれのこゑ　佐々聰子

うすくこくたてるむら雲うちはふき
みねみゝねすみかり鳴きわたる　谷口婦佐子

ほのかにも影はみねねさはつかりの
こゑはるやけきむらくものそら　中桐李子

けふもまたしくれもよほすうき雲の
たね間をもるゝかりのこゑ〳〵　戸塚鉄子

しくるゝは秋のならひのくもまより
こゑもらしつゝわたるかりかれ　諸井くら子

うき雲にかくれあらはれかりかれの
すかたをかきあきのゆふくれ　舘脇ます子

おもしろき秋のなかめやうきくもを
つはさにわけてわたるかりかれ　吾妻ちか子

聲はかりくもまをわたるかりかれは
たひのすかたやいさふなるへし　小曾根しう子

ゆひをりて數ふる間まへうきくもに
みたれてわたるあまつかりかれ　池谷さみ子

友よびてくものはたてをはる〳〵と
あまつかりかれなきわたるかな　米盛たい子

久かたのあまのやへくもかきわけて
きこねきにけりはつかりのこゑ　吉江いく子

たかふてのたまつさならむうす墨の
くもゐをわたるかりのひとつら　今井秀子

はつかりはまた世のうきに習はねは
しはしくもまにみねかくれして　美濃君子

なに人のしのふのふみをかけぬらん
くもまをわたるはつかりのこゑ　日吉あさ子

あきかせのふく度ごとにさそはれて
くもまをかりの鳴きわたるかな　高屋はき子

おさつれしこゑなつかしくなかむれは
くもまをわたるかりのひとむら　絹川ます子

月かけはおもひたねたるむらくもの
くもまに見ゆるかりのあはれさ　石川類子

鳴く鴈のみねみみねすみなりぬるは
うき世のくものさはりなるらん　石川樂子

床しさに立ちいてみれはなく〳〵も
くもに消ねゆくかりのひとつら　野口三子

ゆく雲にそれとすかたはわかねとも
こゑはるやかにかりなきわたる　根岸里子

なき渡るこゑはもれきてきこゆれと
くもたちかくすかりのひとつら　仲田榮子

ちきりおきし秋をわすれすいさはやも
くもまになのるかりのひとつら　徳永萬壽子

天の戸のあけかたちかくくもまより
ほのかにおつるはつかりのこゑ　徳永廣子

うき　のたねまにもるつきかけと
さらにおちくるはつかりのこゑ　中山就子

薄すみのゑにかくはかりくもゐより　小森田暉子

ほのかにみゆるかりのひとつら

うす墨になひける雲のたえ間をは
なきわたる見ゆかりのたまつさ

あききぬと羽風すゞしきかりかねの
くも井はるかにおとつれて行く

いつしかと秋はきにけん小夜ふけて
くも間をわたるかりがねのこゑ

さらぬたにさひしき秋の小夜なかを
くも間にかりのおとつるゝなり

友よはふ音をはくも井にのしつゝ
そこともわかすわたるかりかね

めつらしく手にとる斗りきこゆなり
くも間をもるゝはつかりのこゑ

むら雲のたえまに見えしかりかねの
こゑをちかになりにけるかな

ひさかたの月のかつらのおちはかと
みしは雲間のかりにそありける

秋はきぬくもまにかりのこゑすなり
誰かたまつさをかけて來つらん

少女子かなにとやくかもふと見れは
くも井はるかにかりわたるなり

なかめやる雲のたえまになくかりは
去年の田のもやこひしかるらむ

ひとつらのなかはは雲に見えねとも
こゑさやかなりあまつかりかね

まちいでむ月まちわぶるくもまより
さやかにもるゝはつかりのこゑ

かつ見えつかつかつかくれつゝ久かたの
くもまあやどるかりのひとつら

仁保しま子　加納はな子　木村喜子　高山信子　失名　中山富子　楢靜子　岡田　子　草賀きくの子　久保田長子　三幣操子　名取正代子　吉田きさ子　泉さい子

なり〳〵は月のひかりにかげ見えて
くもにこゑあるかりのひとつら

くもにきえ月にあらはれ晴れくもる
そらなきわたるかりのひとつら

夢さめし夜半のまくらにきこゆるは
くもまをいづるかりがねのこゑ

手まくらのことゝふものはあり明に
くもまをわたるはつかりのこゑ

脚はやきくもにおくれずひとすぢに
わがいほさしてはつかりのなく

ひさかたのつきかげかくす雲の上に
ゆめおどろかすはつかりのこゑ

朝かぜの身にしみにけんひさかたの
くもまをわたるかりのひとこゑ

ゆくゝものたえまの月にかげ見えて
なり〳〵もらすかりがねのこゑ

あまつたふかりかね遠くなりゆくは
くもぢにふかく入りやしにけん

さだかにもそれとはきけどしら雲に
へだてゝをしきはつかりのこゑ

むらさめの名殘のくもの消えやらぬ
たえ間を分けてかり鳴きわたる

こゑはして姿はみえすあまつ雁
くものいづくをわたり來にけむ

久かたのくものたえ間をゆくかりは
ちらしてかけるふみかとぞ思ふ

大そらにたゞよふくものうきはしを
わたりそめたるあまつかりがね

渡すべきくものたえ間のあるぞとも

泉久良子　重松たか子　福田なみ江子　毛利保きよ子　赤林ふじゑ子　赤林かなゑ子　井上かじ子　篠崎ふさ子　稲田錦子　敷島花子　玉井ふく子　服部かつみ子　田中靜子　田中時子　進藤ゆき子

しらてやかりのかくれそめけん

うき雲のたえ間にしはしあらはれて
見ゆともしらすかりのゆくらん
進藤ひて子

さびしさにねやを立ちいで空みれば
くものいづこかなのるかりがね
輕部壽子

ひと方のくもゐはるかになきつれて
こゑもあはれにわたるかりがね
大谷あや子

ひさかたの月かげかくすくもまより
こゑもあはれにかりぞなきゆく
長谷川さだ子

もれ出つる月のひかりに見ゆるかな
くまをわたるあまつかりがね
伊勢さみ子

つき見んと庭に出てつる折しもあれ
くもまをわたるかりのひとつら
高橋りつ子

かりがねも雲まかくれのこゑのひねそ
ふるさとしのひなくねなるらん
高井孟子

うすすみとまかふかたなき雲間より
こゑはる／＼とかりなきわたる
小島みち子

かりがねの過き行く方をみわたせば
つらもみたれすくもにまぎるゝ
小島さた子

秋かせのやゝ身にしみてきのふけふ
くも間に漏るゝはつかりのこゑ
田中つね子

はるかなる雲間をゆくはかりがねの
はかせみにしむあきのゆふぐれ
吉岡ひさ子

秋のたにたちいてゝけるなりからに
くもまをわたるかりのひとむれ
岩田秀子

何かたへ誰かたまつさをいそくらん
くもよりくもにわたるかりがね
牧いつ子

み空ふくあらしにたえしくものまに
あきをかなしむはつかりのこゑ
末次民子

雲間もるゆふつきかげのさやけさを
つけてやわたるあまつかりがね
中川敏子

おもひわひ友まつほどなくさめて
くもゐのかりもなきわたるなり
間宮道子

をり／＼はくものほかへと天つそら
かりのなくねはへたてさりけり
高市さし子

かけうすくあはれもふかき月のよの
雲間もりいつるかりのひとつら
下元もと子

たちをひく雲のはたてをみあくれは
あまつかりがねいまわたるなり
白石むめ子

ゆくかけの月もくもぢにかくろひて
見えみ見えすみかりのさわたる
青木きん子

ひさかたの天津みそらを仰き見れは
くもまかくれにかりなきわたる
遠藤まん子

くもまよりおとつれもらすかりがねの
かけ見まほしくおもほゆるかな
千村まつ子

打ちむれて雲居はるかになくかりの
こゑにそあきのふかきをはしる
橋本辰世子

てる月をくまなすくものたえまより
ほのかにもるゝはつかりのこゑ
千石素子

ひさかたの月もれいづるくもまより
はつかりがねそとほくきこゆる
高田さと子

柴の戸をあけていさ／＼くやしきは
くものかりのこゑのみにして
青木たき子

きのふけふ待ちにし物をなさてかく
くも間かくれにかりなきわたる
林久子

なつかしきわか故さとのたよりかも
くもまに名のるかりのひとこゑ
香川頴子

誰かやとにたかたよりかも見え隠れ
香川里子

くものうへ行くあまつかりかれ

こさつてし人は誰さもしらくもの
たえまに見ゆるかりのたまつさ
吉岡歌子

雁かれはいつちゆくらん雲まもる
ゆみはりつきにこゑのきこゆる
坪内晴子

むらさめのはれまに月のかけさえて
くもになりゆくかりのひさつら
中田豐子

ふるさとのたよりまたるゝ夕まくれ
くもまはるかにかりかれのなく
寺尾まさ子

むれて飛ふかけは見えねさくもまより
さやかにきこゆはつかりのこゑ
山本常子

うす墨のくもうちなひくおほそらに
つきまちかほにかりそなくなる
山本のふ子

なくこゑにうちいてゝみれは月高く
たゝよふくもをかりのひさむら
加藤さく子

風さむみまきの戸さゝすいふくれに
くもまをわたるはつかりのこゑ
磯野こさ子

むらくもの月をはなれてあり〳〵さ
かけ見えそめつかりのひさつら
北原季子

友よはふこゑをのこしてうきくもに
おもかけきゆるあまつかりかれ
長松かれ子

つれて飛ふかすはいくつかしら雲の
あたりかすかにかりのこゑする
都水はる子

はしゐしてふるさとをもふ秋の夜に
くも間をかりのなきて過くなり
目黒佐喜子

むらさめのはれてものころ浮くもの
たえ間にみゆるかりのひさつら
羽室象子

なくれさへいさゝかすかになりに鳧
をちのくもまのかりのひさつら
魚住愛子

なく聲はさやかなれさもかりかれの
つらしやくもにみえかくれして
西内ため子

めつらしき初かりかねもあきのよの
くものうへをそなきてわたれる
亞水谷子

夕くれにたゝよふくものたえまより
ほのかに見えてかりはきにけり
金森俊子

むづましくつはさかはしてさふ雁を
へたてゝみするあまつむらくも
秋野つゆ子

月かけのなかるゝそらにわたしたる
くものかけはしかりなきわたる
齋藤よし子

初かりはいつこのささをたつぬらん
世をうきくものなかに入りつゝ
齋藤きく子

むら雲のたえまに見るはすがたさへ
こゑさへうれしあまつかりかれ
田中殿子

さやかなるなく音さ共にいましはし
くもぢに入るなかいのひさつら
皆川清子

夜をさむみれさめてきけは哀れなり
くもまをわたるはつかりのこゑ
秋山秀子

聲のみはさたかにきこゆはつかりの
つはさはくものなかにかくれて
由井藏子

ゑたくみの筆もおよはしうすすみの
くものたえまをわたるかりかれ
尾花露子

たちまよふ八重の雲路をわけきぬさ
こゑかきそめたりかりのひさもし
岸なみ子

ひさかたの天つみそらをなかむれは
くもまほのかにわたるかりかれ
山本さし子

聲せすはたゝおほそらのくもさみん
うすゞみにかくかりのひさつら
伊東壽子

あかつきの空にのこれるくもの間を
木村萩子



なくかりの聲もはるかにへだゝりて
　こゑもかすかにかりわたるなり　小林文子

なかなかにちぎり深きはかりがれの
　つれそきはゆくくものあなたに　野田郁子

立ちいてゝ聲するかたをながむれは
　くもふみわけて訪ふにそありける　梨本信子

淋しさにながむるくものたえまより
　くも間にのこるかりのひとつら　大村すが子

天のはらたなひくくつをかきわけて
　ひとつらみえてかりのなくなり　高石登代子

久かたのあまつくも間にこゑはして
　いつこゆくらんかりのひとつら　高橋かれ子

むらくもに月夜ながこつ折しもあれ
　田の面におつるかりのひとつら　日高かず子

打なひくくもにすかたは見えねとも
　そらにうれしきはつかりのこゑ　畠山香代子

一こゑはそれかあらぬか姪の見えし
　はつかりかれのこゑきこゆなり　長山ていこ子

まちわひしこゝろや空にかよひけむ
　かりのつばさにかゝるよこくも　長山てる子

霧すみやにしみいてけんあまくもの
　くもまなもるゝかりのひとこゑ　原田雪子

ひるかたの　間はるかになくかりの
　ながにつらなるかりのたまつさ　橋本さよ子
　こゑはのこりてきえにけるかな

十月五日兼題　晩秋田家を訪ふ

天　備前國和氣郡閑谷　西艶子

稲葉そよぎて、秋風の吹き初めしは、未だ昨日の如く思ひつるを、今は早、大方刈入れられて、田の面の淋しげなるに引かへて、家の内こそいともいとも豊かげなれ。一日、夕のそゞろ歩きせし序に、近き邊りの田家を訪つれぬ。庭も門も、さながら稲に埋もれたるが如き中に、或はこぎ或は束ねなどしつゝ、幼き子等に至る迄、かたみに助け合へる様、美しきまで樂しげなり。「さてもうるはしのもみや、今年はまれなる豐作とこそ聞きつれ、さなりや」と問へど「あな能くぞ來ませし、かく取りちらして、入らせ給へと云ふべき方もなし、ゆるさせ給へ、實に今年は心を籠めし甲斐ありて、かくと能く實のり侍りぬ」。と答ふるも、いと嬉しげなり。「げに御身達が忙がしげなるこそ、やがて世の中の樂しき基ならめ。さるにても、今日迄の心盡し、そも如何ぞかりぞや、其を思へど、たとへ一粒の粟なりとも、なぞれろそかに思はるべきや」と云ひつゝ、落ちたる穂房ひろひ上げて、かたへのむしろに入れたるも、眞心なりや。

地　羽後國平鹿郡淺舞町　谷口婦佐子

久しう音づれなければ、れぼつかなくて、妹どもをうち具して、淺茅が露を分けつゝ、田中の庵なる乳母が

り訪ひぬ。乳母よろこびむかへて、とある一間に請じぬ、垣根の千艸の花は、やゝうつろひぬれど、前の畑の蕪菁大根は、いとあをうみえ、後の畑の芋も牛蒡も、いと高うれひたちて、いとをかし。田面の方を見出せば、背にあまるばかり、たりほのいねをれはせて、一年をうたひつゝ、駒をひきてくる賤の男あり。又我たけにあまる稲の中に入りたちて、實のりをよろこびつゝ、かりとる少女もありて、とり〳〵にをかし。しばらくありて、乳母栗梨などに、酒うちそへて、もちいで、これはかの木のなり、それはその木のなり、この靑豆はうばがうゑつるなり、又この新しばりは、いとあまけれどなどいひて盃とりてすゝむるまゝに、うけてのみくふほどに、いつしか心ものどけくなり、かの仙鄕とかにいたれる心地してかへるもうち忘られてなん。

人

東京四ッ谷傳馬町一丁目三十七番地　目黒佐喜子

扇にのみ親みし夏はとく過ぎて、衣手寒き秋とはなりぬ。昔召使ひしはしための、今下總の邊りに住むが、此程音づれて、田舍の秋のけしき見に物し給へと勸むるまゝに、思ひ立ち、一日、日影長閑に、心地すが〳〵しき朝、姉君と袂を連ねて、家居を出でぬ。行きゆきて、目ざす里わにかゝりつ。見渡せば、千町田の晩稻、たわゝに實のりて、赤う色づけるあり。はや苅り取れるあり。豐年の姿いとめでたし。あはれ、かく迄にしつる田子の心つくし、いかなりけん抔、語りつゝ行く程に、生垣結ひ繞らしたるあたりに、稻穗夥しう掛け干したる家あり。門邊に、蝗追ふ童の、此方を見て、慌たゞしう内に入ると見えしが、即て出でむかへしは、はしたためにて、嬉しげに請じ入れぬ。都の客人の來ませりとて、近き邊りのうなゐ等、軒端に集ひ來て、見るもをかし。己れは、亦此里の景色を珍らしみ、端近う出でゝ眺むれば、田の面に音づる秋風に、から〳〵と鳴子の音して、さとたちたる群雀の、行くへは一村茂る向ひの森に消えぬ。彼處は何處と問へば、鎭守の社といふ。脊戸の方に、實のりたる柿の實、大方落しぬとればしく、疎らにはあなれども、熟みていみじう赤く、荒れたる軒を照らせり。稍くや鴉の來て啄み初むる折しも、さと吹きくる風につれ、軒端の栗の、はら〳〵と落つるに打たれて、慌てふためき逃げ去るも興あり。亦童が案内にて、裏山に木の實を拾ひ抔しつる間に、調じやしけむ、栗の飯に、茵の羹、畠の芋に、川の魚、さては手造りの蕎麥なんどとうでゝ進む。心づくしの程、いと嬉し。さて日も暮るゝめり、いでや歸り路につかんと、姉君の促し給ふに、いかでいぶせしとも、今霄は枉げて宿らせ給へと止むる袖を、あながちに振り拂ひつゝ、また來ん年の秋を契りて都に歸りぬ。

（以下原稿到着順）

佐々有鄰子

くれ行秋は、みるものみなさびしきぞつれなるを、ひさり足引の山田のはらは、わせおくていろつきそめて、御年の神のみたまがふり、立ちのぼる朝な夕なの霧のまがきのうち豐かに、老嫗もろともにこゑうるはしく今年は去年よりも、風に雨にかゝるわざはひなく、作りさつくりし田なつものは、八束穗にしなびて、かすゆ酒も心よくすゝらるべくたのしき秋なりとこうち、かたるかきくも、また田伏のいほを訪ひし今日のたのしき姿が、家つとになんありける、

新嘗につかへまつらふ八束穗の
金城の小田ぞゆたかなりける

澤田十萬里子

日ごろ學のつかれをやすめんとおもひて一日郊外にいでけるに、稻穗打たれて色づばみたる田の中に、人おほく稻かる其さま、利鎌ふりていとも心やすげなるが面しろければ、しばし立ちてみぬ、おもひめぐらせば、去年のころ、某學校を卒業してわかれし某氏は、農業をいそしむよし、雁のたよりに音信あり、今年も稻刈のもなかとおもはるれば、日毎にかせぎものすらん、あな浦やまし、されば、秋の野ほどをかしき跡はなし、いろいろの草花、くさぐさの虫聲、いづれか目をよろこばしめざらん、いづれか耳をたのしましめざらん、わきて、女郎花の夕露になまめき、霧のまがきにへだてられたるゆふに、人のみるめもくるしきは、おもひなしにもあるべけれど、へだてなくかたりがはし、たのしき舊友の心をおしはかり、まことになづかしく侍り、さて學友はあれども、日淺くして、心のへだておほく、うちとけたることもなく、稻葉そよぐ秋風の音をききても、妾が學業のいまだ實にならぬこと面なけれ、ものはみる人の心にうつるならひ、田家の秋は、千草の花錦をさらして、ねもいはれぬ景色なり、よりておもへば、涙の色の紅となげきても、なほ色あさしとかこちけん人もありけり、妾は世の中のたのしきふしをのみしりて、いまだくるしきことをしらず、いともかしこき聖代に生れあひたるは、こよなき幸にこそ、かひなき女の淺き心もて、いかで晩秋の感を書つく

さめや。

渡邊のぶ子

何となう物さびしき夕、一人つれ／＼なるまゝ、年ひさしくもあふざる友がきの、一人田家にすまふをおとづれ、共にたのしくかたらまほしう覺ゆるまゝ、賤がふせ家をあとにして、さやけき月をたよりに出で立ちぬ。をりしも、秋の暮つかたの事とて、をちこちにうつ擣衣の聲など、なにとなうあはれを覺ゆ。しばらくして、友の家に至りぬれば、あなかなしきかも、いたはしきかも、庵は最早くちはてゝ、庭の面は秋草おひしげり、うらがれし尾花の露いたくおきて、おぼつかなく立たる、おのれあるじ顏にもなく松虫、いとつらにくう亦うらやまし、いかなれば、かく二なう交りたる友の、いつのまにうせしか、あまりの事に、しばし其所にくづれふすまゝに、耳そば高うひゞききたるあかつきの鐘におどろき、みあぐれば、最早東の空白み渡りたるに、いざさく家にかへらんと、たち出れば、はなれかれてや、我をとゞめがほにまねく尾花に心ひかれて、亦なくしめる我袖に、おぼつかなくも、すみ渡る秋のかたみの有明月のやどりたる、いと／＼あはれなり。

甘良よし子

己れ未だ幼かりし頃、こよなう親しく交はりし友の、末たのもしき身に入らせられながら、浮世を秋とかこち給ひて、柴の戸細に住ませ給ふをいと／＼なつかしう思ひて、園生の草もかれ／＼なる、さびしき秋のくれつゝ方、なく虫のねのさそふがまゝに、畔路つたひ訪ひぬ。稻葉にさやぐ夕風に、折々きこゆるなるこの音、雁がね遠くなき渡りて、れのたね／＼のさよきぬた、いと淋げなる月影に、賤が荒家もあらはにて、霜のみしらき路のへに、さき殘りたる白菊も、くれゆく秋をぞごゝめ顏なる。折しも聞ゆる琴の音、それをしるべと近づけば、あないたはしや、かなしやな、たゞ名ばかり草の庵に、ともす火影もかすかにて、ふすまにうつるみ姿は、まがふ方なき友にこそありしか。

稻原すみれ子

鳴く虫の音もよわりゆき、木々の葉さへ霜に枯ゆくてふ秋のくれ、思ふ

とち打連れ、田家の景況など探らんと、田舍にものしぬ。田の面〳〵は刈り穫たるらし、獨りかゞしのたちこちに、のこされたるなどいとをかし、間近く見ゆるは農家ならんと、近づきみれは、門にこきたる稻の跡らし。うづ高く積み上げし藁、豐年の樣みえてたのし、垣根には、かをりよき菊の一本二本、咲のこりたるなど、あはれに床し。しばし休ませてよと、内に入れば、ふくらかなる翁出で來りて、むさけれど、いとひ玉はずばと、靜けき一室に案内して。やがて、田のさま何かとたづねそむれば、翁は、滿面溢るゝ計りの喜びを呈して、今年はあらき風さへ吹かず、虫のさはりさへなくて、殊の外順氣よかりし爲、稀なる豐作なりき。村民はみな大悦にて、近き中に祝宴をさへ開かんとなし侍る次第なりと。言ひつゞけぬ。そはうれしき事よ。民の富は國の富とか、大君の御心も平らかに御思召させ給ふならめ。年々年の初に、祈年祭を行はせ給ふとかや、そは四時順序年穀豐熟せん事を、いのらせ給ふためなり、御惠みの深き、今更申すも畏こし。翁も國土を守りて、ひたふる豐熟をいのりてよ、これも忠義の一つなりなどゝ、語り合ひぬ。やがて時も、いたく移りければ、又の日と、暇を告げて、家に歸りぬ。

岩橋きみよ子

くれゆく秋の物思ひにしづまむよりは、野邊に出でゝ、田家の景色に心を晴らさばやと、おもひ立ちて、よく晴れたる日の午後の二時頃より、ことし六つなる弟の手をとりて家を出でぬ。細き畔みちを、たゞそろそろと行くうちに、いつか鎭守の森もうち過ぎぬ、村の境の橋をわたればこゝ見渡す限り一面の田畑にて。あちこちに見ゆる茅屋より昇る煙の色も濃し。さては、ゆたけき御代のさまもおもはるゝよ。こなたの田に落ち穗に群がる雀の中へ、弟は小石一つ拾ひてなげやれば、はつと音して喧しく逃げ去るもをかし。やれ寺の庭のほとりにたゞずめば、佛に供ふる爲めとにや、白菊さきのこり、讀經の聲もさびしく聞ゆ、伯母が家は、こゝより程近ければ、序ながらおとづれしに、庫の前には、多くの男ども打ち集ひて、口々に秋歌うたひつゝ、籾ひきするあれは、米を俵に入るゝあり、俵を倉に運ぶもあり、其のさま樂しげなり。伯母は、嬉びて、實り祝ひの餅なりとて、弟に與へくれぬ、弟はほゝ笑みつゝ、好御家土產得たり歸りて姉に誇らはやなどいふも、あどけなし。こゝを出でゝ頃は、夕日は西の山べを照し、紅葉したる森より、なかしき聲立てゝなく鳥飛ぶ、そのけしき、畫にもかゝれまじくや、日のまたくくれぬ間にと、弟を背負ひて、家に歸りぬ。

佐藤喜代子

降りみ降らずみ、打續きたる此日頃の秋雨、今日はいとすが〳〵しく晴れて、そゞろに心も引立ちぬれば、はしため打連れて、そこはかとなく心やりにゆく道すがら、田畑の面を見渡せば、くさ〳〵のたなつ物、皆旣に實りて、刈り取られしかば、落穗などいさる群鳥の、をかしうたゞずまひて、物淋しき風情なれど、中々に捨てがたき眺めなりかし。されど、山邊はさぞないみじうめでたからんとて、猶あぜ道傳ひにたどる程に、山陰に、そこはかとなく農家あり、束ねたる藁もて積み重ねて、ま垣となし、いと珍らかに、あまり目なれぬ家とて、一度訪ひ見まほしう思ひしまゝ、先づはしために、あないを請はせぬるに、内より主人と覺しき婦人、何やらんとゝめきつゝ出で來り、怪しげに見詰めらるれば、志か〳〵とことわけを語りて、一言二言打語らふ程に、話なか〳〵深みゆきて、いと面白く、夏の暑は近年稀なる烈しきなりしかど、そが爲めに五穀のみのりも、亦近年稀なる豐作にて、いと心安く侍りなど。いと悅しう語りつ。げにさこそありつらめ、家居も諸所新しく修繕せられて、常には衣服もみすぼらしきを、今は淸らなるを纏ひ、子供達も皆著飾りて、なべて福よかに見受けぬ。まいて、未だ小田に掛け置けるます穗の稻は、みづ〳〵しく實りて、丈長く、是見よがしに示めり。さていづこもかくゆたに富みて見ゆめれば、これ偏に大君の深き御惠の露にうるほひて、蒼生もかく安らかにおふしたつよと、かしこくて、又農夫たちの春夏のいそしみの程もおしはかられ、一向深くかまけられぬ。かゝりし程に、日も西山の端に入りぬるよと、はしためにおどろかされぬ。されば、今別れの袖の殘り惜しけれど、近きわたりにさふらひ來ぬべければとて、又の日を約して、家路をさして返りぬ。あはれ〳〵、秋の暮つ方

ぬなかやなれさつるゝはいさ面白くめでたくて、心もゆたにすが〳〵しくなりぬるになむ。

堀　いさむ子

大空も秋の別や惜むらん、やれたる軒のはせなにさへ、ふる雨の音も淋しく、垂れこめて獨り文よむ窓の内も、なか〳〵にいぶせさのみまさりぬるを、けさはみ空よく晴れ渡りて、心すが〳〵しくなりしものから、さぞな外山はながめなかしく、日頃のつれ〳〵なら慰められぬべし、いざやさくたづれてんさ、頓に心の浮き立ちて、思ふさち三人四人そゝのかして、心のゆくまゝ、共にすゞろありきしぬ。道すがら、くさ〳〵の話に心入りて、いかなる所をたどりけむ、更にわかれど、さ見れば、こゝは賤が山里にて、此處彼處に、家居構へられ、大方は刈り取れる畑にてまがきを作り、すべてみやびたるをませり。千町田の稲は、もはや刈り取られて、目にさはるべきなく、疎疏たづれて、村雀はたゞ雁がれのあるるなど、なか〳〵におもむきあり。遠方は、木々の木葉、皆からもみぢて、紅もゆる錦を織り出し、うら枯るゝ野べの花薄も、哀れげに招き、鶉など高らかに叫ぶは、わきて珍らかになむ。さはれこゝに住める人々は、かゝるめでたき景色にも心さめず、秋の收穫の忙しければ、ひたぶるに生業に勤みて、刈り乾す稲をこきては、これを俵に入れ、畑のも同じく取り扱ひて、倉に納むるなど、日れもす夜もすがら勞働して、ゆめ怠らずかし。されば、今日も何處にても、高槌打つ音働く樣の忙しく、塵埃の間にありて、いさいたく汗にあねたるは、他の見る目も苦しうなむ。あはれ、農夫達は、春夏のかせぎ空しからず、かくも豊に實れる秋にあひて、五穀は、倉にみち〳〵て、こゝらの財を得るなめり。さるに、妾等は、少しばかりの勉めに倦み怠るは、げに〳〵うら耻しき限りなりかしさ悟られてこれよりは、きはめてこれにあやかりて、ひたぶるに勉むべうと契りつ。かくて、夕陽に映ゆる紅葉を折りかざしつゝ、我もいつかはさ勇みながら、塒求むる鳥に送られて、かへさに就きぬ。

佐々敏子

いつさても物哀ならぬ折はなきを、秋も暮はつるころなれば、草むらにすだく虫の音も、夜ごさによわりゆき、錦なす紅葉も、あらしの風に誘はるゝなど、哀になかしうなん。ある日の夕暮に、稚き弟妹を連れだちてそゞろに田のあぜぢをつたひゆけば、やゝ人遠き所に、靜かに住みなしたる家居あり。あまりのゆかしさに、外より音なへば、こなたに入り給へさ云ふに、しばしそこにやすらひぬ。見渡す野邊は紅葉して、龍田ひめの織りなせる錦も、かくやさばかりうたがはれぬ。一方には、鳥海の高峰、恰も白扇をさかしまにしたる如く、ねも云はれぬけはひにて、何さなう仙境に入りたる心地しぬ。日もやう〳〵西に傾きて、清らかなる月影、ほのかに出でたるに、猶きて別れを告げたどりくれば、そこらの露のきらめきわたるに、虫の音さへ添はりて、ひたすら今昔の感に堪へれば。

世の中を常なきものさすゞ虫の
　　われも音になくこの夕へかな

さ口ずさびつゝ立ち去れば、衣の裾もいさつゆけき名殘をさゞめぬ。

美濃君子

見渡すかぎり、野も山も錦おりいでゝ、月の花にも増れりさながめられし紅葉も、色やゝあせて、風にさそはれ、菊もはや盛りを過ぎて霜にかじけ、庭にさはれし萩も、みやび男をまねきし尾花も、うつろひつ。空に立ちまよふ時雨の雲は、うれへを帶ひて、暮れ行く秋をうながすかさおもはれ、むしのいのちさたのめし庭の、おくての稲もかりさられて、そぼつあはれに立など、物さして悲しみをそへぬそなき、野邊の細道わけ行けば、こゝろしつみゝ、歩みもはかどらず、一足こそやすみ、二足には立ちさまり、やう〳〵心させる友のいほにたどりつき、案内こはんさ門を入れば、いざひろき庭も、さころせきまでにかり穂取りいれ、いへのこはした等は、今年のみのり豐なりしを祝ひつゝ、或はもみすり、或ははたわらに作るなど、おのがじ業にいそしめば、外面のさひしさには似で、こゝのみは春がさまでににぎはへば、我も先の淋しさいつしか、去りて、いさ樂しく見入るそばより、よくぞ來ませる、いざさしきへさ、友のいざなひ給ふも、我ははしゐしながら、君のすがたのあまりにやつ

〳〵しけれは、はしたさのみ暴ひきど打笑へは、今日ははしたになりし心もてわるなへば、さ見らるゝもいかりはせしなど、友も打興じつゝ、はや足洗はんさなし給へは、いさなき時に、いつまでも長居してさまたげんは罪ふかく、且つは要用の話さてもあらされば、今日は、これにて立ちわかれ、またおさづれなんさちかこさしつ、友のひきさむる袖うちはらひて、もと來し道を家路につきぬ。

日吉あさ子

秋のならひさて、よろつさう〳〵しく、日ぐらし親しむ文机に、雁の落せる玉章は、田舎なる友の許よりなり、眞心こめし文の奥に、「門田なるおしれも今はかりはてゝ、菊に紅葉に君そまたるゝ」さの歌さへありければ、なつかしさ耐へがたく、明日の休みに訪ひてんさ、父母の御許しを得うれば、暮るゝを待つ間も、いさもどかし。もみちはの赤き心をしるべにて、明日はたつれんなつかしの君、鳥より早く起きいでゝ、有明の月影をふみつゝ、程近き停車場に至り、間もなく發する車にのる、市中いつしかうちすぎて、つゞく田の面のこゝかしこ、刈りのこしたる晩稻の、黄金色に實れる、育てし人の喜びや如何ならん。山も追々近づきて、立田姫の織りなす錦の色、千々に見ねそむる頃、車は志ざす方に停りぬ。百草の花も、はや移ろひて、招く尾花が袖のもさに、やゝうらかれてなく虫の音など、なが月の野路の景色に心さめつゝ行く程に、はや友が家の門に至れば、遊ひ居し妹君の、早くも認めて、かくさ告ぐる聲さ共に、かけいできぬ。互の心を、取りかはす手先にいはせて、君が居室にさもなはれ、積る物積りに時を移しけるが、談しのみにてはあまりあいなし。いざきませ、都におくれし草の家の秋をしろべせんさ、うながされて立ち出づ。庭の面の、取りつくろはぬ様床しく、そめつしたる木々の紅葉、受けて待つにもあられど、立ちよる袖に、二片三片ふりかゝれるうれしきに、籬にさける菊の花、人のたくみにけがされず、天然のまゝなる香、げにもちさせの色なれや。あはれ、今一月早からば、萩の花褻色あせず、八千草の花も盛りなるべきに、惜しき事をしてけるよさかこつも、返らぬ愚痴なりや。酒あたゝめし衛士のみやびにあられども、木の葉なしされに、腰折などよみ出でゝ、時をも忘れ居しが、いつしか木影うす暗くなりしに驚きて、いざさて、歸らんさすれば、明日は程近き山へ、茸狩にものせんさ、引やさめらるれど、務ある身の、暇なければ、又の逢ふ瀬を樂しみに、進まぬ足をひて立ち出つれば、いづくも同し秋のものさひしき、所々のきぬたの音さへ身にしみて、立てる案山子の袖さむげなり。

根岸里子

秋もいつしかふけて、今はさかれ行く虫の聲聞きつゝ、一日、相知れる田家をおさづれぬ。家居小高き處にして、見わたしの田面のをしれ、そよ吹く風にちらなびき、足穗にさわくむら雀は、鳴子のつなにおどろきて立ち賤の女は刈りにし、稻穗さはに脊負ひて歸り來ぬ、みのりいかにさ問へば、去年の二倍さてほゝゑむ。見れば、八束穗は富草の名もうべしこそ、刈りあげし賤の女のよろこびいかに、はた青人草のよろこびは、心たのみのかず〳〵つきぬなるべし。げにや、春耕して秋收むるは田家ならひ、今は樂しき賤が心の奥の思ひやられてなん。されど、春はあら田すきかへし、五月雨しさゝに早苗取り、やくが如き日に夏草かりくらし、一させの苦しみを重れて、さてこそけふのたのしみをば得たるなれ。あなたふさしや。

中山登美子

いつしか秋も半ば過ぎ、既に終をつけなんさして、虫の音もいさあはれに、木々の紅葉も日毎〳〵にに散りはてゝ、いさゞ淋しく、千ゞに物思はるゝ折から、心あひの友にいざなはれて、田つらのいほにさ散歩に出でかけぬ。山の麓には、もみぢ葉のちり積りていさうつくしく、かたへには小さき柴のいほりありて、なか〳〵にみやびたる景色なり。豊なる世のしるし見ねて、稻いさよくみのり、かり穗の稻、或は刈りのこりしもあり何れも、近年稀なる作なりさ、翁の物語を聞きてもいさゆかしく、日頃のうき心も、けふ斗りうれしく、氣いさ晴れし事はあらしさ、道　の草花を取りつゝ歸りぬ。

坂田きみ子

吹く風も身にしみまさり、なく虫も聲やう〱かれて、心なき身にもなどのしび出でつゝ、露霜にぬるゝたもとをふりはへて、田舎なる友がりとぶらふ。所々のくさ花は、はや霜がれて、木々のこずゑいろづけるもをかし、門邊につゞく田ごとに、男をみなむれ立ちて、ふしさへおもしろくうたひながら、たしれ刈りつみつゝ、今年の秋は豐かなり、去年はいかになど、のゝしりあふこゑ、聞くだにもうれし。實にきのふこそさなへとりしかなど、いとしづかに打ちとけて語らふも、御代のめぐみのおもひしられてなん。折から、垣ほの菊は、くさ〲に咲き出て、ひとりうつろはぬをゆかしく、年ある秋の幾千代こめて、こころぞがほにかをれるぞをかしき。

名取正代子

頃しも秋の末つかた、田舎なる友がり訪はんとていでゆきぬ。ちまたにのみ住みなれし身には、田舎住ひのなか〱に心地のご〱しう、めづらかにこそおぼゆれ、さて、外面の方をながむれば、幾千町の田の面は、新稲皆熟して、刈り取るべくなりぬるに、今年はわきて、みのりゆたかなれば、ほにほのさきいでたりなどゝ、よろこびのゝしりつゝ、をちこちに稲刈りとる賤の男、そをかたげてはこぶ賤のめの、むつましげなる、よそに見るすらいとたのもしうれしげなり。實に、きのふ早苗とりつる其の初より、根をかため、ことぐさをかりのぞき、あるは水をはかり虫をいとひ、野分風の難もなかれかしと、五月雨の雨にぬるゝ日より、三伏のもゆる暑さにも、我身の辛苦をかへりみず、ひたすらに、つとめはげみて、秋のみのりをいのるなりけり。かくて、つくられたる其のよねは、是我國の常の食にて、われらが一日も欠くべからざるものなめり。さるをかゝる百性の辛苦を見る〱、いたづらにうまいして、世の爲に一のなす事もなからんはは、見ぬわたる田の面に立てる、案山子にもおとりのべし。いかで、おの〱、なすわざをつとめはげみて、ゆたけき秋にあふ如く、楽しき春の心の花もさかせてしがななどゝ、今更にさとりたらんは、いともをこがましくや。

三　予

いと親しき友の、さいつ頃より、さはる事ありて、山里に住ひなせるを、訪はむとていで立つ。頃しも、秋の末つ方なれば、千町の小田に、うち靡きし稲は、大かた刈りあげられて、こゝかしこ、晩稲の三穗波ゆたかに、うち伏せるさま、いと美し。道のく〱、尾花の力なげに、打招くさま、おのが行く手のしるべするか、とおもはれて、いとあはれなり。このもかのもを見わたせば、萩女郎花などの秋の草花、色香も消ぬ失せて、はかなげに立てるに、野菊のいと白う清げに、咲き残りたる、花のさちめといひけむも、けにとおもはれて、いとあはれなるに、賤が伏尾の軒ちかく、柿の實の、いとあかく熟して、枝もたわゝに、なりさがりたるを、里のうなゐの、割竹といふものもちて立てるが、おのが來れるに驚きて、こなたさまに、見おこせたる、いとらうたけなりや。山のかひに、たま〱のこる紅葉さへ、やゝ色あせゆきて、物はかなくあはれなるに、賤の男は露にぬれつゝ、秋の納めにいそがはしく立ち働き、女は鄙歌うたひ、あるは、ゑみかはしつゝ、刈り上げたる稲をこくなど、るそかり暇なけなる身の、わびしともおもはで、いとたのしけなるは、年豐かなるしるしなめり、とおもふにも、大君の御恵の露の深さ、たしはかられてなむ。

泉さい子

ながからぬ秋の日に、打案じある學びの窓を、かしましく、ゆきかふおとに思ひは皆打やふられ、さらば日頃こたしき久子の君をたづれんと、思ひ立ては早午後四時なり、されど、田舎とは聞たれ、こゝよりはほど遠からぬところなれば、車に助けられつゝ、ほどなく久子の君の家近くなりぬ、向ひにむれ、高くそびぬ、木立ものふりて、なに見ゆる山は、名たゝる山にや、松杉枝をましへ、藤かつら這ひろごりて、わざとならぬ住居のさまいともめでたし。案内しつれば、久子の君母とじもいで迎ひて、いざたか殿にて、今宵は月をめでゝかたがはやさ、ねもごろにもてなさるゝまゝ、のぼりあがり、見わたせば、みやひをむれとして作られし築山のさまはいふべくもあらで、千まちのいな田ゐけれゝ、見わ

たすかぎり目にふるゝものはなへてあはれを催さぬはなし。折からさしのぼる月のさやけさに、久子の君の心してかれて出たることの志らへのたへなるに心もそらにすみわたりて、心地醉へるがことし、實に千秋のあはれを千歳の友の舘に迎ひて、今宵仙界にいたれる心知して、ふくるも志らてあかしたり、嗚呼たのしき此夕べ、あゝたのしきひなの住居かな。

吉岡歌子

何歳も同しと云ひけん秋の哀はさる物から、田舍の住居如何ならんと、長月の末つ方、祖母の君を訪ひ奉りぬ。行く手の細路に生ひ茂る尾花が袖もやれはてゝ、吹く秋風の肌寒く、小田のそほどの、笠破れ、弓矢も持たず、悯げに刈田の面にたゞずめる、昨日の勢何處にあらん、雀を追ひし影たにもなし。實にや、今年は年ありと聞きしも著く、千町田の稻は、門邊に山を築き、人の心も賑はゝしげに見ゆるもうれしく、共に語らふ折しもあれ、遠山寺の鐘の聲暮れぬと告げて、茜さす日も山の端に入り果てぬ、あたりに家なき田中の庵は、晩秋の稻のほのぼのと霧に匂へる月影も宿もる爲と覺しくて、物哀なる夕暮に、風のまにまに誘ひくる里の砧のたゆだゆなる、夜寒の風に鳴き渡る雲井の雁の聲々、おどろおどろとふみならすからうすの音も、物々しう、云はん方なく淋しきに枕につけど、きりぎりす鳴く音哀に聞きなれし清水の音も物すごく、軒端の荻を吹く風も身にしむばかりわびしくて、いもいれ難き小夜中に、紅葉踏み分け鳴く鹿の、妻こふ音にや物悲しく峯よりおろす松風に、遠くて近くきこゆるなど、秋の習といひながら、とりあつめたる物悲しきはまた一入の住居なりや、

世はなれし田中の庵にやどりして
夜すがら物を思ひけるかな

寺尾まさ子

朝な夕なの置く霜にて、木々もやうやう色つきぬれは、なつかしかりし、秋風も、身にしむばかりおぼゆける頃、我家に、年久しくめしつかはれて、今は片田舍に賤の業をいとなむ嫗のもとより、秋の取り入れもやゝかたつぬれは、遊ひかてらことよとの音つれを、雁にたくへておこせたりければ、物さびしかりつる折から、心うれしく仕度もそこそこに立ち出でけるに、秋のくれとはいひながら、日よりのいとうらゝかさに、てふの二つ三つまひあそひて、田の面は大方いねもかりさげたるあとの見ゆれと、たまには未だかりつくさぬ所なども有りて、田舍人のしてくのほともさつせられ、我が身のをこたりかちなる事のうらはつかしく思はる。道のへの八千草は、花の盛りのかげもなく、霜におきふすすがた、まことにあはれにて、春ののどかなるにひきかへて、たとへん方なくさびしきありさまを。ひとりなかめ、たどりつゝ心ざす家につきぬれは、おうなの、ゑましげにむかへ出でつゝ、心をつくしてのもてなしに、さびしかりつる事もいつしかわすれはてけるもをかしや。家には、くさぐさの取り入れ物つみ有りて、にぎはしくこれにつけても、みやこ人の、ゆめにも思ひまうけぬ一年の心つくしのほども見ね、けに上つ上より下ざま迄の、つゆの命をつなくば、此の賤女の業よりと思へば、いともたふとく、一日たりとも身をあらけくば置く まじきものなりけりと、心うごきてなん。

佐久間八重子

いとゝ勝れぬ所ありて、醫師に藥をとひしに、寧ろ、山里に遊びて、心を養へよと、勸められしかば、箱根あたりと思ひしが、久しう逢はざりし乳母の、こひしがりかば、幸ひ、思たひちぬ。汽車を下りてよりは、馴れぬ山里の徒歩とて、いとなやみがちに、やうやうたどつきぬ。そが家は、山を背負ひて、いと、かはらかなる田原に面ひ、隣家とて、一ツ二ツ、はるかに見ゆるのみ。折ふし、秋の晩とて、花と見し紅葉も、はや雨と散り、柿の實の、只一ツ、梢高く殘れるもをかしく。樝、團栗の實の、あやなしに打ちこぼれ、案山子の刈田に、獨さびしうのこれるもをかしく、菊、朝顏、鷄冠草などの、野分に吹きしだかれ、庭うちめぐる、萩の花のこぼれつゝあるもをかし。又、甌屢汙邪に刈り殘れる晩稻も、既や黄金しきよらむごとく、野邊又軒下などには、稻叢を堆く積みなされ、竿にかけ干さるゝには、雀の群がるもをかし。尙、門口、畔などには、藥の

うち干され、庭は一面に、籾の莚を布きつられて、足踏み入るべき地とてなかりき。今、門くゞるわらはを見し乳母は、やれ裳を手拭もて打ちすゝみ、あやしなる簡袖をきて、いと狹き帶をひきしめ、かひゝゝしく、稻扱きてありしが、打ち篩きて、迎へ入れぬ。わらはがしばし休らひけるうちに、家の人々は、擔籮を荷ひ、擔車を引きて、勢よく歸りきしが、忽ち、穰々として家に滿ちぬ。かくてある中に、漸々、暮れ行きぬれば、人々も打ち上り來て、例の禮もすみぬれば、先づ話さるゝは、今年は近頃に稀なる豐年なりとて、皆々打ち笑ひ、打ち興じつゝ、いと大なるいと赤き柿と、落栗などとり出でゝ、强ひすゝめ、いと好める芋、松蕈などを煮、新米の赤飯などを炊ぎて、あるじまうけして、くさ〲打ち語ひしに、ゆくりなう心浮きたちて、勝れぬ身も、いつしか悉を忘れて、秋としもなき心地なむせられける。しかはあれども、積もる話に、夜もいみじうふけて、圓かならねど、月影いとさやけく、をちこちにすだく蟲の音も、いとあはれに、そよと通ひ來ぬる風も、身にしむばかり、妻こふ鹿のなく音さへ、打ちそひぬれば、いとうらさびしけれど、流石は都に知らぬ趣なれば、なかゝゝにいとをかしく、醫師のすゝめられしも今ぞ思ひあたりてなむ。

北原季子

わが國、神代より農作いと盛にて、あしはらの瑞穗の國とたゝへられしもことわりなもされば、古へのものゝふなども、事の暇々には、鋤肩にせられし事もありときく、げに、穀物は大御代の寶にこそ。今しも晩秋の事とて、賤が家々には、庭もせに稻束つみ重ね、もみこかすもあり、するもあり、家の女の子男のこも、いとせはしげに、たくてのとりかたくづげに余暇なかりき。おのれかくせはしき中とは知りつゝも、明くれば雲井のそらに旅立ば、ねならぬ身の、しひても訪はんとは思ひなりしなり。されど田中の一閭の事とてたんぼ道まで稻刈おかれていなごうのよるべなきに、飛びうふ樣をかし、稻落さじと、すき間〱をたどりて、目ざしゝ家にはつきぬ。主人もいと祝ばれて、わがせに積りしちりはらふも忘れて、入口の方に誘ひぬ。やがて、釜のふたより、澁茶などもてなされ、しか〱の事物語が内に、粟團子、扱きび團子まゐらせむとて進められつゝ、つきぬ名殘の言の葉するに、今年の稻作はいかにとよふに、とりわきての豐年なりとうたふ。おのれ先づ祝ばれたりおもひ見るに、先つ年の凶作のため物價いよゝたかくなりまさりて、しも〱の民等は日枯にかれはてんとするに、今此事をきく、あたかも大旱に雨の如し、あなよろこばしき秋ならずやと、ふりさけ見れば、日ははや暮れ方になりて、賤の男の子ども、いと樂しげにもかとり藏むるもうれし。

降田槇子

久しう打ち絶ゑたりし友がりたとなふに、いたう喜び迎へ、母君諸共何くれとてなしつゝ、奥まりたる一間へ招じ入れられぬ。さて、互に隔てなき間柄なれば、打ちくつろぎつゝ、別れし後の事共も物語する内、ふと氣付けば、外ものいと賑しきに、何事にやと、やをら障子引きあけ見出せば、こゝは都はなれたる田舍なれば、家居いとまばらにて、あたりは皆小田なるが、その田の面の稻のみのりたるを、數多の男女のかり入るゝにぞありける。あはれ、昨日かも秋立ちて、稻葉を渡る風身にしむと思ひしに、いつしかふけ行きて、はやくもかり入れの時は來つる哉と、身の怠りの今更思ひやられて、さすがにうらはづかしうなん。そはさまれ、今年はみのり豐けしと聞つるが、げにも穗なみの大なる、常人の目にもつくばかりなれば、これ作りし人々の喜びや如何ならん。皆みましげに、さやかくさわぎつゝ、彼方此方にはせまはり、既にかりあげたるもあり。農夫のいそがはしき、此時に過ぐるなしとは聞けるものから、かう、目のあたり見るは始めてにて、かゝる有樣を見ては、ゆる〱物語せんもと何となく心おちゐず、且おのれもまた時を移さで、わづかにても勉めはげまばやと、さま〲にとゞめらるゝを、しひて家路につきぬ。

河野まさ子

年久しく召しつかひしはしためが、さるべき事ありて、故郷なる玉川にかへりしに、この程音づれありて、近きほとにぜひ來ませ、かきも栗も

熟しぬればとて、くれ〴〵も云ひおこせしかば、一日、はらからうちつれ立ちて、朝とくよりいで立ちぬ。先づ程ちかき信濃町なる停車場より滊車に乗る。人も馬も山も林も後に走るけしきのをかしきに、しばらくにして、立川と云へる停車場につきぬ。さてこゝよりあゆみをこびしに、都にはえも知られぬけしきの、いとあはれなるに、足のつかれも覺えず、とほくへだてゝ見ゆる草ぶき家根は、是ぞ志したる家にて、門には何やらん生ひしげる立木ありて、赤き花の枝もかくるゝ迄にさきたり。近づくまゝによく見れば、こは花にはあらで、いとよくみのりたる柿の實なりき。やがて至りつけば、人々いでむかへて、かれこれのゝしりつゝ、もてなすこと限りなし。最早正午に近ければとて、母は後なる畑に、父は前なる川に急ぎぬ。かくて、さま〲の饗應をうけしが、いざたまへ、少し外の方に御供いたすべしと、はしためなりし人のいふに、さらばとて、其言に從ふ。今日しも、秋の末つかたなれば、はたつ物は、いとよくみのりたるさまのゆたかにして、道のべは、　も知らぬ草ばなの、枯々になりぬる、いとあはれふかし。はるかにうちみやれば、もみぢせる木の葉の、風にひら〲とおつる樣の、いとさびしく、わたのきの白く清げのわたをはきたるは、わきて面白し。やがて、其の名も高き玉川の邊に出づ、流るゝ水はいと〲、清くまのあたり鮎のはしる樣など、いとめづらしといへば、來ん年は鮎狩にぜひきませなど云ふ。秋の日のいとみじかく、日は夕なれば、やがてまたかの家にかへり、夕げのもてなしを受く、漸くわかれをつげて、歸路につきぬるに、土産にとて、果物數多おこしぬ。かくて、立川なる停車場より滊車にのる頃は、全くくれはてさやけき月は、いつか　の端をはなれ　、車窓をてらすも、亦心地よかりき。

丸山郁子

田舍に住み玉ふ叔母君の許久しう訪づれ絶えぬるを、今日は空も晴れたれば、いざ今より物せんと、俄に思ひ立ち給へる母君に從ひて、朝まだきに出で立ちゆく。頃しも秋の末つ方なれば、金風は颯々として、肌の稍冷かなるに、さし昇る旭のかげは、やはらかに背を暖めて、其の心地よさ、いはん方なし。見渡す限りの田の面には、八束のたりほ、頭おもげにうなだれて、黄金の波をうたせたるに、其の穗末の露にきらめく日の光、えもいはれず。かく面白き野のけしき、見もて行く程に、ふと彼方の田の中に屈みて、稲刈り給ふ叔父君と、其の傍にて、刈りたる　を集めて束ね玉ふ叔母君の、見えたれば、やよ叔母君〳〵と、己のさけぶ聲に、ふり向き給ひて、思ひ設けぬ事とて、打驚かれつゝも、いたう喜び玉ひて、善うこそ來玉ひつれ、萬は家にかへりてとて、叔父君と共に、先に立ち　て行かるゝに、然らばとてゆく。我が從弟等の、邊りに遊び居りしも、喜びてまつはりつゝ、共に歸る。見れば、内には留りて守る者もなきに、門もとざさず、只年古りたる松の、枝長延びて、藁屋の軒を守りがほなるのみ。さるにても、田舍の心安さなといひつゝ、内にのりて、何呉と互にあいさつの言の葉いとしげし。己はしばしいこひて後、幼き從妹をそゝのかして、あたりの野邊をそゞろあるくに。こゝかしこに、稲刈る人々の語り合ふをきけば、今年は五日の風も十日の雨も、時に從ひて、稲のみのりいとよく、何處もなへて豐熟なりと、聞くぞ嬉しき。我等も、鋤鍬手にしてより、初めての實りぞ。此の豐年にあひて、我が大君の御惠みの露に沾ふ民草の限りは祝はでやは。謠はでやは。いでや、我間も取り入れ終らば、揃ひて喜びの神酒汲みかはんなど、いひあふ樣、いとも〲樂しげなり。かくてこそ、五月雨にぬれ、泥にまみれて、早苗とり、照りはたる夏の日に、背を晒して田草抜きたる、辛苦も忘らるゝなれ實に田家の樂しみは秋にあり。此のたのしさ、都人のいかでか得知る處ならん。とひとり心に思ふ中、手をひきたる少女の、學校にてや學びけん、寺もやさしく、此夏かけての辛苦にぞ、私のたのみは得ら行ける、幼き時より學びてぞ、貧き人とはなりぬべきと、うたひ出でたる、何心も無うての樣にはきこえしものから、折につけていと憐う覺えしか。兎角する中、幼き從弟の、晝餉の時來りたり、歸り給へ〲とよぶまゝに、亦返りて、叔母君が手づくりのもの、なかしう料理し玉へるが、いと珍らかにて、舌鼓打ちならしつゝ、たうるべ終りぬれば、母上の此の短き日脚に、長居して、勞みの業妨げんは心無き限りなれば、又

こそさ、暇乞ひ玉ふに、いつまでもかゝる面白き處にて　遊び暮さまほき心を、はげましてかへりぢにつきぬ。

田中廣子

又の試驗も程なければ、書見に餘念なかりしに、折柄たもての方に、郵便さの一聲、心うれしく、封押しけば、こはそも久しう無音の友より山べわたりは、此頃のけしき一入なれば、一日日曜をトして訪ひ給へさの便なりけり。いさうれしうて、心あわたゞしく、仕度をさゝのひ、人車を走らせ、そが許にさ急がすれば、程なう心さす處につきぬ。人々出でむかへ、友なる君は殊更なつかしげに、手を携へて、奥の一間に導きぬ。あなうれしの君よ、ようもけふこそは尋ね來りしよ。かくもむさぐるしきあばら家なれど、氣をゆるらかにもち給ひねさ、親切に茶菓など進め、さりどりめづらしき物取り出で、こまごまさささし示しつゝ、學びの窓にあり昔しの雜話など、互に心おきなく語りあひ、面白き樂しさに、心もうばはれて、むら鳥のねぐら求むる聲だにも、露耳には入らず、いさ興じあひぬる折しも、夕をしらする遠寺の鐘に、驚かされて、いさまごひせんさ、せりしにあな、君よ、これよりこそ山里の遊びは面白きなれ、今しばしさ、押し止められて、いなむに由なく、さらばさて、又しり打ちすゑ、猶も言葉をつゝけて、しばし物語るまに、神無月のかげほそう、星さへ二つ三つ出でたるに、打驚ろき、今こそはさ思ふ折しも、遙か彼方に、さわさわさ物さわがしき音聞ゆるに、いさ胸つぶれて如何なる山人の仕業にか、はた龍にてもかゝりぬしか、又こはき物などのありてかさ、あやしきまゝに尋ぬれば、さにあらず、あれこそは、我里の晩秋の見物なれ、君に見せまほしきは、彼のけしき也。いざさてはしため二人伴ひて、共に座を立ち行き見れば、道程もなきみやしろの森なりけり。こゝ見渡す限り、大小の樹木立ち並びて、繁茂し、東風吹けば、木々の梢はからくさして、さながら落雷の如く、地上にちり亂るゝ木の葉は、月に映じて、恰も黄金の降りしきるかさ疑はる、時の間に四五寸地上を埋め、かよわき我等が足までも、かぶりきていさ心地よし草むら毎にすだく虫の音は、ほそうよわりて、絶々にあはれをかしきこさのしら

べにもまりて、またなくめでたき見物なりき。

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題　　住所　姓名

…………………………

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むし。

文書式

題　　住所　姓名

……、……、……。……

用紙は半紙二つ折の事。字體は楷書にて鮮明に記し、句讀點を施すべし。

全國新聞雑誌賣捌所諸君ニ謹告

今回弊堂等併合の上合資組織となしたるの主眼は專ら御得意諸君の御便益を増進せんと欲するにあり

抑も弊堂等が新聞雑誌類大賣捌業の開始たる世に新聞紙の生れたる當時相前後して起り爾來幾多の星霜を重ね積年の經驗と各發行本社の信用とにより今日の盛運を致し且兩堂各自商品日々の取扱數に於て府下に冠たる所以のものは御得意諸君の保護其厚きに憑らずんはあらず而して御得意中多くは右種を甲堂より左種を乙堂より類別の取引に係り爲めに**二重**の通信費遞送金費其他有形無形の勞費あるを以て是等を第一着に**減殺**し尙は着々歩を進むるの方針に御座候間將來倍々御引立の程奉希望候也

明治三十一年九月

合資會社東海堂
信文堂
合同改稱

東京市京橋區尾張町二丁目廿六番地

東海
信文
合資會社

歌集出版 予約出詠 募集廣告

從八位　島多豆夫先生選

諸大家題詠序跋

類題正葩集

●全一冊●洋裝小形頗美本●紙數二百頁以上●正價金貳拾五錢●豫約特價金貳拾五錢●郵税四錢

今回本會に於て明治歌人の詠歌を編纂し島多豆夫先生の選を經て本集を刊行し以て明治の歌集として永く後世に傳へんとす希くは江湖諸君金玉の詠を吝まず奮て投稿あらんことを

●投稿者注意

●正葩集へは何人と雖も投稿する事を得べし●詠草は半紙に認め住所姓名雅號を詳記し十一月末日限投稿あるべし●歌題は四季戀雜新題等隨意とす但短歌に限る●入花料短歌一首五厘宛一人に付十首以上制限なし（幾百首にても差支なし多數出詠する者は隨て多く選入せらるべし）●附錄として某大家の歌集を添ふ

●豫約出版法

●豫約申込期限十二月末日限●豫約申込は總て前金を要す●豫約期限後は正價に復す●製本出來期限は一月末とし申込順序により送本す●廣告料一頁二圓●送金郵劵代用は一割増とす爲替は出雲國杵築郵便局宛

豫約申込出詠届所　出雲國杵築町　正葩會

編輯主任　島宮太郎

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第八版

三輪田眞佐子女史著

女子乃本分

金銀摺彩色表紙　大和綴最優美

全壹册

定價金廿五錢　郵稅金六錢

本邦固有の道德に基きて、我か國の婦女が盡すべき本分を明にせるもゝ之を三輪田眞佐子女史の「女子の本分」となす本書が女子社會に如何に珍重せらるゝかは世間既に定評あり、敢て贅せず。

●所載極めて擴大試に其目次を示さむ●

東京京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　（電話本局八八）　國光社

再版　生田目經德編　再版

製本　大和綴　美麗版

定價　金二十五錢
郵稅　金四錢

標註 雅文消息集

日用消息文の摸範は之を中古文にとらされむ雅馴なる言詞艶麗なる文章を綴りがたしこの篇専ら心を用ひて古人の消息文中より高向にして雅致なるものを採り

春の部　廿七編
夏の部　十六編
秋の部　十九編
冬の部　十一編
雜の部　二十四編

の各部に別ち註釋最も懇切に參考者の便よからんことをはかれり……又

北畠親房の吉野御事書案
源頼朝の三河守範頼に答ふる書
島津忠の垣人におくる書
德川家康の二代將軍の方への教誨文
俊寛僧都女の父の鬼界島にあるにおくる文、
大高源吾の母におくる書
小野鶴女の夫釆女正に遺す文

の三十七頁の附錄を添へたり

斯道に志しあるもの一本を坐側にそなへて摸範となさむ益を得ること大なり

杉谷正隆編

家庭歌訓 修身百首

本書は我が國古今の和歌の中に就きて格調高遠旨趣純潔にして修身の訓誡となすべきもの一百首を撰び之に明快なる義解と假名とを附し誰人にも一讀其本義を了得し大に發明する所あらしむ四方の淑女諸士進んで此篇を讀みて德器を養ひ給へかし

全一冊　菊版美本
定價金二十錢
郵稅金四錢

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　（電話本局八八）　國光社

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事
○郵便爲替は東京**新富町**郵便取扱所へ御振込可被下候○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書料送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊前金（三ヶ月分）	十二冊前金（半年分）	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治三十一年十月四日印刷
同年十月五日發行

編輯兼發行人　東京京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衞
印刷人　東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木艮雄
發行所　東京京橋區築地二丁目二十一番地　（電話番號本局八八）國光社

男爵高崎正風先生序　本居豐穎先生序

故富士谷御杖先生述

土佐日記燈

（明治廿四年八月四日內務省許可
明治廿五年三月十二日遞信省認可）

菊版 大和綴製本 頗美麗

全 自一卷至八卷 壹千五十頁 合三册

正價金一圓五十錢

郵送料 四種郵便三十錢●小包十里迄七錢百里迄十二錢百里以外廿四錢

本書發行の由來

富士谷御杖の翁斯の道の學に至り深かりしは今更にいはずそのものせられし著書はれかるが中に燈といふもの古事記燈、萬葉集燈は翁か在世の頃にゑり卷となりて、世に廣こりしも、この土佐日記燈は早く文化の末つかたになれるものなるかさるよしありて時の栗田の宮の請はせらるゝに稿本のまゝ奉られしを、後いくはくも、なくて翁はみまかれしかは、さなからに埋もりて流布せずなりにき、世の學者見まほしふすれども、さるよしもなくて空しく年經ぬること茲に數十年、さるを翁の男元廣ぬしかさるべき筋より辛うして寫し傳へたるを、いとうれしくて、こたひ我社にて、摺り卷にものして廣く世に流布せしめてんとす抑々此燈は世にありふれたる註釋書の類とはことにして、貫之朝臣のこの日記を書かれしはかりそめのすさひにあらず、土佐の守に任されしを深く憤る由ありて、あらはには女のものせしさまになし深き心はその言葉のうちに、ふくめたりといふを、本として言詞は更なり文意をもいと委しく解なしなからいと廣く考證をも引き出でられたり

謹告

本書發行の儀曩に[illegible]告せし[illegible]り續々御注文に候處聊か差支これあり製本に意外の日子相費し申候今回完く整頓相告げ茲に發賣致候大方の君子陸續御注文あらんことを

發行所 東京京橋區築地二丁目 國光社

賣捌所 各府縣書肆

最寄書肆に無之時は直接本社へ御注文被下度候

印刷所 東京國光社印刷部